

新しい幸福論：経済学からの接近



橘木俊詔 (京都女子大学客員教授、京都大学名誉教授)

1943年兵庫県生まれ。小樽商科大学卒業、大阪大学大学院修士課程修了、ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了。経済学博士。専攻は労働経済学。京都大学大学院経済学研究科教授、同志社大学経済学部教授等を経て現職。2005年度日本経済学会会長。著書に『家計からみる日本経済』（第25回石橋湛山賞受賞、岩波新書）、「『幸せ』の経済学」（岩波書店）、「日本人と経済——労働・生活の視点から」（東洋経済新報社）など多数。

Toshiaki TACHIBANAKI

幸福論、すなわち人はどういうときに幸せを感じるかという話題は、ギリシャ哲学の時代から考えられてきたことでわかるように、哲学や倫理学が主として扱う分野であった。そして宗教が中世から近世にかけて世界中で広がったので、宗教を信じるのが幸せになるかが論じられるようになった。人のことを書く文学も当然のことながら幸福を扱う分野であった。

その伝統は最近まで続いていて、三大幸福論と呼ばれるスイスのヒルティ、フランスのアラン、そしてイギリスのラッセルによる書物は、宗教学、文学、哲学からの接近と言ってもよい。近代になって社会学が隆盛し、社会学は皮肉を言えば何でも扱う「……の社会学」で示される学問なので、社会学も幸福を論じ始めた。そして忘れてならないのは心理学である。人が幸福や不幸を感じるのは、人の心や精神を通じての発露なので、心理学も幸福を論じるようになったのである。

では私が専門とする経済学はどうか。経済学は人文・社会科学の中で幸福論からもっとも遠く離れていた、といっても過言ではない。しかし非常に狭い定義の下では幸福を扱っていた。新古典派経済学に「効用」という概念があり、人々は自己の所得を使って、品物の購入や消費に用いると、効用 (utility) が発生するとみなした。効用を満足と解すると幸福につながる概念でもある。ただし、ここでの消費なり効用というのは、お金を使って食事をしたり、衣服を買ったり、あるいは自動車といった物を購入したとき、あるいは余暇の

ためにお金をつかったときのみが生じる効用、満足、幸福なのである。

なんと経済学者は消費という経済行為にしか注目しないのかという批判はありえよう。経済学がお金を扱う学問なので宿命かもしれない。結婚した、子どもが生まれた、ある宗教に入っている、親しい友人ができた、ある仕事に生きがいを感じた、といった非経済活動が幸福を生むという事実を無視してきたのである。哲学をはじめ他の学問分野においてはこれら非経済活動こそが幸福の源泉と考えてきたので、経済学は幸福論の中では異端の存在であった。しかし最近になってこれらの非経済活動も経済学で考慮すべきとの声が強くなり、ようやく経済学も幸福論の仲間入りができた。しかしまだ発展途上であることは否めない。

1つだけ経済学で価値のあることは、人が所得を稼ぐには働かねばならないが、働くことは身体的・精神的につらいことなので、「不効用 (不満) ないし不幸」の源泉と考えてきた伝統がある。所得を稼ごうと思ったら、不効用・不幸を覚悟せねばならず、消費による効用・幸福との兼ね合いを分析した歴史があり、これは経済学がこれまで果たしてきた幸福論への貢献と言ってもよい。

私は『「幸せ」の経済学』『新しい幸福論』（ともに岩波書店）などを出版して、ここまで述べてきたことに関する試論を提供した。皆様の参考になれば、それこそ「幸せ」である。

幸せはローカルから

——幸福度指標をめぐる課題と展望

西川太一郎荒川区長インタビュー

インタビュアー | 広井良典 (京都大学こころの未来研究センター教授)



西川太一郎(にしかわ・たいいちろう) 1942年(昭和17)荒川区生まれ。早稲田大学商学部卒業。東京都議会議員4期16年、衆議院議員3期10年4カ月。この間、防衛政務次官、教育改革国民会議国会議員代表、経済産業大臣政務官、経済産業副大臣を歴任。2004年(平成16)11月、荒川区長に就任(現在4期目)。2011年、特別区長会会長に就任(現在4期目)。2013年、住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合(通称「幸せリーグ」)会長に就任。

「幸福度」への取り組み

広井 荒川区では、荒川区民総幸福度(GAH: Gross Arakawa Happiness)ということで、幸福度に関する政策を先駆的に進めておられます。まず、「GAH」に取り

組まれるようになったきっかけについてお話してください。

西川 14年ぐらい前、月尾嘉男¹⁾先生がNHKのテレビ番組に出ておられて、こんな話をされました。ヒマラヤのふもとにブータンという小国がある。その国王は、仏教哲学に基づいて、キリスト教的に言えば「人はパンのみにて生きるにあらず」という精神性を重視し、国民は社会奉仕や、自分自身の生きがいを見つけて暮らしている。非常に尊敬すべきだと。それを聞いて、偉いものだ、一度こういうところを訪ねてみたいなと思って大きな本屋さんに行ったのですが、当時はブータンを取り上げた書物はそんなにございませんでした。

そこで、月尾先生をお訪ねして3時間ぐらいお話をしたんです。「西川さんも忙しいだろうが、ブータンに1回行かなきゃね」なんて言われて、「そうですね」と言って。結果、私は行けなかったのですが、後に荒川区長になってから、職員たち3人がブータンを訪ねました。

帰国してから、行った職員が区内で何度かレクチャーをやって、町会長さんたちにも大勢聴きにきていただきました。それでしばらくの間、「なんで区長はブータン、ブータンと言うのか」と言われました(笑)。

広井 そうでしょうね。今でこそブータンは日本でも親しみを感じる人が増えましたが、当時はまだどこに

あるのかを知る人も多くなかった。

西川 そうなんです。でも、今の国王²⁾が日本にお見えになって、その歓迎会で私は秋篠宮様のうしろの列で並んで握手をさせていただきました。

広井 東日本大震災のあった2011年(平成23)の11月ですね。

西川 そうです。「われわれはいまブータンをモデルに研究させていただいて、Gross Arakawa Happinessということを考えているんです」とお話しすると喜んでくださいました。「Gross Arakawa Happiness」は省略して「GAH」(ガー)と言いますが、「ガー」はあちらの言葉で「幸せ」という意味なのだそう。

広井 これはまたすごい偶然ですね(笑)。

区長に就任されたのは2004年で、GAHを提唱されたのが2005年でした。ブータンに職員の方を派遣された後に、GAHを提唱されたのですか。

西川 いえ、月尾先生のご教示でGAHを提唱したほうが先です。月尾先生から、幸福を求めるより、不幸だという人を減らすことのほうが重要だとして指摘をいただき、区長就任の翌年にGAHを提唱しました。

広井 実際には、どのように進められたのですか。

西川 まず住民の幸福度を測るために指標づくりを始めました。指標をつくるにあたって、2009年に荒川区のシンクタンクである荒川区自治総合研究所(RILAC: Research Institute for Local government by Arakawa City)を設立しました。このRILACが独自に調査研究を進め、さらに外部の専門家で構成する研究会を立ち上げて、社会倫理学、産業組織論、社会心理学、経済学などから見た幸福度について大変多くのご指導をいただきました。

また、区民の実感を重視した指標とするため、日頃から区民の皆様と接している若手職員でワーキング・グループを編成しました。事務職だけでなく、保健師や建築、土木、保育士などさまざまな職種の職員が広い視野を持ってGAHを研究しました。

こうして、6領域46項目からなる独自のGAH指標を完成させ、住民の方々にもアンケート調査にご協力をいただき、結果の分析を行っています。

広井 単に理念としてGAHを提唱されただけではなく、独自のシンクタンクRILACをつくられて、幸福度指標をつくり、精緻な形で丹念に指標の調査研究を始められたことはとても重要だと思います。調査の結果から、どんなことが分かりましたか。

西川 たとえば幸福の実感には健康が深く関わっていることが分かりました。また、地域の活動に参加している人ほど、あるいは、地域に頼れる人がいる人ほど幸福実感が高いという結果が出ています。一方、区内の約6割が木造住宅密集市街地であり、そういう面では区民の安全・安心に対する実感が低い傾向が出てい

ます。こうした区民が幸福を感じている領域や不幸や不安を感じている領域を知ることによって課題を把握し、施策等の改善や新たな施策の立案などにつなげることができます。

また、区では毎年、すべての事務事業およそ1千件について実績を評価し、事業の方向性を考える「行政評価」を実施しており、その作業において各分野の実感度を活用して、必要な事業を充実させています。

広井 荒川区では、単に指標を策定するだけでなく、それを子どもの貧困など個別具体的な政策課題に結びつけて展開していらっしゃいますね。

西川 GAHの研究のほか、子どもの貧困問題、親なき後の支援に関する問題、区民の幸福を支える地域力の研究、さらに広井先生に座長としてご協力いただいた、自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクトなど、さまざまな調査に基づく提言を区政に反映するようにしてきました。

「子どもは未来社会の守護者である」

広井 西川区長がそんなふうに関心を持って取り組んでいかれた背景はほかにもあるのですか。

西川 実は、わが家は京都の有名なお寺の檀家総代をやっていたんです。ところが、日露戦争のとき、私の祖父が退役して帰ってきて町会議員になりました。そして、クリスチャンになったんです。

広井 区長ご自身もクリスチャンでいらっしゃる。

西川 そうです。父も、お祖父さんの友人の牧師さんに洗礼を受けています。それで、キリスト様の「人はパンのみにて生きるにあらず」と同じ哲学を、ブータンの王様のワンチュック先帝が提唱されたと聞いて、これは素晴らしいな、と個人的に惹かれました。

それから、私は憧れていた学者が1人いました。それはアメリカの歴史学者、アーサー・シュレジンジャー・ジュニア³⁾です。ピューリッツァー賞やバンクロフト賞を受賞しています。ケネディ大統領の補佐官も務めていました。ケネディ大統領が非業の死を遂げられた後、NHKがシュレジンジャー先生に日本への講演旅行を依頼されました。それで1960年代の後半に来日され、札幌、東京、京都の3か所で講演をされました。そこで、私はいわゆる“追っかけ”を決め込んだのです。

広井 それだけ惚れ込まれた。

西川 ええ。ですから、私のハピネスに対する思いは、ブータンだけではなく、アメリカにもあります。

シュレジンジャー先生の歴史学者としての思いに触れて、特に「子どもは未来社会の守護者である」という言葉に打たれたんです。「自分たち大人は、いずれ天



広井良典京都大学こころの未来研究センター教授

に召されていく。しかし、その後、次の世代が子どもから大人に成長して、この社会を担ってくれる。単にいい学校に入れて、優の数が多ければほめるというのではなく、明確な理念を持って育ててこそ、子どもたちはちゃんと育つんだ。次の社会はそうやって育てた立派な若者たちによって形づくられる。未来社会の守護者は彼ら、彼女らだ。その子たちの教育をしっかりやらなくて、どうして大人の責務が果たせるか」という趣旨のご講演をしてくださったんです。それを聞いて、教育や幸福の理念をもって、それを政治にきちんと位置づけていかなければいけないという思いが、私の中に芽生えたのです。

広井 今のお話は、区長が幸福度というテーマに取り組んでこられた軸の1つですね。また、幸福度との関係で、子どもの貧困問題に積極的に取り組んでこられたことともつながります。

西川 行政の仕事はルーティンワークが多いんです。また、当時の区役所は、何人かで決めたことをそんなに強い思いを持たずにやっていることが多かった。私が区長になったとき、月尾先生に「荒川区でこの考え方を使わせていただきたい」とお願いすると、「ああ、素晴らしい。手伝うよ」と言ってくださった。それで、小規模でもいいから自治体独自のシンクタンクを荒川区につくろうと考えました。一面識もない学者の方々にお願いに歩いたり、広井先生のようにご縁があってお手伝いいただいたりして、いろんなことを私たちは学んで、それをまちの中で実践しています。

「荒川区職員ビジネスカレッジ」

西川 ところで、うちには町会が120もあるんです。

その町会長にハピネスを理解していただこうと考えて「ハピネス・サポーター・クラブ」をつくりました。「もう歳とったから引退して若い人に譲るよ」とおっしゃる町会長とか、定年で辞めていただかなければならない保護司さん、民生委員さんなどのOBの方をお願いをして、職を離れても地域の有力リーダー経験者としてGAHに加わっていただくようにしています。

それから、まず職員を同志に育てなければいけませんので、「荒川区職員ビジネスカレッジ」(ABC: Arakawa Business College for city officers)をつくりました。そこでは、広井先生にもたびたびお出まいただきましたが、いろんな大学から先生をお招きして、職員に教育をしていただく。それだけでは収まらなくなって、その上にゼミ課程もつくりました。

広井 ABCのシステムについてももう少し教えてください。

西川 ABCは荒川区の中に設置した組織内大学で、希望者が入学します。毎年、新人を含むおもに入区3年目以内の職員から50名を超えるエントリーがあります。1年次は教養課程です。各界の第一線で活躍されている方に講師になっていただき、政治、経済、国際情勢など、幅広い教養を身につけてもらいます。講義を聞くだけでなく、毎回レポートを書かなければいけないことになっています。課長級職員などが担任の教員になり、そのレポートを添削したり、意見を書いたりして返却する。それを1年間繰り返すのです。

2年次はゼミ課程です。荒川区で経験を積んだ部課長級職員に教授・准教授になってもらって、10人ぐらいの少人数で、活発な議論をしながら、行政職員としての生き方や仕事の進め方などを学習します。きちんとした成績を取めないと卒業が認められない。

開始時間は午後6時ですから、夜遅くなるので入らない、あるいは入れない人もいますが、入学はあくまで任意です。

広井 月に何回あるんですか。

西川 だいたい月に2、3回、全部で年間25回ぐらいです。これは荒川区の自慢話ではなくて、私は志ある首長が、職員を鍛えるシステムを日本の基礎自治体全体につくるべきだと思うんです。地方公務員の定年を延ばして生きがいを与えると同時に、もっと汗をかけ、学べということを私は本気でやっていきたい。荒川区はそのモデルになりたいと思っています。

広井 先ほどシュレジンジャーの話をしていただき、「幸福」という理念をもつことが非常に重要だということでした。行政の仕事も、とすればルーティンワークとか前例踏襲になりがちなところを、理念をしっかりと立てることで、職員のモチベーションという意味でも非常に活性化してくると思います。

それから、町会の話がありましたけれども、当然こ

これは行政だけで進める話ではなくて、最終的には住民の方々がそれにどうかかわっていくかが重要になってきます。荒川区は、町会の加入率が高く、地域コミュニティの力が大きい。区長も「地域力」ということを非常に重視して、「ハピネス・サポーター・クラブ」をつくられたわけですね。

聞くところによれば、荒川区は孤独死が少ないとか。また、外国人が多くダイバーシティがある地域であり、犯罪率が低いという特徴がある。このへんの地域力が、幸福度ともつながってくるのでしょうか。

西川 はい。そこをつなげなければ、自治体が提唱する理念は独善的になって、たまさか選ばれて4年の任期をいただく人間の恣意的な思いの実現に終わってしまう。それだけは厳に謹まなければいけないと思っています。

広井 職員の方を中心に、資質の向上に力を入れておられるということが非常によくわかりました。

西川 「志と能力の好循環」と呼んでいます。

広井 なるほど。それがGAHにも影響しているのでしょうかね。

今日、インタビューさせていただいているこの「ゆいの森あらかわ」⁴⁾という施設も素晴らしいですね。

西川 この施設も、構想10年で様々な方のお力をお借りして、職員たちに自由にやってもらったのです。振り返ると、区民が想像していたよりワンランク上のものをつくることができました。主権者の生の声に対する確かな反応ができるということが、自治体の値打ちを決める時代になったのではないかと思います。

そういう意味で、私は広井先生にお願いを申し上げたいのは、京都大学とか東京大学でガイドラインに近いものを開発して背中を押していただきたい。そうすると、「東京だからできるんだよ」という批判も弱くなると思うんです。私どもは、こう言われるのが一番つらいんです。確かに東京は、人材も、勉強する機会も多うございます。でも、各地の自治体が頑張ってる、初めて日本は良くなる。そのぐらいの気持ちを持つとうよと。そういうことで、いま特別区長会会長もお受けし、僭越ながら、若い区長さんたち、そして国に対してもお願いの先頭に立っています。

自治体の連合体「幸せリーグ」

広井 荒川区は、独自の幸福実感都市を目指してGAHの政策を進めておられると同時に、「幸せリーグ」⁵⁾を提唱されて、多くの自治体がそれに参加しています。「幸せリーグ」について、お考えをおうかがいできればと思います。

西川 優れた先輩や広範囲の行政と関わっていらっし



西川太一郎荒川区長

やる方々から、荒川区という狭いところだけではなく、志を同じくする行政の長が集まって、実務の壁をどうやって破ったらいいかとか、うちみたいな小規模なところでどういうふうにして幸せをつくっていったらいいかとか、そういうことをいっしょに考えていったらいいとおっしゃっていただいたんです。じゃ、みんな集まってやろうよと。

実は、行政の長の集まりは、全国レベル、地域レベルでいろいろあるんです。でもそこへ行くと、国のお役所が出てきて、そちらの理念が中心の連絡場所みたいになったりする。そうではなくて、もっと本音で語れて、それぞれの地域特性を守りながら、住民、主権者の幸せをどうやってつくるか、そのために職員の能力をどういうふうで育てていくかという点に絞って知恵を出し合う連合体「幸せリーグ」の設立を呼びかけました。いま100カ所ぐらいから参加していただいています。

それも、たとえば東京で全国市長会に合わせて集まるというふうにはしていますから、効率もいい。みんなですらに広げていこうと話がまとまっております。私たちは、これをもっと育てて専門的なものをつくろうと思っています。

広井 いいですね。たとえばブータンのGNHは、あくまで国レベルでやっている。そうではなくて、それぞれの地域がローカルなレベルから「幸せ」を考え、指標をつくり、自分たちの地域をどういうふうにしていくか考えていく。これは本当に素晴らしいことで、その連合体が「幸せリーグ」なのですね。

明後日「幸せリーグ」の総会があるときに、京大こころの未来研究センターの、私を含め数名が参加させていただいて、「幸せリーグ」とセンターでいろいろ連



「荒川区立ゆいの森あらかわ」のゆいの森ホールにて

携をさせていただければと思っております。

西川 ぜひ、よろしくお願いします。

広井 「こころ」との関連にもなりますが、幸福のテーマは、広い意味での精神的な拠り所とか、信仰といったものと非常に深くかかわっておりますね。区長のお考えのバックボーンにクリスチャンでいらっしゃるということがあって良かったです。今の日本ではそういう精神的な拠り所みたいなものが、失われがちなところがあると思います。

西川 私のキリスト教はずいぶん寛容なキリスト教で、公明党の演説会や自民党の演説会にも行きますし(笑)、もう超党派でやっています。

広井 最近、韓国の自治体から、荒川区のRILACに視察に来られたとか。

西川 仁川市の特別区の区庁長さんですね。

広井 以前はフランスからも見学に来たそうですし、国境を超えて、各国の関心の的になっている。そういうネットワークとして広がっていくのも素晴らしいと思います。これからさらに面白い展開をしていくのだろうと思います。

今日は非常に印象深いお話をうかがわせていただきました。ありがとうございました。

西川 こちらこそありがとうございました。光栄でございました。

(2017年6月5日、「ゆいの森あらかわ」にて)

* 撮影：中野昭夫

注

- 1) 1942年生まれ。東京大学名誉教授。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。環境保護や地域計画にも取り組む。著書に『環境共生型社会のグランドデザイン』(NTT出版)『縮小文明の展望』(東京大学出版会)『地球の暮らし方』(遊行社)など。
- 2) ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュック第5代ブータン国王。1980年生まれ、2006年即位。2011年11月に来日して行った演説は東日本大震災後の日本に勇気を与えた。
- 3) Arthur Schlesinger, Jr. (1917-2007)。ピューリッツァー賞、外交や南北アメリカの歴史をテーマとした優れた書籍に与えられるバンクロフト賞を受賞。『アーサー・シュレジンガー教授講演集』(日本放送出版協会)、都留重人監訳『アメリカの分裂——多元文化社会についての所見』(岩波書店)など多くの本が翻訳出版されている。
- 4) 「荒川区立ゆいの森あらかわ」は2017年3月開館。中央図書館、吉村昭記念文学館、ゆいの森子どもひろばが一体となっていて、あらゆる世代が活用できる施設。
- 5) 「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合(通称：幸せリーグ)」は幸福な地域社会づくりを目的として2013年6月5日に設立された。

こころ・幸福・未来

出席者：河合俊雄(京都大学こころの未来研究センター教授)

広井良典(同教授、司会)

内田由紀子(同准教授)

阿部修士(同特定准教授)

熊谷誠慈(同上廣倫理財団寄付研究部門特定准教授)

学問のパラダイムを超えて

広井良典 『こころの未来』第18号のテーマは「幸福と社会」です。最近、「幸福」というテーマが新しい形で浮かび上がってきています。1つは、心理学、経済学などさまざまな学問領域で、「幸福」「ウェル・ビーイング (well-being)」といったテーマが立ち上がってきている。もう1つは社会的な文脈です。GDP (Gross Domestic Product: 国内総生産) では本当に人々の豊かさや幸せは測れないのではないかと、GDPに代わる豊かさの指標が活発に議論されている。ブータンのGNH (Gross National Happiness: 国民総幸福)¹⁾は有名ですし、国際的にもいろいろ影響を及ぼしています。

国内的には、先日、河合先生と熊谷さんに参加いただいた「幸セリーグ」というのがあります。東京都荒川区が「Gross Arakawa Happiness」²⁾を提唱していて、それに共鳴した100弱の自治体が参加して、「幸福」のテーマをいろいろな形で浮かび上がらせています。

もちろん、いいことばかりではなくて、そもそも幸



広井良典教授

福なんて指標化できるのかとか、佐伯啓思³⁾先生は『反・幸福論』という本を書かれていますし、「幸福」をただ研究して議論すればいいという話でもありません。そういう課題や疑問点も含めて、自由にお話してください。

個の幸福と全体の幸福のバランス

内田由紀子 私は長く「幸福」の研究をしています。私は文化心理学者なので、幸福そのものの研究というより、比較文化研究をする上で、幸福は非常におもしろいキーワードの1つだと思って、大学院生のころから研究をしてきました。

幸福というのは、どの文化、どの社会にいる人たちも求める、非常に重要な感情、あるいは人生に対する評価として捉えられますが、一方で、幸福が非常に一律的に定義されてきているのではないかと思います。

たとえば、特に北米とかヨーロッパを主流とする経済学や心理学の流れの中で、幸福というのは基本的にポジティブな感情であって、それをどのように増やしていくべきか、幸福を増やすために個人がどのように努力をするか、社会は努力する個人の自由をどのように担保するかという、ある種、西洋的な契約論に基づく捉え方をしてきたのではないかと思います。

これに対して、日本の幸福は、幸せ過ぎると逆によくないのではないかと、1人だけ幸せになることが本当に社会全体にとってよいことか?といった問いかけが、幸福の定義の中に含まれている。もちろん、自分の幸福が社会にどう影響するか、個の幸福と全体の幸福のバランスをどう考えるかというのは、どのような社会においても1つの重要なテーマだと思います。

たとえば、自分が楽をしてゴミを捨てたい。それは自分にとってはある種その場では快樂につながる。けれども、みんながそういう行為をすれば、町全体にゴミが増えてしまう。結果として自分の環境も悪くなってしまふ。こうした「共貧」に陥るのを防ぐためにどうすればいいかといったことが社会科学の大きなテ



内田由紀子准教授

マとしてあります。もしかしたら自分の幸福が、全体に対してネガティブな影響となって、それがいずれ自分に返ってくるのではないかと考える。

日本の社会は、特に他者との協調性や運命共同体性が強いので、こうした社会とのバランスにまつわる問題が多分に含まれて幸福が定義されていると思います。

それから、幸せ過ぎることに対するある種のブレーキがあります。人生全体としてトータルのバランスのようなものを考える志向性がありますね。ラッキーなことが続くと怖くなったり、あるいは不幸のどん底でも、逆に、これは何かの契機であるとポジティブに考えようとしたりする。こうした人生観が幸福感にも影響している。だから、完璧に幸せであるより、70点ぐらいが理想と答えるような傾向があります。

そういうことを元にして、幸福の指標をつくっていく上で、たとえばOECD（経済協力開発機構）が発表している世界共通の指標で幸福を測っているのかどうかという問題があります。それぞれの国が持っている価値観を含める必要もあるのではないかと。一方でそればかりだと相対比較ができなくなるので、他所と相対的に比較をすることと、独自の価値観を踏まえることのバランスが指標づくりには大切です。それが私の幸福に対する取り組みです。

広井 いま内田さんから、幸福を巡る文化差の話として、個人と共同体、中庸を求めるかどうか、比較の問題など、いろいろ重要な論点を出していただきました。

不幸や苦を基本にする仏教

熊谷誠慈 私自身は仏教学が専門で、インド、チベット、ブータンあたりの仏教と、ヒマラヤの土着宗教の

ボン教の哲学について研究してきました。

こころの未来研究センターに入って、内田さん、阿部さんと一緒に、幸福を研究するプロジェクトをやることになり、非常に困ったのは、仏教では「幸福」という概念について、あまり直接的に議論されないということです。仏教においては、常にその対立概念である「不幸」に焦点が当てられています。ですので、「幸福」について考えてくださいと言われても、これまで読んできた文献には「幸福」という言葉はほとんど出てきたことがないので、答えに困りました。

仏教では、人間というか、生き物はすべて苦悩を抱えているという前提から出発して、その苦悩をどうやって除去していくかが重要となります。苦悩がまったくない状態というのが、一部の「菩薩」であったり、「仏陀」といわれる部類で、また「阿羅漢」もそこに含まれます。仏陀の状態にどう近づいていくかということが、仏教の目標なのです。ですから、快楽をどう増やしていくかということではなくて、不快や苦しみをどう除去していくかという方向に進んでいくのが仏教なのです。

そのような事情から、最初は「幸福」をテーマとすることに困っていたのですけれども、仏教国で幸福という概念に直接的に着目している国はないかなと探してみると、まさにブータンという国がGNH（国民総幸福）という政策を行っている。ただ、このGNHという政策に関して言えば、不幸を減らすというよりも、幸福を増大させるほうに比重が置かれているように感じます。幸福を増大させるというよりは、満足度を高めようとしていると言ったほうが正確でしょうが。

ブータンが、仏教とGNHという幸福政策をどう関係づけているかということ、基本的には、仏教のもつ宗教的な側面を政策から切り離そうと努力をしています。というのも、ブータンには仏教徒以外にもヒンドゥー教徒など、多宗派の国民が多くいますので、仏教の宗教的側面を押し付けてしまうと、それを宗教的に受け付けられない国民がでてしまうのです。あくまで仏教の中でも非宗教的な側面を政策の中に取り入れようとしているのが、ブータンの幸福政策の特徴だと思います。それで、仏教徒でなくてもGNHに納得して進めていける。仏教の幸福論、不幸論、どちらでもいいんですが、重要なことはその適用範囲です。

先ほど、個と集団という話がでていましたが、個については同じですね。私自身の不幸をどう除去していくか、幸せをどう増やしていくかということです。集団となったときに、人間だけでなく、神とか動物とかを含む「六道」も入ってくる。いわば自然全体の幸福をどう高めていくかということが、仏教的な幸福ということになります。



熊谷誠慈特定准教授(上虞倫理財団寄付研究部門)

もう1つ重要なのが時間軸です。幸福といった場合、一般的には生まれてから死ぬときまでを考えますが、仏教には輪廻という概念がありますので、この一生の幸せだけではよろしくない。来世はどう幸せになっていくかということも考えながら、現世の幸福論を語っていくことが重要になってきます。ブータンの政策面においては、輪廻思想がうまく避けられています。

ブータンは、仏教的な幸福論と世俗的な幸福論が混ざったようなとてもおもしろい国で、そういう背景をもつ国がつくりだしたGNHという政策が、奇しくもわが国に取り入れられ、荒川区を中心に「幸セリーグ」にもつながっていくというのは非常に興味深いことです。

広井 仏教はもともと不幸とか苦を基本にしている、キリスト教も基本に現世否定があると思うんです。ブータンの場合も、単線的に仏教がGNHに結びついているというより、宗教的な部分と政策的な部分がある程度切り離して展開しているというご指摘が非常に印象的です。

熊谷 そうですね。できているかどうかは別として、そのような意図が明確に感じられます。

幸福という概念と脳の研究

阿部修士 私は認知神経科学が専門なので脳の研究をしているのですが、正直言いますと、幸福という概念と脳の研究はなかなか結びつきにくい。それは当然と言えば当然で、幸福はかなり長いタイム・スケールのもを含んでいて、そちらのほうがメインだと思うのですが、われわれがやっているような脳の実験は、瞬間瞬間の脳の活動を捉えてやるのが一般的です。それで

幸福観の研究プロジェクトをやることになったとき、どうしようかなと思いました。ただ、自分が今までやってきたこととまったく無関係ではないし、「幸福」というのは非常に重要なキーワードであることは間違いない。いろいろ模索していく中で、頭がまとまってきたかなというところがあります。

脳の研究だと、たとえば快の感情、情動というものがあったり、あるいは報酬系の情報処理ということであったり、一瞬の快樂の研究が多いんです。幸福というものを見ようとすると、複数の軸が込み入っているので、その指標をつくるのはむずかしいというお話がありました。幸福と脳とを対応させることも、さうとう気をつけなければいけないし、慎重であらねばならない。少し研究を模索してみて、そういう思いが改めてしています。

そこで、どういうアプローチがあるかなと考えたとき、幸福度が高い人のほうが健康だという知見は古典的にあります。ところが、脳の健康に着目しようかとなったとき、いま、脳の研究でどういう状態が健康かというのがあまりよくわかっていないのです。

これはけっこう大きな問題で、たとえば、血圧やBMIだったら、このへんの値なら健康ってありますよね。でも、脳はまったくないんです。たくさんのデータ・ベースを使って模索することは必要だと思っているのですけれど、なかなかむずかしい。

それでも、脳の研究が幸福を考える上でまったく役に立たないかというと、そんなことはない。たとえば、私たちは心理学の用語で「オプティミスティック・バイアス」と言いますが、物事をそのまま受け入れているのではなくて、かなり楽観的に考えるというバイアスがかかっているのです。それに対応する脳のメ



阿部修士特定准教授

カニズムもある程度わかってきています。

結局、私たちが何を幸福と感ずるかという主観的な感覚は脳が規定しているので、幸福は脳がコントロールできる範囲でしか基本的にはあり得ないわけです。なので、人間はこういうバイアスがあるんだとか、こういう能力の制約があるんだ、そこには脳のこういう構造的あるいは機能的な制約がある、ということベースにできます。私たちは幸福であるためには、どういう規範を考えなければいけないとか、あるいはみんなが平等であるためにはどうすればいいかということを考えるときにも、人間は基本的に不平等が嫌だと本能的に感ずるという神経科学の知見を組み込める。つまり、人文社会のほうで幸福を論じるときに、サポートになるかなという思いがあります。

そういう意味で、脳の研究からわかってきたことをワン・クッション置くことで、幸福であるためには何ができるんだろう、何を考えなければいけないんだろう、といったことに貢献できるかなと思っています。**広井** 最初、脳神経科学は一瞬一瞬の動きを追うと言われました。「ヘドニック (hedonic)」と「ユーダイモニアック (eudaimonic)」というギリシャ語の区別があり、前者は快楽的、後者は精神的な意味の幸福ですね。後半では、規範とか平等とかと結びつける形で、いまの脳神経科学は幸福であるための前提を考える基盤を提供するような動きが出始めているということで、このへんは後でまた議論したいと思います。

幸福を積み重ねとして捉えない日本人

河合俊雄 私の専門は臨床心理学で、心理療法では不幸にかかわることが多く、「幸福」はどれだけ自分の分野で大事なのかなと疑問に思っています。以前、心理学の雑誌で幸福について書かされたとき、心理療法とか臨床心理学の中で幸福がどれだけ取り上げられているかと調べたんです。やはり少なく、いまはそれらの内容が思い出せないぐらいです。

そういう意味で、たぶん心理療法の分野で幸福に関係することをやっているのはトランスパーソナル⁴⁾系ぐらいです。自己実現とか、日常よりもっとスピリチュアルな高さに上っていくんだというアメリカ的な発想で幸福を考えているところがある。

それに対して、自分がやってきたことを考えると、博士論文で扱ったのがユングとハイデッガーで、「存在」に興味があったのです。心理療法をしていても、自分の存在っていったい何だろうと考えていた。

だから、さっき熊谷さんが言われたように、人は死んだらどうなるんだろうとか、死とは何だろうとか、そういうところに関心があった人間に、幸福の話をし



河合俊雄教授

ろと言われても、すごくむずかしい。

もう1つは、さっき内田さんが文化的な視点について言われて、それも触れたいと思うんだけど、歴史的な視点もすごく大事で、個人の幸福という概念はヨーロッパ近代の観念だと思うんです。

それに加えて、個人の欲望だけではなくて、他者の欲望ということが、20世紀になって言われ始めた。つまり、私が幸福なだけで、それは結局、誰かに望まされているのだとすると、そんなことでいいのかみたいところが、幸福に対して歴史的に言えると思います。

そして、文化的に言うと、たとえばドイツ語圏に行っても、幸福ってむずかしいわけです。「ハピネス (happiness)」をドイツ語で「グリュック (Glück)」と言うとすごく瞬間的なこと、「ラッキー (lucky)」に近いです。一方、「ヴォール (Wohl)」と言うともう少し恒常的なものになって、そこは分かれていて、なかなかむずかしい。

日本人の概念としてあるのが、「厄」という考え方です。うちの親が家を建てたころ、母親から散々聞かされたのは、何々さんは家を建てたときに足を骨折した、何々さんは病気になったって、何か呪いを聞いているみたいでした。「厄」を避けるために「厄払い」が必要になるということで、右肩上がりという発想って本来日本にはない。バランスというか、いいことがあったら悪いことがある、悪いことがあったらいいことがある。増えていくという発想はないのではないかなと思います。

もう1つ幸福について考えさせられたのは震災です。阪神・淡路大震災のとき、自分自身が被災して、次に東日本大震災のとき、こころのケア活動をやった思っ

ただけど、日本人は幸福を積み重ねとして捉えていない。「無常」と言われるように、何もなかったところをベースにして生きているんじゃないか。だから、全部なくしても、けっこうみんな強い。

神戸の大震災のときも、ふだん、近所は何の関係もなかった。けど、震災が起こると、みんな当然のように助け合う。何もなくなったところで出てくるのが縁とつながりなんですね。すると、「幸福って安っぽいな」とか思ってしまう。そういう意味で「幸福」は全然興味がなかったんですが、こころの豊かさなるものを研究することになって、豊かさって何だろうと考えていくとき、心理療法をやっているのは、けっこうマイナスがプラスに転じるということです。わかりやすい話は、たとえば、子どもが不登校になったことをきっかけとして夫婦の関係が改善するとか、マイナスから豊かなことが起こる。

極端なことを言うと震災だってそうで、震災はすごいマイナスなんだけれども、それをきっかけとして出てくる豊かさみたいなものに注目したいなと思っています。

それは、旧来の「結局、プラス・マイナスはゼロですよ」というのとはちょっと違う。「何かいいことがあったら悪いことがあるね」じゃなくて、不幸というのは自分にとっては異物なんだけれども、異物が自分の中にちゃんと入ると豊かになるはず。そういうモデルを考えながら、幸福ってもう少しダイナミックに、弁証法的に見ていくとおもしろんじゃないかなと思って、研究を始めているところです。

「拡大成長」と「足るを知る」

広井 私は大きく言うと、かなり異なる2つの幸福の概念があると思っています。1つは、今日も話題になっている近代的な幸福概念で、あくまで個人がベースで、功利主義的かつ利潤極大化みたいな感じで、私のよく使う言葉だと「拡大成長」志向というものです。

もう1つの幸福概念は、時代的に言えば近代的なものではない、前近代的か、もしかしたらポスト・モダンとか非西洋的であったりする。それは個人というより、河合先生や内田さんのお話にもありましたが、もう少し共同体というか、関係性を重視しています。あるいは「拡大成長」より「足るを知る」という議論もありますが、自足とか、安寧とか、ピース・オブ・マインドというような感じを志向するようなものです。内田さんの文化差の話ともつながりますけれども、幸福概念をもう少し大きな視点で見直す必要があるのかなと思います。

それから、河合先生の話や、熊谷さんのお話にもあり

ましたが、「幸福」と「不幸」という言い方はちょっと単純ですが、プラスとマイナスのダイナミックなところですよ。

荒川区の政策の議論でもよく出てくるのですが、幸福というのは、最終的には個人は多種多様だから、一義的に決められるものではない。ただ、不幸というのは、言い方はおかしいかもしれませんが、ある意味で客観性がある。だから、幸福を増やすことよりも、不幸を減らす、何が足りていないかを発見して、それを優先課題として取り組むことがより重要なのではないかという議論です。そういう幸福と不幸とか、マイナスとプラスというような話を河合先生が提起してくださって、いろいろな論点が出ましたので、あとは、それぞれ自由に話していただければと思います。

幸福のパラドックス

阿部 さきほどの功利主義の話に関連する点ですが、私がボストンに留学していたときにお世話になったジョシュア・グリーンは、道徳判断の研究で著名ですが、もともとは哲学者で、幸福のことも彼は考えていました。基本は功利主義でいいんじゃないかというのが彼の主張で、ただ、功利主義という言葉が、さっき広井先生がおっしゃっていたような、経済の成長拡大で、富＝お金というふうに考えられているけれども、もともとの功利主義の発想をよく読んでみると、大事なものは効用であって、何かアクションをしたときにみんながハッピーになること。それはべつにお金に限らない話で、効用を大事にしつつ、私が幸せになる権利とあなたが幸せになる権利は平等ですよという概念を明確にすることで、功利主義的発想でも問題ないんじゃないかというのが彼の意見なんです。

私は哲学的なほうはあまり詳しくないので、それがどれくらい整合性が取れた議論なのかはわからないのですが。

広井 功利主義から出発しつつ、平等とか、もう少し中長期のものなども含めていける、完全に対立するものではなくて、というところですかね。

阿部 そういう発想なのかなと思います。

熊谷 ブータンのGNHもそういう感じですよ。お金だけではなくて、環境なども含めて、文化も可視化して、数値的に量を増やしていくという語弊がありますが、それぞれの地域で数値を取って、上げる場所は上げていくという発想です。いわゆる幸福を数値的に最大化していくということです。しかし、そのスピードに執着しない。すなわち、あせらず無理をせず、バランスよくゆっくりやろうというのがブータン流です。

内田 でも、ブータンの場合は、何でもどんどん上げて

いきましようという拡大成長というより、足りて十分であるかどうかを気にかけているように思います。つまり、足りている領域と足りていない領域があって、足りていない領域により注目をしましょう。一方、足りている領域をもっと拡大成長させましようという使い方はあまりしていないかなと、私は理解しています。熊谷 もちろん、足りない領域の対処を最優先するというのはおっしゃるとおりです。しかし、足りている領域を放っておいてよいとは考えていないように思います。やはり、比較的数値の高い領域であっても、無理のない範囲内で拡大成長をさせるというスタンスだと思います。

内田 ブータンではその出発点として、経済的に自立できていないということが大きい。逆に功利主義が問題になっているのは、どちらかというと経済先進国です。もうこれ以上物はいらぬくらい十分にあるのに、本当にさらに成長が必要なのかという問いです。短期的に見るとプラスの効果を得られるようなことがあっても、長期的には同じ刺激を与えられ続けても、それ以上の効用を得られなくなるので、なんとか成長させ続けなければならないという幸福のパラドックスがある。それゆえにもっともっと成長を、というふうになっていくわけです。

しかしそれだけ成長を続けるだけの資源が足りない。しかも、ある程度成長しきっているところになると、「これから自立を目指ましよう」というブータンのような余地があまりないわけです。

河合 しかも、いま格差がすごく出てきてしまっている。そのへんも絡んでいるようなところがあって、余計にややこしい。

広井 ブータンは、農業が中心だったのがこれから工業化して近代化の坂道を上る入り口にいますね。

熊谷 ブータンも都市部に関して言うと、まさに格差社会が生じていますから、「なぜ彼のほうがこんなに給料が高いんだ」とか、「自分は仕事がないんだ」とコンフリクトが起きています。

それから、ブータンも基本的に指標を用いて数値を出していくというスタンスですので、弱いところを上げていくのは当然ですが、高いところもそのままいいというわけではなくて、可能であればさらに高めていきましようという考えだと思うんです。

ブータンの仏教的倫理が個人の欲の拡大を抑えているという側面がある一方で、政策的にはやはり数値を伸ばしていく。ただ、その数値に国民自身はあまり執着していない（というよりも多くの国民は細かな数字までは知っていない）というパラドックスがあります。また、仮にブータンの経済がこれからよくなっていても、いまの先進国にみられるように物欲が際限なく

増していくということは考えにくい。その1つの理由としては、先ほど言ったように、物質はあくまで現世限定のものであって、来世には持ち越せないんだという彼らの考え方が消費行動に自制をもたらします。また、物をたくさん集めても、それを自分1人で囲ってしまつては利他的行為による福德がなくなつてしまうので、福德を得るために貧しい人にも回してあげるとか、そういう所得の再分配みたいなものがうまく機能しているところがあるように思います。

しかし、こうした仏教的倫理観が機能しているのは、仏教の精神文化がブータンに根付いているからであつて、今後、もしそれが薄れてしまった場合には話が異なつてきます。

文化的な限界設定と実際の限界設定

阿部 その思想はすごく大事な気がして、つまり拡大成長が続かないことは明白です。では、続かない中で何をしなければいけないかということがいま一番ホットな議論かと思つています。

一方、私は、人間の本質として、歳をとつていくけれども給料が上がらない、あるいはだんだん世の中が便利になっていくのではない状態というのは、本能的に耐えられるのかという疑問が強くあります。

つまり、見かけ上でも、右肩上がりの社会じゃないと、人間は生きづらくないかという懸念がある。だとすると、成長を求めない社会を構築するのはさうとうむずかしいことです。それは教育とか理屈で抑えようとするというのが1つあると思うんですが、そのとき、「お天道様が見ているから」というのは、理屈を超越してある程度人間の行動に制限をかけるので、それをうまく利用すると、われわれが求めているようなことに近づけるのかなと思つています。

河合 これはおもしろい議論で、限界設定の問題ですね。文化は何らかの限界設定がだいたいできている。

内田 そうですね。文化は意味生成装置ですからね。

河合 文化は装置なんです。来世もさうだし、キリスト教だってすごく立派な限界設定として機能している。だけど、いまはその文化的な限界設定がうまく働いていないことが多いんじゃないかな。それが幸福につながるのはむずかしい。それが1つと、文化的な限界設定は働いていないんだけど、実際の限界設定が来ているというのはみんな感じている。内田さんのほうがはるかに詳しいと思うけれども、いま若い世代に調査すると、将来は親の世代よりもよくなると思つている子が圧倒的に多いです。

内田 ええ、親よりは稼げないとみんな思つている。

河合 そうそう、みんなすごく暗い未来をイメージし

ている。そのへんは皮肉です。文化的な装置としての限界設定は、倫理としても幸福観としてもとても大事なんだけど、それが機能していない。一方で、リアルに、もうよくなるぞとみんな感じていて、すごい閉塞感があります。

内田 そうなんですよ。だから、たぶんブレーキは、明日に希望があるのではないか。んだけど、日本社会は倫理や宗教的価値が提供する欲望制限のようなりミッター装置は薄くなっているのに、一方で人々には現実ばかりが突きつけられてしまう。価値観的なものよりも現実のほうを見て意思決定せざるを得ない。現実が厳しいことに基づいて、自分の中にリミット装置みたいなものを設けてしまう。

河合 それも、現実かどうかはわからない。でも、サイコロジカルにはすごく強い。

内田 ええ、そうなんですよ。フィクションかもしれないけれども、多くの人が信じるようになると、そこである種の共同的なストーリーが生まれてくるので、みんなそこにコミットしてしまうのだと思います。

河合 若い世代って、驚くほど野心や夢がないものね。

内田 ぼちぼち暮らしたいと、みんなが思っているんです(笑)。

河合 ぼちぼち暮らしたい。聞いていて本当にびっくりする。

拡大成長や欲望が薄らいでいる若い世代

広井 限界設定とか、阿部さんの話の流れで出てきた文化や倫理の話はまた非常におもしろいですね。

私はよく言うのですが、大きな時代状況として、仏教やキリスト教が生まれたいわゆる枢軸時代というのは、1万年前からの農業文明がある種の資源や環境の限界に達して、拡大成長という路線が立ち行かなくなったときです。そしてそれに代わる、より内面的な価値として説かれたのが、仏教とかキリスト教、ギリシャ哲学です。ギリシャ哲学はまさにユーダイモニアとか幸福がテーマで、中国でも徳などが考えられた。結局、普遍宗教というのは、もともとそういう限界設定の装置として出てきたのではなかったか。この300～400年で近代社会になりましたが、さっきからの話のように、拡大成長では立ち行かないことが見えてきます。

それでは、これからの時代はどういうものが限界設定とか装置として働くことになるのかという点では、ブレーキのように宗教に帰るのは、日本や西洋諸国ではもうむずかしい面もある。

熊谷 まずは限界を目の前にして資源消費を抑えるべきだということを頭ではわかっているけど、人類は消費



活動を抑制しないですよ。むしろ、地球上で限界が来ているならば宇宙開発をすれば、AIを発達させてヴァーチャルリアリティで情動的に消費をさせて物質消費を抑えるなど、消費欲を拡大させながら、それを満たすための技術を開発しようとする。それで消費欲が満たされなくなれば、新たな領域を開拓し、技術を開発していく。結局はいたちごっこが続くわけです。

河合 リアルなものとかサイコロジカルなものが絡んでいるから、なかなかむずかしい問題ですね。若い世代はリアルよりもサイコロジカルのほうが大きいような気がする。それはリアルの見方が甘いのか、若い世代が感じ過ぎているのかということとはわからない。

広井 さっき阿部さんが言ったのは、人間は常に拡大成長的なものがある。そうでないためには何か文化的な装置が必要ではないかということですね。

阿部 そうですね。欲求を制御しようとする理性の力には限界があって、どんなに教育で何とかしようと思っても、先が見えていると思うんです。だけど、神様が見ているから、お天道様が見ているから、というのは、もう少し強く人間の行動を制御できるのではないのか。制御しようと思ってやっているわけではないんですが、うまく使えば、限界設定の装置になり得るのではないかと思います。

広井 さっきの話では、いまの日本の若い世代は、そもそも拡大成長とか欲望がかなり薄らいできているという、そのへんはどうでしょうか。

河合 そうだと思います。

内田 物欲とかあまりないですね。もちろん相対的な問題で、まったくないわけではないですけど。

河合 草食化と言われるのもそうだし。

熊谷 確かにそうですね。でも、おっしゃるように、物欲はないわけではないですよ。もう限界はわかっているから、それにところが自分で適応しようとしているということですね。

内田 ある意味、超現実的に適応しようとしているということは感じます。

河合 そう、超現実的。

熊谷 仮に、もしまたバブルが来て、これからみんな10年後には収入が倍になるよということが保証されたときに、「それでも僕はいま以上の収入はいりません」というふうになる人がどれぐらいいるのでしょうか。

広井 私は素朴に、人間というのはある程度衣食が足りたら、際限なく欲望が拡大していくという方向よりも、成熟していくのではないかなと思います。そういう意味では、いまの日本の状況は自然の成り行きのようにも思うんです。現状が望ましい状態かどうかはいろいろ議論があると思いますけど。

阿部 閉塞感があるのは、まだその状況になり始めた時期で、完全にからだに染み渡っていないからではないかという気がします。あと10年、20年、この状況が続くと閉塞感すらなくなり、それが常識のようになってくると、また価値観は変わるのかもしれませんがね。

シェアード・バリューが必要

内田 ここがおもしろいのは、物欲がないとか草食系みたいなところが、本来的には自己評価とか、自分の目標のようなものにシフトして、価値として昇華していくところだと思うんです。だから、「べつに車はいらないんだけど、一生懸命やるし、それなりにハッピーに自己実現できたらいいでしょう」みたいな割り切りが生じる。しかし現在では、まだこのプロセスが完全ではなく、「車もいない。彼女もいない。そして、もう何もしません」(笑)みたいな感じも出てしまう。

この二極化に、いまの閉塞感の1つの原因があるんだと思うんです。個人としては成長はそんなに求めているというところと、社会としてはまだまだ成長しないといけないというところでの乖離かいりがある。だから、社会のスローガンみたいなものと、現実突きつけられているものと、それに対する個人の心理学的なリアクションみたいなもの、その3層ぐらいの乖離があるような気がします。

河合 むずかしいのは、そのへんでは社会のスローガンと個人のギャップが露呈してしまっていて、社会のスローガンとしては、これからさらにどうやって成長するかということが出てくる。でも、もうみんな信じていないんだと思います。

内田 そう、大して信じていない。

河合 大して信じていない。たとえば、お隣の韓国がそうだけれども、日本企業を全部潰すぐらい、電機産業、自動車産業が伸びた。でも、国民生活は全然よくなっていない。そういうギャップを見ていると、個人的にはバカバカしいということになっちゃうと思う。

広井 いまの日本の若い世代を含めた評価の話がさっ

きから出ています。確かに、草食系とか、そんなに物欲がないというのは、もしかしたら、限界設定として、限らない拡大成長を目指すよりは望ましい姿なのかも思うんですが、閉塞感とか排他的な意識などが強まっていく面もあって、現状が望ましいとは必ずしも言えないところがある。そのへんの日本の現状の評価については、どういうふうにお考えですか。

熊谷 排他的になってきているんですかね。中には、そうした排他的な欲求すらなくなってきている若者もいるかもしれませんが。

河合 排他的になっています。

広井 そこが、私も学生を見ていると両方あると感じます。社会貢献意識が高い学生とか、積極的に関係を開いていくような志向を持った学生の層もいるかと思うと、狭い世界に閉じこもる学生もいる。

河合 ものすごく狭い世界です。

内田 すごく乖離している。開いているほうもあまり軸足がなく、だーっと広がっているような印象もあって、結局、どちらも根があまりないのかもしれませんが。

河合 根がないから極小コミュニティで生きていくわけです。ネットの世界でね。

熊谷 排他するということすら、なさそうな感じもするんですが。

河合 いやいや、すごいですよ。排除されたら大変なことになるから、みんなエネルギーを使って必死で極小コミュニティにしがみついている。

広井 最近、また「空気」という言葉がよく使われますが、日本社会は小さい集団の空気いかに同調するかが強い。そういう意味では、日本社会にとっての課題は、集団を超える原理というか、仏教とか、お天道様であったり、江戸時代ぐらいまでは、神道・仏教・儒教で日本人はそれなりにバランスを保っていた面もあったと思うんです。けれども、明治以降、国家神道になり、戦争に負けて、戦後は経済成長一辺倒で、それもままならなくなって、それに代わる拠り所をどうやってつくっていくかという話だと思います。

河合 先日、荒川区に行つて思ったのは、調査レベルを見ると、みんなの関心として、幸福というのは1つはつながり、もう1つは、健康を含めて安全無事であること、それが圧倒的多数なんです。

それはいいんですが、何か装置というか、シェアード・バリュー (shared value: 共通価値) のようなものがあると思います。シェアード・バリューを望む気持ちはすごく強いんです。だからリスクもあって、それこそ変な宗教みたいなものが出てくる可能性もある。宗教って、一番はコミュニティ機能ですね。コミュニティ機能とシェアード・バリューを持ったものが出てくる可能性はすごくある。だから、映画にしろドラマにし

ろ、一時的にばーっと流行するでしょう？ だけど、幸福ということを考えると、ある文化をシェアード・バリューとして発掘していくような努力が必要なのではないかと思います。

広井 その場合のシェアード・バリューというのは、単に小さい集団の空気とかより、もう少し普遍的なものですか。

内田 もっと「価値」と「意味」が付与されたものだと思います。本人たちもそれにコミットして、そのコミュニティで守っている価値なんだけれども、外から見てもある程度理解される価値である必要があると思います。

河合 たとえば、Jリーグってコミュニティなんです。地元のチームを応援して、何らかのシェアード・バリューをやっているわけです。

内田 文化的なものは、もう少しニュートラルですね。たとえば、アメリカも野球のリーグとか、いろいろなプロ・リーグで地域のコミュニティが成功している例だと思うんです。そのローカルな価値へのコミットメントが薄くなっていくと、たとえば日本でもそうですが、どれぐらい商業モールがあるかとか、どれぐらいブランドショップがあるかみたいに、グローバルな価値を持ったものをいくつも置くことによって、シェアード・バリューにすり替えていくんですね。

いまの日本の地域はそうなってしまっていて、その地域に独自の何かがあるということよりも、うちにも商業施設ができたとか、うちでもこれは手に入るということで、グローバル・シェアード・バリューの傘下に入ってしまう。その中でいったい何を生み出すかとか、そこにあるアイデンティティ、価値みたいなものが薄いからだと思うんですけれども。

ローカルなシェアード・バリュー

広井 「グローバル・シェアード・バリュー」という言葉は印象的です。逆に言えば、ローカルなシェアード・バリューからつくっていくという方向がある。

河合 それは多層的でいいと思います。いろいろなレベルでそういうものがあっていいと思うんですけど、それが出てくるのを待つのではなくて、もう少し自治体などが仕掛けていく必要があると、荒川区を見て思いました。

広井 私も基本的な認識は多層的なんですけど、出発点はローカルなシェアード・バリューです。そこから、だんだん積み上げてナショナル、グローバルになるというようなイメージで考えています。

内田 たとえばドイツへ行くと、それぞれの町に教会があるなど、町のつくり方はそれなりに類似性もある

のですが、それぞれ、うちの教会はこうであるとか、そこにいる人のアイデンティティがありますよね。そうしたローカルな価値は、外から来た人も評価もできる。そういう意味では、町のつくり方はとてもうまいし、歴史的なものを大事にした結果として成り立っていると思うんです。

それは日本も本来的にはできていたのではないのでしょうか。いまならまだぎりぎり遅くはないかもしれませんが、このまま行くと危ないなとも思います。

阿部 ローカル・シェアード・バリューがあまりローカルの中で閉じて、スペシフィックなものになり過ぎるとまた駄目ですね。

内田 だれも来ないし評価もされない。

広井 開かれていることが大切です。

河合 うん、気をつけよう、「こころの未来」も(笑)。

広井 私はさっき話に出たドイツはかなり評価してしまして、ちょっと分野が違いますが、たとえば「隠れたチャンピオン企業」といって、中小企業で、ローカルでやっているんだけど、実はこの製品に関しては世界シェアがものすごく高いとか、外に対して開かれているというか、そういうのが大事にされています。

熊谷 そういう意味でいうと、サッカーというのは非常にうまく機能していると思います。野球は12チームしかないわけですが、Jリーグができて、J1、J2、J3と、小さな町にもチームができて、サッカーをする人だけではなく、けっこうお年寄りの住民などにも楽しく開いてきた。

河合 だけど、それも多層的なことが大事で、それで迷惑する人も出てくるんです。

熊谷 確かにそうですね。

河合 たとえば、岸和田なんかそうで、「だんじり命」みたいな人がいて、1年中それしか考えていないしやっていない。だけど、それで迷惑をする人がコミュニティの中にいっぱいいるわけです。そういう意味で、多層的というのは大事なことです。

内田 価値やタスクが選択できないとつらいと思います。たとえば、京都の中で、「京都といえば祇園祭です」みたいにされるとしんどい。

河合 地蔵盆だけでも十分しんどい。

内田 そうそう。チョイスできるというのはすごく大事です。ある種の自由で開かれた個人というのは、まさに西洋近代が頑張ったつくったアイデンティティのよいところの1つだと思うんです。でも一方で、そこでアイデンティティを見失うと、あまりうまく働かない。

熊谷 チョイスできる人はいいけれども、できない人は苦しい。

内田 できなくなったら閉塞ですからね。だから、その器みたいなものと、その中で泳げる個人みたいなもの

の両立が、理想形としてはあるんだけど、幸福の話をするときにいつも私が思うのは、結局、制度の中での個人の努力の話になってしまうところです。あるいは制度という名の箱物をつくって、どうやったらうまくこっちの方向にもってこれるかという話で、個人のチョイスの多様性みたいなものを制度で設計することがあまりできていない。

河合 西洋人ではないから、イニシアティブが強く、自分で幸福を探してというのは苦手で、ある程度うまく設計していく必要がある。

内田 何か器が必要で、その器には、シェアード・バリュー、多様性もあるけれども、ある程度共有されたシェアード・カルチャーというか、全体的にこういうカラーだね、というアイデンティティが必要なのではないだろうか。

河合 それを忘れて右肩上がりで行けると思っていたところが破綻した。

広井 まさにそうですね。今日は非常に議論がおもしろい。

河合 公共政策の話になっている(笑)。

広井 ローカルなところからシェアード・バリューをつくっていくためには、サッカーとかお祭りといった住民のいろいろな自発的なアクティビティがあると同時に、政策制度とか社会システムのような公共的なレベルも大切だということですね。

個人が物語をつくれるチョイス

広井 思想とか宗教の話もありましたが、それも私は必要ではないかと思っています。大上段の宗教というより、さっきの話で、江戸時代は神・仏・儒が生活の中に浸透していたとか、お天道様も生活感覚としてあったとか、そういうレベルですが。

阿部 お地蔵さんにみんなで集まるぐらいの感覚だけでも強まるので、私のイメージはそういう感じです。

河合 結局、この国では思想にしてしまうとうまく行かないと思うわけです。

内田 そうですね(笑)。

河合 何かの行為の中に思想があるというのが受け入れやすい。

内田 それはすごく賛成します。だから、行動レベルでやらないと。日本だと「思想」というトップダウンがすごくむずかしい。行動はボトムアップなので。

広井 たとえば仏教。仏教が日本社会にどれだけ浸透しているかというのは議論の余地があると思いますが、仏教は1つの思想であって、仏教が来たときに、いろいろな葛藤や対立がありました。

河合 さっきから言っていることに一番近いのは仏教

であるということと言える。

内田 仏教や神道はその思想が行動レベルに転換、翻訳されていると思います。たとえば、お地蔵様に祈りましょうとか、お正月には神社に参りましょうとか。

熊谷 そうなんですね。行動と、それにリンクするものだけが根づいています。

河合 それから、美しさですね。去年、国際分析心理学会が京都で開かれ、外国から600人ぐらい会員が来たんだけど、みんながほめてくれるのは、美しいということと清潔ということです。ロンドンから来た人が、ロンドンへ戻ったら発展途上国に戻ったのかと思ったと言っていた(笑)。

熊谷 調和の美しさとかではなくて、クリーンのほうですか。

河合 両方です。

熊谷 なるほど。文化的なものというと、スポーツもあります、アートもとても大切です。

河合 そうですね。仕掛け部分で、アートはすごく大きいと思います。

内田 アートや音楽は力があります。

熊谷 シェアード・バリューについて、ローカルとかグローバルという要素もあるんですが、どの不幸に対応するか、どれぐらい重度なものに対応するかということも、それぞれ異なると思うんです。お地蔵さんがいて、みんなで拝みましょうというライトなものもあれば、本当にしんどいときに、この絵を見る、この音楽を聴くと癒されるというふうな、かなり深いところのものも含めて、多層的なのかなと思います。

河合 多層的と言ってもいいし、こころの動きがあるから物語的と言ってもいいと思うんです。そういう意味で言うと、やはり個人が物語をつくっていくことができるというチョイスの話ですね。

内田 それがないとちょっときついですね。

河合 そういう時代にはなっていると思います。

だけど、物語をつくる材料がないとむずかしい。

内田 「それじゃ、個人で勝手にチョイスしてください」と言われると放置された気になって、その反動として狭いコミュニティに閉じちゃうんだと思います。

河合 いまは閉じている。

幸福を巡って岐路に立つ

阿部 別の視点になりますが、脳を刺激する手法が発展すると、幸福感をコントロールしようという方向の議論が出てきても不思議ではないような気がします。

内田 『マトリックス』⁵⁾(笑)。

阿部 少し前、『セル』に、従来よりも非侵襲的に脳の奥のほうまで刺激する技術に関する論文が出ていまし

た。たとえば、一部の精神疾患・神経疾患では、脳の奥深くを刺激するような治療を行うことがあるのですが、これまでよりもより安全に行えるのではないかとということで、いまのお話とつながるように思いました。それを考えると、こういうときはハイになるから、「何かあったらこのボタンを押してね」という感じで、ここを落ち着ける装置を使うといったことになっても不思議ではないでしょう。

広井 有名な『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』⁶⁾、あれに近未来でムード・オルガン (mood organ) という、快の感覚をコントロールできる装置が出てきます。また、アメリカの大統領委員会でも、そういう感情をコントロールするような薬とか装置の開発がどこまで許されるのかみたいな議論があります。

阿部 そうですね。脳を刺激するのと、薬を飲むのとはあまり変わらないという意見もあると思います。

広井 いまは幸福も全部コントロールしていくみたいな方向が、勢力としてはけっこう強い。

熊谷 お金になりそうな話なので、やるという連中は必ず出てくるでしょう。それが受け入れられるかどうかは別にして。

阿部 最近注目されているマインドフルネス⁷⁾もここをどうコントロールするか、ということですよ。ハイな気分をどう抑えていくかとか、下がったテンションをどう上げていくかということに関わってきます。それを機械的なもの、技術的なものでやるというのは、必ずしも突飛な話ではありません。

河合 ただ、どれだけ1対1対応をしているかというのは疑問に思うことがあります。

(河合教授、退出)

広井 いま、ある種、幸福を巡って岐路に立っているというか、コントロールして拡大成長していくという方向と、もう少し持続可能性というか、ローカルなところからシェアード・バリューを積み上げるような方向と、ある意味ではせめぎ合いというか、いくつかの道が分かれている分岐点にいるわけですね。

内田 いまの脳科学の話もそうなんですが、個人の中で起こっていることに加えて、最終的にはある人の行動の集積によって外の現実ができていくという事実を見通さないといけないんだろうなと思いました。

行動と社会的現実の一方だけ見ていると他方が見えない。実際には外に出した行動は、ひるがえって自分に返ってくるわけです。個人内で起こっている出来事と、個人間で起こることを総合的に見ていくことが必要だろうと思いました。

研究としては、幸福を個人内プロセスとして見てもいいし、個人を超えた社会の政策プロセスとして見てもいいと思うのですが、そこがうまくつながっていな



いということが、幸福に関する研究でジレンマの1つなんです。個人内プロセスだったら、装置をつければとか、トレーニングすれば、みたいなことでうまくいくのかもしれないのですが。

一方で社会の制度設計のほうは、いい制度あるいは場所をつくって、たとえば、うちがいい会社なのでみんな入ってください、ということになりますよね。

しかし、個人と社会の間ってあまりつながっていないような気がするんです。たとえば、いったんある「幸福な」会社に入った人は、どういう振る舞いをするんですかね。本当にその会社がいい会社であり続けられるように人々はふるまい続けるのでしょうか。こういうことってよくわからないですね。

広井 なるほど。いま多いのは、自己啓発本と言われるような個人のレベルのお話です。

内田 「自分で努力してください」ですね。

広井 私は、社会的なレベルというか、政策制度のレベルが大きいので、それを同時に並行してやっていく必要があると思います。

内田 個人と社会には相互作用があると思います。

熊谷 社会制度的なところですが、どれだけいいものをつくっても必ず漏れる人がいるわけです。枠内に入っている人はそこそこ満足してくれると思うんですけど、そこから漏れた人たちが強烈な不満を持つ。その人たちをどの程度までフォローするかですね。

内田 すごく負のエネルギーがあるのでね。

熊谷 そのすべてをケアすることは残念ながらできない。

広井 幸福というのは、最後は極めて個人的な部分があると思うんです。だけど、生まれたときの格差とか、教育とか、いろいろな条件はできるだけ平等にする、そういった幸福のための土台を整備することは、社会システムとして、政策としてしっかりと考えていく必要があるだろうと思います。

阿部 むずかしい問題が山積みなんだということが改めてわかりました。

内田 そう、すごくむずかしい。

働き方にもチョイスがあればいい

熊谷 これから超高齢社会が進んでいきますが、元気で楽しく健やかなというハッピーではなくて、もう歳もとってからだも動かなくて、アンハッピーな状態をどう楽しんでいくかということが重要になってくるのではないかと思います。

阿部 教育とか、あるいは研究者が頑張っただけで、多少変わるかなという気がしています。老後の問題もそうですし、あとは子育ても。

たとえば、ちょっと極端な例かもしれませんが、子どもが生まれたばかりの研究者の場合、子どもが小さいと子育てにすごく時間がかかる。それで、研究できなかったけれども、子育てに時間をかけられたことが幸せなんだと思える価値観を生む土台は、たぶん教育だと思っています。本当は研究もしたいんだけど、これはこれでよかった、幸せだと思えるようになることは大事かと思っています。それは、きちんと教育なり、あるいは心理学の成果の発信なりで、変えることはできるのではないかと思います。つまり、仕事以外の人生の要素に対する価値観を、どう形成していくかを考えることが重要ではないかと思っています。

内田 私はいま複数の企業の従業員を対象に調査をして、キャリアを積みたい派か、ワーク・ライフ・バランス派のいずれですかと聞くと、ワーク・ライフ・バランス派が多数派なんです。

ちなみに、回答者の多くは男性です。これは私の親の世代ではなかった。それは社会の中で、さまざまな啓発活動とか、育児、介護に関して社会的に容認されていくことで、価値観が変わったんだと思います。

阿部 私はさらにもう一歩進んでいくとよいなと思っています。というのは、個人はそう思っているけど、夕方5時過ぎに「家に帰ります」とはまだなかなか言いにくいのではないのでしょうか。

広井 それはそうですね。相変わらず過労死とかあったりする現状がある。

内田 そこは集合的無知、多元的無知が働いている。横の人は実はみんなワーク・ライフ・バランス派なんです。けれども、周りはみんなそうしたことに理解がなく、仕事を優先する価値観を持っているに違いないとみんな思い込んでいるから、自分だけが帰るわけにはいかないと思っている。だけど本当は、多くの人はワーク・ライフ・バランス派である。そのことに対して、あまり理解し合えてないがゆえに、みんなが一斉にブレーキを踏んでしまうという現状があると思います。

熊谷 それは、教育で変えたものなのか、あるいは変わってしまったものなのか、どっちなのでしょうね。

広井 時代の経済社会構造の変化で自ずと変わっていったということも考えられます。

内田 両方かもしれませんね。

阿部 それこそ、たとえば会社の偉い人が、もう子育てをするから帰るという姿を見せることによって、部下もそれができるようになったりとか、徐々に変わっていくのではないのでしょうか。

広井 私は、国民の祝日倍増ということの前から言っています。日本人は、残念ながら、みんなが休まないし休めない。

内田 有給休暇が使えないんですよ。

広井 ゴールデンウィークなどに観光地が異常に混むのは、みんながいつせいに休むから。

熊谷 もし有給休暇が残っているんだったら、強制的に休日にしてしまうというのもアリかもしれません。

休日の取り方も重要ですが、働き方にもチョイスがあつてよいように思います。毎日出勤するのはかまわないけど、時間帯は選ばせてほしいとか。たとえば主婦の人でしたら、休日を増やすよりも、朝ゆっくり出勤して夕方早めに帰るような時間帯でシフトを組むとか。さまざまな働き方のチョイスがあれば、もう少し楽に働けるのかなと思います。

広井 話題は尽きませんが、センターの中でこれだけまとまって幸福のテーマで議論したことはなかったのではないかと思います。これからのヒント、論点、テーマもいろいろ出されて非常におもしろかったと思います。どうもありがとうございました。

(2017年6月27日、京都大学こころの未来研究センターにて)

撮影：坂井保夫、イラスト：出口敦史

注

- 1) 第4代ブータン国王が1970年代に提唱した概念。GNP(国民総生産)に対して、国民1人1人の幸福を重視する。
- 2) 2013年に設立された「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合」。本誌所収の西川太一郎荒川区長インタビュー参照。
- 3) 経済学者。京都大学名誉教授。京都大学こころの未来研究センター特任教授。著書に『隠された思考』『「アメリカニズム」の終焉』『現代日本のリベラリズム』など多数。
- 4) 個を超える領域を重んじる心理学。宗教的、神秘主義的傾向が強いとされる。
- 5) 1999年に公開された米国のSF映画。主人公は現実とコンピュータによって作られた仮想現実を行き来しながら、人類をコンピュータの支配から解放するために戦う。
- 6) 1968年に発表されたフィリップ・K・ディックのSF小説。第三次世界大戦後の未来、主人公は火星から逃げたアンドロイドを処理するために戦う。1982年に公開された映画『ブレードランナー』の原作としても知られる。
- 7) 瞑想などにより生まれる「今ここに集中している心のあり方」、あるいはそれを目指すプロセスのこと。

人工知能は人を幸福にするか

矢野和男(日立製作所研究開発グループ技師長)

Kazuo YANO



1959年、山形県酒田市生まれ。1984年、早稲田大学大学院理工学研究科物理学専攻修士課程修了、株式会社日立製作所入社。同社中央研究所にて半導体研究に携わり、1993年単一電子メモリの室温動作に世界で初めて成功。2004年から世界に先駆けてウェアラブル技術とビッグデータ収集・活用の研究に着手し先駆的な役割を果たす。論文被引用件数は2,500件。特許出願350件。「ハーバードビジネスレビュー」誌に「Business Microscope」が「歴史に残るウェアラブルデバイス」として紹介され世界的注目を集める。博士(工学)。IEEE Fellow。東京工業大学大学院特定教授。文部科学省情報科学技術委員会委員。2007年Ericc Prize、2012年Social Informatics国際学会最優秀論文など国際的な賞を多数受賞。2014年、著書『データの見えざる手——ウェアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』(草思社)が、BookVinegar社の2014年ビジネス書ベスト10に選ばれる。

人工知能(以下「AI」)は人を幸せにするのか。これが本論の主題である。

AIはマシンでもアルゴリズムでもない。AIの本質は「不確実性に向き合う人間の的方法論」である。そして、この新しい方法論を具現化する道具がソフトウェアとしてのAIである。

ルール指向の限界

20世紀にはテイラーに始まる業務の標準化やマニュアル化が広く実践された。大量生産という時代の要請とマッチし、「正しいのは、ルールを決めてそれを繰り返し守ること」という考え方が広まっていった。このルール指向は、仕事のやり方にとどまらず、社会や組織の運営にまで影響を与えてきた。

さらにこれを発展させたのがコンピュータであった。ソフトウェアに「条件」に対する「アクション」のルールを記述することで、コンピュータは、その記述どおりに処理を高速かつ低コストで実現する。ここにいるルールとは、たとえば銀行での送金に対する課金であり、工場生産での部品発注の取り決めである。

このルール指向は、先進国において20世紀という道路、鉄道、通信などの社会のインフラ構築が大規模に行われた時代に合ったものだった。

しかし、時代は大きく変わった。需要は多様化し、短期で変化し、またその変化やそれに伴う存在を揺るがすリスクも予測不能になった。このような変化をルールでもれなく記載することは、組み合わせが無限にあり事実上不可能である。

今、方法論を大きく転換すべき時がきた。実は、この新しい時代の要請に応えることに最も苦勞しているのが日本である。なぜか。それは、上記のルール指向を徹底して実践し、その結果最もめざましい成功をおさめたのが日本だったからである。成功体験が未知の状況において誤った判断に導くことを「過学習(Overlearning)」と呼ぶ。まさに日本はこの「過学習」の負の側面が強く出た状態にある。これが日本が他の国に比較し、この20年きわめて低い経済成長しかできなかった最も大きな機序である。

AIが実現するアウトカム指向

これを突破するのが「アウトカム指向」である。事業には社会的な使命がある。この使命の成否は、その成果、すなわちアウトカムがどれだけ実現されたかによって測られる。企業では、業績に関係するものになるし、医療では患者の回復効果などがアウトカムになる。

アウトカム指向では、まず成果をどんな数字で測るかを定める。一方で、その実現手段は、柔軟に状況に合わせて変える。これにより変化に適応する。あらかじめ決められたルールのとおり動くのではなく柔軟な対応を奨励するので、ルール指向とは発想の転換が必要である。

ここで新たに必要となるのが「実験と学習」である。未知で不確実な状況では、何が効果的かはやってみないとわからないことが多い。考えているだけで打席に立たなければ向上できない。「実験と学習」とは固

定的なルールに代わり、常に結果から「判断基準」を改善し、自らを研ぎ澄まし続ける営みである。

もちろん、現実の顧客への責任を伴う事業活動においては「実験」の機会は限られる。だからこそ、その実験のかなりの部分をコンピュータ上において行うことで、現実の実験での成功確率を高め、リスクをマネジすることが求められる。このコンピュータ上でのデータを使った「実験場」がAIである。

この実験場たるAIの具体的な姿はいかなるものか。今、ITシステムや設備システムには日々データが蓄積されている。たとえば、調達システムには、過去の見積もりから納入にいたる業者ごとの記録が、販売システムには、顧客ごとの購買の履歴が記録されている。これらの記録の中に、先週と今週の変化、顧客Aと顧客Bの違いが表れている。

ここで過去のデータを丹念によく見ると、雑多に見えるデータに隠れた一貫性があることがわかる。一見「ばらつき」のように見える変化でも、それが常に他の事象に影響を及ぼし、そしてアウトカムに影響する。過去の記録にあまねく目を通すことで、こういう条件のときに、このアクションをとるとアウトカムが高くなる（あるいは低くなる）という一貫した関係が見えてくる。過去のあらゆる行動が、未来に対する実験場での実験データとして発見と学習の源になる。

ここで見つかったパターン群は、理論や仮説ではない。過去の事実である。この事実を活用し、判断基準を常に見直し、変動に合わせて対応を変えることで、変化に柔軟に適應することができる。

このアウトカム指向は、以前ならコストがかかりすぎて現実的ではなかった。しかし、すでに大量のデータを蓄積するインフラがあることに加えて、コンピュータの進歩により現実的になってきたのである。これ

身体の動き



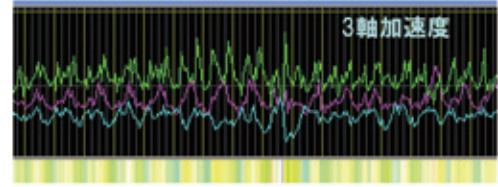
リストバンド型センサ



名札型センサ

歩行

2Hz 1秒



電子メール

0.8 Hz 1秒

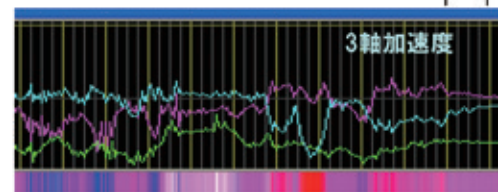
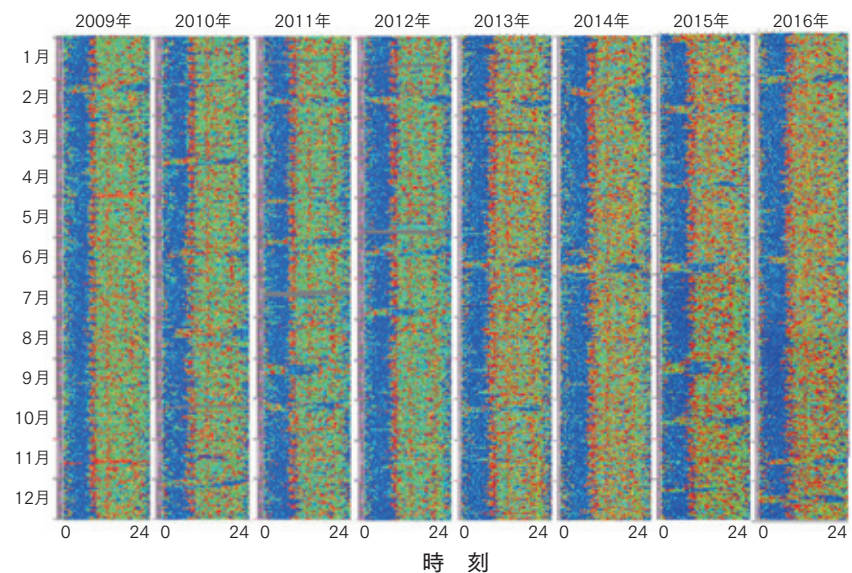


図1 リストバンド型と名札型のウェアラブルセンサと加速度波形の例(x,y,zの3軸)。歩行時には、約2Hzの周期的な波形が見られ、電子メールを書いているときには、断続的に、おおよそ平均0.8Hz程度の波形が見られる。



©Hitachi, Lrd. 2017. All right reserved.

図2 著者の過去8年間の身体運動(50ミリ秒毎)。「ライフタペストリ」と呼ぶ。赤が活発に動いているところ、青が止まっているところ、その中間は中間色で表している。海外出張による時間帯のシフトや睡眠時間のばらつきが一目で分かる。2015年度に赤がまだら模様が増えてるのは、人工知能に関する講演やプレゼンの機会が急増したことを表している。

が予測不能な変化や多様性に向き合う新たな方法論であり、これを具現化したのがAIと呼ばれているモノの本質である。

このアウトカム指向はすでに実績が出ている。われわれが開発、提供している人工知能「Hitachi AI Technology/H」(以下AT/Hと記載)は、アウトカム指向を幅広い分野で実現するために作られたものである¹。

すでに、銀行、証券、物流、流通、水、鉄道、営業、人事などの幅広い分野(14分野)に適用され、適用案件数は57件に達する。

新聞等ではAIの発表が相次いでいるが、問題ごとにAIソフトウェアの開発を前提とする「専用AI」がほとんどである。これに対し、このAT/Hは、ソフトウェアを変えることなく、これらの多様な分野でアウトカ

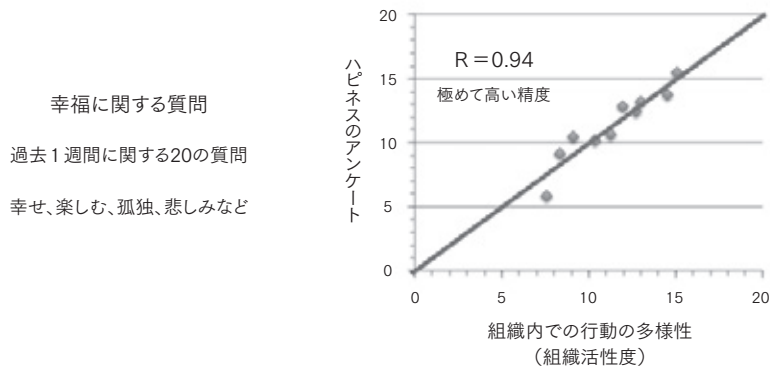


図3 集団の幸福感(ハピネス)と相関する身体運動のパターンを発見。組織内での動きの長さの多様性が、組織の幸福感に関するアンケート(質問紙)の結果と強く相関した(相関係数=0.94)。データは10組織、468人、5000人日から取得し、総データ数は50億点に及ぶ。

ムを向上する「多目的AI」である(人間のような知的存在をさす「Artificial General Intelligence: AGI」とは別の概念である)。これにより新しい方法論を幅広く適用することができる。

科学的データが示す幸福論

アウトカム指向では、何をアウトカムにするかが大事である。価値の高いアウトカムを設定できるかどうかは、アルゴリズムよりもむしろ重要である。AIが社会に広く使われる時代に、何をアウトカムにするかこそ今後重きが置かれるべきである。

社会やビジネスにとってもっとも重要なアウトカムは何か。古今、最上位に位置づけられるのが「幸せ(ハピネス)」である。したがって、アウトカム指向の理想の形は、「幸せ」を定量化し、この数値をアウトカムにして、さまざまなデータから幸せを高める方法を見つけて活用することである。

しかし、幸せはあまりに漠として感じるかもしれない。そんなことはない。われわれは、過去10年間にわたり、人間行動をウェアラブルセンサにより計測して解析し(図1、2)^{23,4}、最近、ブレークスルーとなる発見にいたった。

人の幸福感は、加速度センサによる身体運動のデータを用いることで、計測と定量化が可能なのである(図3)²³。ここでいう身体運動とは、座

っている人にも見られる、ごくわずかな動きと静止の遷移による無意識のパターンのことである。運動量とは関係がない。このような無意識の動きが人の幸福感を表すことが発見されたのである。

しかも、幸福な人たちは、コールセンタでも、店舗でも、開発プロジェクトでも、一貫して生産性が高いことが実証されている(図4)²⁻⁶。

なぜか。スマートフォンを使った大規模実験がその理由を明かしている⁷。被験者は、アプリからときどき「今何をやっているか」「今どんなモードか」を聞かれる。「いいモード」と答えた人が、数時間後までに増えた行動を調べると「楽しくなくても大事なこと」だった。大事なことには、楽しくない側面があるのが普通である。実は「幸せ」は「大事なこと」に挑戦するための精神的な「原資」になっていたのである。すなわち「ハピネス」は、われわれのアウトカムであり原資なのである。

トカムであり原資なのである。

人の活動には経済的な原資が必要である。明かりを点すのにも、移動するのにも、食事するのにも、経済的な原資なしにわれわれは活動できない。経済的な原資の源は2つしかない。事業活動からの「プロフィット」か「自然からの搾取」である。これがプロフィットとそれを集計したGDPが、社会の最も重要な尺度になっている理由である。しかし、お金だけでは原資として不十分である。精神的な原資としての「幸せ」が必要なのである。

この究極のアウトカムであり原資でもある「ハピネス」の数値とAIを組み合わせることで、システムティックに人や社会の幸福を高めるヒントを得ることができる。すでに、この原理により、どういうコミュニケーションや時間の使い方をすればハピネスが高まるかを解析するAIシステムを開発し、サービス提供している。すでに20社を超える会社に導入されている(図5)。

ここでさらに重要なことが明らかになった。それは「どうすれば幸せになれるか」は、人ごとに異なり、一律に全員に当てはまる法則性はないということである。

幸福の議論では「幸福という状態」と「幸福になるための方法」がしばしば混同される。たとえば「1人になることで幸せになる人がいる」一方で、「たくさんの人の中にいることで幸せになる人」もいる。これは

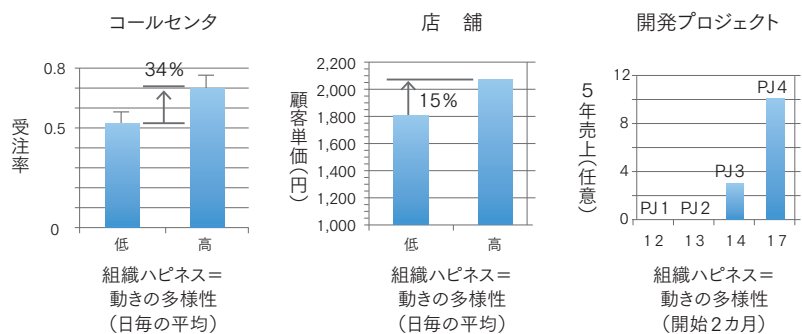


図4 ハピネス(組織活性度)と生産性との関係。コールセンタ、店舗、プロジェクトの事例。動きの長さの多様性(=組織活性度)が高い日は、コールセンタも店舗も高業績である。4つの開発プロジェクトの開始2カ月目での組織活性度が、開発成果の売上貢献と相関した。



図5 ウェアラブルセンサと人工知能を活用したハピネス向上支援サービスの使用イメージ。従業員が名札型のウェアラブルセンサを装着することで、組織活性度(生産性やハピネスと関連する)を高めるコミュニケーションや時間の使い方をフィードバックすることができる。

「幸せになるための方法が人によって違う」と考えるべきで、「幸せ」自体が人により違うのではない。山登りの際に、高度計で一律に人の登れる高さが測れる一方で、どうすればより効果的に上れるかが人ごとに異なるのと同じである。位置、天候、経験、体力、性格などの違いにより、どうすればよいかは異なってくる。

われわれは、幸せになるための普遍的方法があり、古今の「幸福論」にはそれが書いてあると考えがちだ。しかし実は、幸せになるための行動は1人ひとり違うことが科学的なデータから明らかになったのである。AIは、人ごとに状況ごとに、どうすれば幸せになれるかの事実を記録から紐解き、示してくれる。

進化という創造のエンジン

これから、人工知能に関する重要な帰結が改めて明らかになる。それは「人工知能は多様性を生み出す」という特徴である。AIを活用することで、人はそれぞれの状況や強みに応じて、多様な発展が可能になる。これは従来のコンピュータのソフトウェアが使用者を一律に標準化してしまうのとは著しい違いがある。

この特徴は、アウトカムを収益にして、人を企業に変えても同様である。従来のオートメーションは、いろいろな会社が導入すると結局はライバルと差がつかなくなるものだった。それに対してAIは違う。企業はそれぞれ異なる経営資源と制約を持っている。まったく同じAIというソフトウェアに、異なる問題設定と異なるデータを入れることで、企業ごとにまったく異なる動作をAIは生み出す。したがって、企業それぞれの特徴と強みを生かして、多様な発展が可能になるのである。

これはちょうど進化に似ている。進化という創造のエンジンは、過去40億年にわたり、地上に多様性をもたらしてきたこの世の^{ことわり}理である。ダーウィンは「進化とは多様性を生む」もので、一律な進歩ではないことを『種の起源』で強調している。人類はAIを通じて、ようやく「この世の理によりそった方法論」にめざめつつあるのだ。

ルールやプロセスをきっちり守ることで生み出される高い生産性によって富を生み出し、この富を社会に再分配することで、次の挑戦の原資にする。これが20世紀の幸福の方程式だった。この方程式で世界で最も

成功した国、それが日本だった。しかしルールに頼る中で、多くの人の学習回路は停止していた。

一方、AIという「未知への方法論」で武装した21世紀のわれわれは、これまで縛られてきた杓子定規なルールから解放される。AIという学習と創造のエンジンを備え、持てる資源と制約の中で、多様性を生み、独自性を伸ばし、そして地球と社会に繁栄をもたらしていく。この新しい時代への入り口にわれわれは立っている。

注

- 1 矢野和男「人工知能という希望—AIで予測不能な時代に挑む」『日立評論』2016年4月号, pp12-32
- 2 矢野和男『データの見えざる手—ウェアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』草思社(2014)
- 3 矢野, 荒, 渡邊, 辻, 佐藤, 早川, 森脇「ウェアラブルセンサーで「ハピネス」は定量化できる—「データの見えざる手」がオフィスの生産性を高める」『ダイヤモンドハーバードビジネスレビュー』pp50-61 (2015.2)
- 4 K. Yano, T. Akitomi, K. Ara, J. Watanabe, S. Tsuji, N. Sato, M. Hayakawa, and N. Moriwaki, "Profiting from IoT: The key is very-large-scale happiness integration," 2015 Symposium on VLSI Technology, pp. C24-C27, June 2015.
- 5 J. Watanabe, M. Fujita, K. Yano, H. Kanesaka, and T. Hasegawa, "Resting time activeness determines team performance in call centers," ASE/IEEE International Conference on Social Informatics (SocialInformatics) 2012, pp. 26-31, doi:10.1109/
- 6 K. Yano, S. Lyubomirsky, and J. Chancellor, "Sensing happiness: Can technology make you happy?" IEEE Spectrum, pp. 26-31, Dec. 2012
- 7 M. Taquet, J. Quoidbach, Y.-A. de Montjoye, M. Desseilles, J. J. Gross, "Hedonism and the choice of everyday activities," PNAS, 113(35) pp9769-9773, Aug. 2016.

幸福な社会のために不可欠なことは何か

海原純子(日本医科大学医学教育センター・健診医療センター特任教授)

Junko UMIHARA



1952年、神奈川県横浜市生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。医学博士・心療内科医・産業医。日本医科大学・特任教授、昭和女子大学国際学部客員教授。2017年から日本生活習慣病予防協会理事、2008～2010年、ハーバード大学・客員研究員。その他、日本女性エイズ基金設立発起人、厚生省「健康づくりのための休養指針策定検討会」委員、経済企画庁「経済審議会内閣特別部会」委員、厚生労働省「新健康フロンティア戦略賢人会議 女性を応援する分科会」委員、厚生労働省「健康大使」、日本生活習慣病予防協会理事などを歴任。著書に『困難な時代の心のサプリ』(毎日新聞社)、『ツイッター幸福論——ネットワークサイズと日本人』(角川oneテーマ21)、『こころの格差社会——ぬけがけと嫉妬の現代日本人』(同)、『幸福力——幸せを生み出す方法』(潮出版社)、『男はなぜこんなに苦しいのか』(朝日新書)、『今日一日がちいさな一生』(あさ出版)などがあり、歌手活動も行っている。

幸福度を測る基準

「あなたは幸せですか？」と質問されたらどう答えたらいいか、戸惑う人が多いのではないだろうか。幸せの尺度をはかる目安になるものはその人の価値観によりさまざまだ。健康をそこねた人は、病気が治るとそれが何より幸せ、と感じるものだし、受験や就職活動をしている人は試験に受かることが幸せの条件というように感じるものだろう。

幸福感をはかる代表的な目安として調査で使われる指標は、主観的幸福感と生活満足度である。主観的幸福感というのは、たとえば、「あなたは今のくらい幸せですか」という質問を投げかけ、1から10までの点数をつけてもらうのである。まったく満たされていない、不幸だという場合を1とし、最高に幸せを10とする。そして自分の幸福感に点数をつけてもらう。生活満足感についても同様に点数をつけてもらったり、あ

るいは、「非常に幸福」「やや幸福」「まあまあ」「やや不幸」「不幸」などのような状態から選んでもらう場合がある。世界各国の幸福度を調べた調査としては世界価値観調査がある。60か国8万人余りに行った2000年の調査では、日本は参加国の中で35位であった。一方、同様の生活満足度では日本は24位という結果であった¹。

日本の国内で近年行われている幸福度調査の代表的なものに「国民生活選好度調査」がある。内閣府が行ったこの調査は1点から10点までの点数で自分の幸福感を選んでもらうのだが、2009年は平均が6.47、2010年が6.46、2011年が6.41となっている。

ところで幸福感は所得や経済成長とかかわるのだろうか？ 所得が上がり経済成長が進めば幸福感や生活満足度は上昇するように思われる。裕福さと幸福感に関しては、図1で示すようにアメリカにおける所得と幸せ度の調査が知られている。アメリカ人の平均的個人所得は、1960年

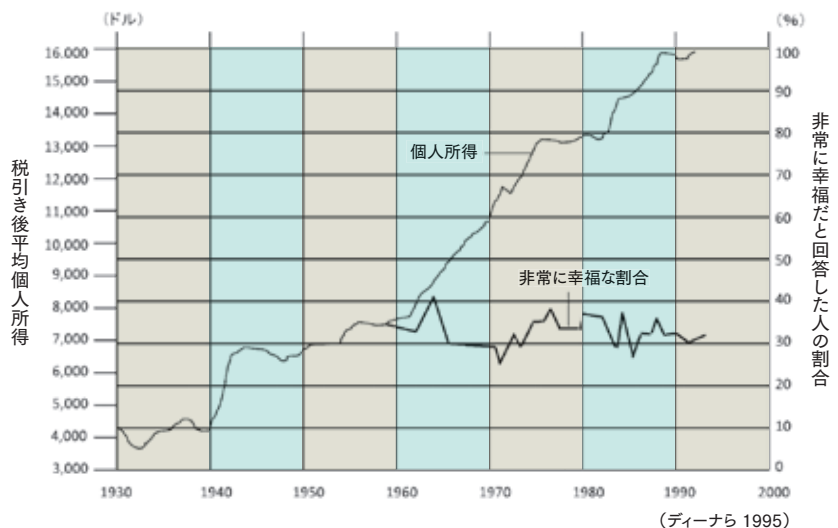


図1 アメリカにおける所得と幸福感

以降上昇し続けているにもかかわらず、幸福な人の割合は1960年以降まったく上昇せず横ばい状態である²。経済状態が良ければ幸福感も上昇するだろうという予想はこうしたデータで裏切られるのである。

幸せと所得

富がそのまま幸せに結びつかないとはいえ、経済的に不安が付きまえば生活満足感や幸せ感はいわゆる味わえないであろう。幸せ感を左右する要素として真っ先に頭に浮かぶのは経済と所得であることは間違いない。もう少しゆとりがあったら幸せ感や生活満足感も上昇するに違いないと思いがちだが、先に述べたように、経済的に豊かになっても幸せに結びつかないことがわかる。図2で示すように、1人当たりのGNPは同じであるにもかかわらず、国により生活満足度の感じ方はさまざまなのである。エド・ディーナー（2007）は経済紙フォーブスの長者番付けに載った富豪の幸福度を調査したが、そのうち4割弱の富豪は平均的アメリカ人より幸福感が低いという調査報告を発表している³。富豪の幸福感とアフリカのマサイ族の幸福感はさほど変わらないということも、富が幸せ感と比例しないことを裏付けるものである。また高額宝くじに当たった人たちの幸福度の追跡調査を行ったフィリップ・ブリックマン（1978）も、その人たちが他のアメリカ人に比べて幸せ感が高くはないと報告している。

ノーベル賞受賞者の経済学者ダニエル・カーネマンは2006年、年収が2万ドル以下の場合には非常に幸せな人は22.2%で、5万ドルから8.99万ドルの人は41.9%にアップするものの、9万ドル以上では非常に幸せな人の割合は42.9%と、あまり上昇しないと報告している。つまり年収が5万ドル、日本円で約550万円くらいまでは収入が増えれば生活満足度も増える、しかしそれ以上になっても満足

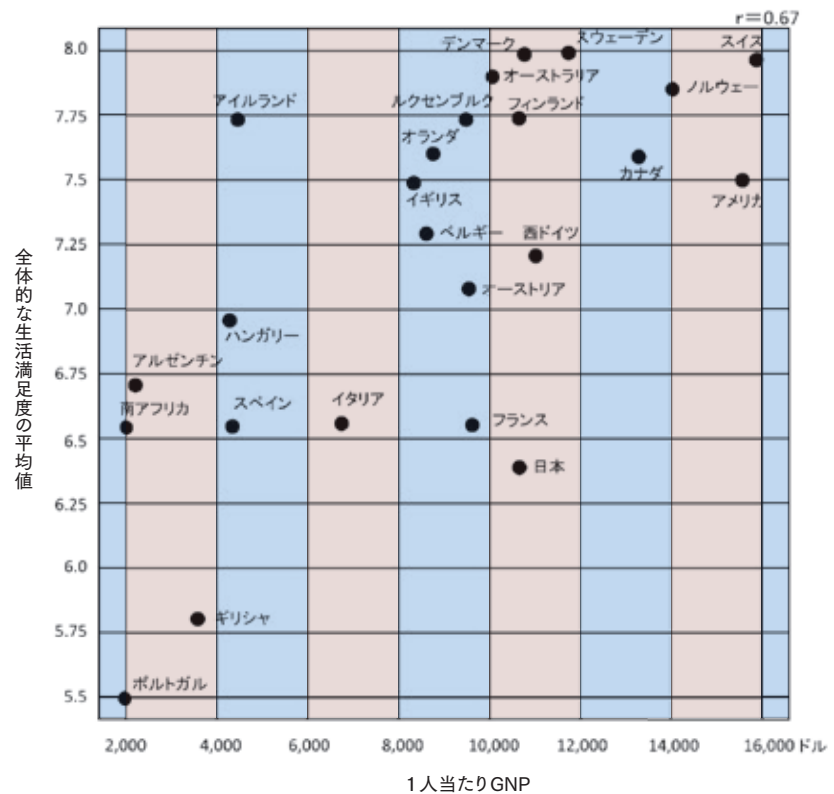


図2 経済発展の水準と生活満足度

出典: The Health of Nations, I Kawwachi, 2002.

感はあまり上昇しないという。生活水準が上がればまた不満が出ていつまでも求め続ける、ということも満足感が上がらない背景にあるようである⁴。

さらに2012年に発表した著書の中で、カーネマンは、物価が高い地域でも年間7.5万ドル以上収入がある場合、それ以上所得が増えても幸福感の増加はゼロであるとしている。

なぜ所得が幸せ感に反映されないかは心理的な側面からいくつかの要素が考えられる。つまり衣食住の基本が満足できないと生活満足感を得られないことは明らかだが、一度衣食住が賄えるだけの所得が得られれば、あとはあっても当たり前になり富に慣れてしまうのである。人は持っているものにすぐ慣れて気が付かなくなる傾向があり、上昇した生活水準にすぐ慣れて満足できなくなり、次の新しい基準に向かい不足を求めるからだといえるだろう。こうした傾向は経済の発展には有効だろうが、人の心の幸せ感を上昇させることにはつながらないと思われる。

社会格差と健康に関する研究の第一人者であるハーバード大学のイチロー・カワチ教授は著書（*The Half of Nations*）の中で、このことを18世紀の哲学者ドゥニ・デイドロの逸話を例に出して説明している。デイドロはあるとき部屋着をプレゼントされた。その部屋着はとても美しく、着ているとこれまでの書齋にある身の回りの机や椅子や本棚が古びて似つかわしくなくなり満足できなくなった。そこで今まで気に入って使っていた身の回りの家具をすべて新しくした。すべては素晴らしくなったが居心地が悪い書齋になりデイドロは後悔した、というものである。新しい水準のものを手に入れると次にまた不足が出てくる。次々に手に入れようとして絶えず何かを求め続ける心は満足できない、ということを示すものである。

心理学者のティム・カッサーとリチャード・ライアン⁵によれば、人生の目標を週休や社会的地位、名声に求める傾向が強い人は、人との関係性や自己成長、社会奉仕などを人生

人生の満足度（1～7点）

アメリカの富豪	5.8
アフリカ マサイ族	5.4
ペンシルベニア アーミッシュ	5.1
イリノイ大学生	4.7

図3 所得と人生満足度

出典：ディーナーら，2007年

所得（年収）	幸せでない	非常に幸せである
2万ドル	17.2%	22.2%
2万～4万9千ドル	13.0%	30.2%
5万～8万9千ドル	7.7%	41.9%
9万ドル以上	5.3%	42.9%

図4 所得と幸福感

出典：ダニエル・カーネマンら，2007年

の目標とする人に比べて幸福感を味わうことが少なく精神的にうつになりやすいと報告している。収入は生活を支える基本的な額があればそれ以上は増えても幸せ感が増えない。こうしたことから、目標を収入や社会的地位という外に向かったのベクトルから自分の心の中に向け、自己成長できる何かを探ることが幸せ感に結びついているといえそうだ。

幸せと格差感——格差が大きいほど幸せ感は薄くなる

給料は50万円、でも周りの人は100万円という会社と、給料は40万円、でもほかの人は10万円という会社のどちらを選ぶだろう？ 給料は安くても周りより高い収入のほうが気持ちがいい、高い収入でも周りより安いと何となく自己肯定感が低下する、そんなことはないだろうか。収入は実際の金額もちろん大事だが、それだけではなく周りに対するの比較で満足感や不満感が生まれるといえる。

みんなが貧しいなら貧しくても気にならないが、格差があると不満が生じて幸せ感が減少する。これはアメリカのペンシルバニアのロゼトという小さな町の疫学調査⁶で知られている。この町はイタリア系移民が

多く、心臓病やその他の生活習慣病の罹患率が他の地域の半分以下と低いことで知られていた。食事や喫煙率などは他の地域と変わりなかったが、社会学者たちがその要因を調査したところ、この町は人と人のつながりが強く連帯感があり平等意識が強く、一部の人が富を所有するという格差感がないためであることが分かったのである。

コミュニティと平等な意識、格差感のなさは健康ともかかわるといえる。しかし残念なことにこのロゼトの町も消費文明の波が押し寄せ、外部からの移住者が増加するようになった現在では、心臓病罹患率もほかの地域と変わらなくなったのである。

相対的な格差感が幸せ感とかかわる、という研究報告もある。カリフォルニア大学のマイケル・ハガティ⁷はアメリカの311の地域の幸福度と所得格差について調査した。結果は地域内の所得格差が高いほど、所得のいかにかわらず幸福度は低いことが分かった。つまり所得が同じでもその地域に裕福な人が多く格差が大きいと幸せ度が低くなり、裕福な人が少なければ幸福度が高くなるのである。みんなが貧しければ、まあ、こんなものだ、みんな大変なん

だ、と思っても、誰かが豊かで自分は所得が低い、というときに幸せ度は低下するのである。

幸せ感は伝わる

社会的なつながりが幸福感や健康と大きくかかわるのではないかとこの仮説は1897年のエミール・デュルケームの報告でスタートした。デュルケームはヨーロッパ諸国の自殺率を歴史的に調査し、社会的に混乱し結びつきが低下する社会では自殺率が高くなり、社会的な統合が高い社会では自殺率が低いことから、社会における人々の結びつきがうつや自殺とかかわると報告している。

つながりと心の状態についての調査はソーシャルキャピタルという概念も加わり、近年盛んになったが、2009年ニコラス・クリスタキスはボストン郊外のフラミンガムという町の住民5,124名を対象に1971年から2003年まで行われた生活習慣や日常生活の調査データをもとにして、つながりと幸福感やうつとのかわりについて解析を行った。そして友人や家族が幸せだと自分の幸せ感も高くなり、家族や友人がうつに陥ると自分もうつ傾向に陥る、友人や家族で近くにいる人の気分がその人の気分に影響するということを発表している。周りの人、特に近くにいる人の気分には影響される、といえる。自分1人で幸せになることはむづかしく、友人や家族など身近な人たちの幸せ感を上昇することが自分の幸せにも通じるのである⁸。

震災後の調査からみたつながりと幸せ感

ではつながりは震災などの大きなストレスを受けた場合、どのように心に影響するのだろうか。筆者らは2013年復興庁のこころのサポート事業を行った。この事業は震災後2年を経過した岩手県、宮城県の前被災地支援事業で、特に津波の被害で影響の大

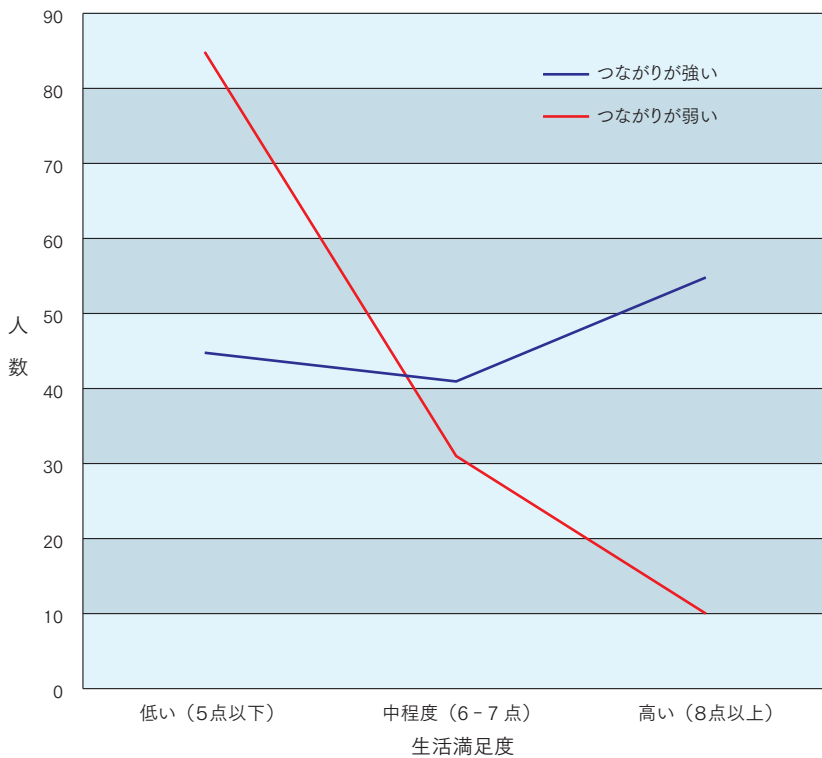


図5 つながりと生活満足感 — 転居した被災者の生活満足度とつながりとの関係

きかった沿岸部地域におけるストレス予防の講演会とつながりづくりのワークショップ型講習会で、参加者に被災の状況や心身の健康状態や生活満足度、周囲の人とのつながりなどのアンケート調査を行った。このうちつながりの指標としたのは、東北大学公衆衛生学辻一郎教授が宮城県石巻地区の被災を受けた方の健康状態とつながりを調査する際にハーバード大学大学院のイチロー・カワチ教授が提案した4項目の質問である。すなわち

- 1 周りの人はお互いに助け合っている。
 - 2 周りの人は信頼できる。
 - 3 周りの人はお互いに挨拶している。
 - 4 何か問題が起きたとき周りの人は力を合わせて解決しようとする。
- それぞれについて5段階で回答してもらい、ソーシャルキャピタルの目安とした。

アンケート調査参加者は1,263名で、うち転居を余儀なくされた方は271名であった。転居による仮設住宅での生活は大きなストレス要因であ

る。震災後2年を経過しても仮設に暮らす方のストレスの大きさは想像を超えている。当然転居経験者は、転居していない方に比べ、心身の主観的な健康状態は有意に悪化している。また生活満足度も低い。では転居して仮設に暮らす方はすべての方が生活満足度が低くなるか、というとそうではないのである。調査の結果、たとえ転居しても周囲の人とのつながりが強い場合は生活満足度は高く保たれ、周囲の人とのつながりが低下している人では生活満足度が低下してしまう。大きなストレス要因があるときでも、人と人とのつながりは心を救う支援となる。物資などの経済的な直接支援とともに、生活満足度を保つためには、周囲とのつながりやネットワーク作りの支援が震災時、震災後の地域のケアとして必要であることがわかる⁹⁾。

外的な目標から内的な目標へ

一定の所得があればそれ以上所得を増やしても幸せ感の上昇にはつながらない。富などの財産という外的

な目標ではなく内的なものに対する目標が人生の充実感を得るためには必要といえるだろう。内的な目標は他者との比較や競争ではなく、自分が集中でき努力ができる世界をもつ、つまり自分らしい人生を送ることができる世界を持つことといえるのではないだろうか。心理学者アブラハム・マズローは生理的欲求、安全欲求、愛と所属の欲求、社会承認欲求が満たされたなら、次は自己実現願望を目指すことが心の成長に大事であるということを述べている。自分らしい世界を持ち、その中で人とのつながりを作りつつ社会や他者に役に立つ何かをしていくということが、自己を肯定的にとらえ、納得のできる人生を送る大事な事柄に思える。

参考文献

- 1 電通総研編『世界60か国価値観データブック』同友館、2004年。
- 2 Myers, D. & Diener, E., "Who is happy," *Psychological Science* 6(1), 1995.
- 3 Diener, E., "Material wealth and subjective well-being," *Handbook of subjective well-being*, 2007.
- 4 Kahneman, D. et al., "Would you be happier if you were richer? A focusing illusion," *Science* 312, 1908-1910, 2006.
- 5 Kasser, T. & Ryan, R. M., "Further examining the American dream," *Personality and Social Psychology Bulletin* 22(3), 280-287, 1996.
- 6 Bruhn, J. G. & Wolf, S., *The Roseto Story*, University of Oklahoma Press, 1979.
- 7 Hagerty, M. R., "Social comparisons of income in one's community," *Journal of Personality and Social Psychology* 78(4), 746-771, 2000.
- 8 Christakis, N. A. et al., *Connected: The surprising power of our social networks and how they shape our lives*, Little, Brown and co. 2009.
- 9 Umihara, J. et al., "Association between social ties and life satisfaction in quake-affected communities," 『ストレス科学』 30(4), 2016.

スロー・イズ・ビューティフルの現在

辻 信一 (明治学院大学国際学部教授)

Shinichi TSUJI



文化人類学者。環境運動家。「スローライフ」「GNH」「キャンドルナイト」などをキーワードに環境=文化運動や「スロー・ビジネス」に取り組んできた。東日本大震災以後は、「ポスト311を創る」キャンペーンを展開、国内外でローカリゼーションの運動に参画。著書に『スロー・イズ・ビューティフル——遅さとしての文化』（平凡社）、ゆっくりノートブックシリーズ（全8巻、大月書店）、『ナマケモノ教授のぶらぶら人類学』（SOKEIパブリッシング）、『よきことはカタツムリのように』（春秋社）など多数。2009年より映像制作を手がけ、DVDブックシリーズ「アジアの叡智」（現在6巻）、『ヒルデガルト 緑のよろこび』（SOKEIパブリッシング）を刊行。

無力感

“スロー”と言えば、「のんびり」や「ゆっくり」を意味する言葉だと多くの人が思う。しかし、そうとは限らないのである。

そもそも、人はのんびり生きることを望んでいるのだろうか。そうとも思える。他者の生き方に対する羨望の眼差しというのは確かにある。でも自分のことになると、かえってほとんどの人がのんびりすることを怖れているように見える。忙しいことをむしろありがたいとさえ思っている。忙し過ぎて、いろいろやりたいことができないのは辛い。でも、その辛さが同時に自分を支えている、というような奇妙な感覚があって、この20年の間にも、その感覚は世の中に着実に広がっているようなのだ。

ワーカホリック（仕事中毒）という言葉は欧米にはすでにあっただし、過労死110番が日本につくられたのは1988年。その後、「カローシ」という言葉は海外でもそのまま使われるようになる。しかし欧米でも日本でも、それらが異常な事態だという共通の感覚が少しずつ崩れ、あるいは変容してきたようにみえる。もしそうだとしたら、それは大問題である。

その一方で、「スローライフ」という言葉を無力感が取り巻いているように思えてならない。

この20年、世界は大きく揺れ動いてきた。そこにはさまざまな要素があまりにも複雑に絡み合っ、事態は混沌としている。だが、ひとつ、この現代版の“激動”について確かなのは、変化の速度が急激に増して

いることだ。

変化の速さが、同時に、危機の深さを意味している。「幾何級数的」と言われるこの加速の中心にあるのは、技術と経済だ。産業革命までの4千年間をかけて人類の経済は2倍に成長したが、その後は多くの国が数十年で富を倍増させるようになった。つまり、経済成長が100倍にも加速したということだ。この成長を可能にした石油は、20世紀に本格的に利用され始めたばかりだということに、人類はもう埋蔵量の半分以上を燃やしてしまったらしい。同じ1世紀で世界の人口は4倍に増え、森の8割が消失した。

技術的な進歩は経済成長を加速させているだけではない。それは社会生活のあらゆる場面にも影響を与えずにおかない。圧縮された時間はますます大きなストレスとして人々の心にのしかかる。グローバル化し、スピードアップするばかりの大量生産、大量消費、大量廃棄は、自然生態系に大きな混乱を巻き起こしてきた。

もちろん、そこには人間にとって都合のいい変化も、都合の悪い変化も混ざっている。しかし——ここが肝心なところだが——それがどういう結果を伴うものであるかにかかわらず、「変化」そのものはよいことであり、必然的なことだとほとんどの人が感じているらしいのだ。しかも、変化は速ければ速いほどいい。そのスピードについていけなくても、悪いのは自分であって、変化の方に責任はない。どうい変化が望ましいかについて意見の違いはあっても、「変化そのものは善だ」という点では、「右」も「左」もない。

「ニュース・バリュー」という言葉の中にあるのも、「新しさ」という価値だ。いや、そもそもニュース(news)という言葉自体が「新しいことこそがよきこと」というメッセージなのだ。

「新しいことはよい」、そして「速ければ速いほどいい」。これが現代人の心をとらえている「速さの論理」というものだ。それが、「進歩教」や「成長教」といった現代の“宗教”を支え、それが人類の危機を加速度的に深めている。危機に歯止めをかけなければならない。しかし、そのためには、まずは自分自身に歯止めをかける必要があるのだろう。

スローライフとGNH

ぼくは『スロー・イズ・ビューティフル——遅さとしての文化』(平凡社、2001年)で、ビジネスという英語が「忙しい」を意味する「ビジー」から来ていること、そして英語のインダストリーという言葉が勤勉と産業という2つの意味をもっていることを指摘した。そして、こんな江戸の小話を載せた。

年寄「いい若者がなんだ。起きて働いたらどうだ」

若者「働くとうなるんですか」

年寄「働けばお金がもらえるじゃないか」

若者「お金がもらえるとどうなるんですか」

年寄「金持ちになれるじゃないか」

若者「金持ちになるとどうなるんですか」

年寄「金持ちになれば、寝て暮らせるじゃないか」

若者「はあ、もう寝て暮らしてます」¹

そこにも書いたように、この会話は“北”の先進国のエリートと“南”の途上国の庶民との間の、開発をめぐるやりとりで当てはめることがで

きる。これに類するジョークやコントは、世界中にある。深く普遍的な意味を湛えているはずのこの小話を、しかし、現代日本人はあまり面白いと思ってくれないようなのだ。「もう寝て暮らしている」という若者のふてぶてしくもユーモアに満ちた態度は、やはり、グローバル化の進展とともに、息の根を止められてしまったのだろうか。

同じような良質のユーモアを感じたのは、ブータンの第4代国王による造語、“GNH”だ。ぼくがブータンに通い始めたきっかけも、この“GNH”という言葉だったと思う。人類学者や冒険家によってつくられた、それまでの「秘境」としてのエキゾチックなイメージの中に、突然、この奇妙な言葉が飛び込んできて、ぼくの好奇心をかきたてた。

GNHはブータンのジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王(現在の第5代国王の父)が1979年、24歳のときに初めて使った言葉だと考えられている。経済の指標としてよく使われていた「GNP」(グロス・ナショナル・プロダクツの頭文字、日本語では「国民総生産」)をもじって、「P」に「H」を入れ替えた——つまり、「プロダクツ(商品)」の「P」の代わりに、「ハピネス(幸せ)」の「H」を入れた。GNHとはだから、一種の言葉遊び、平たく言えば「駄洒落」だったのだ。日本語ではふつう、「国民総幸福」と訳されている。

若き国王が、国際会議の後に立ち寄ったインドで報道陣の取材に応じたときのこと。ある記者にブータンのGNPについて問われた王は、GNPのことは知らないが、私にとって大切なのはGNHだ、と答えたという²。

当時のブータンのGNPが世界最低クラスであることは誰にでも想像できる。それをわざわざ訊くのだから、意地悪い質問に違いない。それに対して、しかし王は平静さを失うことなく、一種の「駄洒落」で返した。

一定期間内にお金でやりとりされ

た財やサービスの総和を意味するGNPは、「GDP(国内総生産)」とともに、その国の経済の力、そして社会の進歩の度合を表すものとして使われてきた。それを念頭に、第4代国王はこう言いたかったのだろう。お金で測られる豊かさは、必ずしも人々の幸福を意味しない。ブータンはGNPでは最低だとしても、なかなか幸せな社会だ。肝心なのはそのことではないか、と。こうも言いたかったのではないか。世界中が「発展」や「進歩」というプロセスの中にあるとあらかじめ決められていることが、そもそもおかしいのだ。

しかし、現実には、世界のほとんどの国がGNPやGDPを世界共通のモノサシとして、その数値を増やすことを経済成長と呼び、それを社会の目標としてきたのだ。

その数値が高い「先進国」の人々のほうが恵まれていて、幸せであり、遅れている「途上国」の人々は不幸だ。さらに、「途上国」がもっと発展して豊かになれるように、「先進国」は助けてあげなければならない、という論議も広まった。

GNHはこの“常識”に疑いの目を向けたのである。

前国王は、経済成長をめぐる競争がいたるところで自然環境の破壊を引き起こしていることを知っていただろう。1972年には、『成長の限界』が発表されて、このままいけば人類にとって破滅的な事態が起こるといふ予測が、急速に現実味をおび始めていた。

この人類存続の危機の最大の原因が、「先進国」と呼ばれる国々の経済的豊かさにこそあることも、すでに広く議論されていた。世界人口の2割が、世界中の8割の資源を使っている。だからこそ裕福な国は裕福なのだ。

「では、世界中が経済成長して、みんなが金持ちになればいいではないか」という各国エリートたちの主張は、40年後の今もまかり通ってい



ブータンの山村の人々と風景 1

る。当時のブータン国王でさえ、全世界が世界一豊かなアメリカの生活水準に達するためには、地球が4つも5つも要するというを知っていただろうに。

数量主義を超える

やはり同じ第4代国王の下で、ブータンは国をあげて、王制から民主制への移行に取り組んだ。2008年に新憲法が施行され、立憲君主制の政治体制が始まった。GNHを「国是」として憲法にも盛り込みながら、王権を含む国家権力の権限を大幅に制限し、自然環境の保全、伝統文化の継承、経済の暴走の防止などを保障する体制づくりが完成に向かっていくことを確信できたからだろうか、国王は予定を1年早めて退位して、またまた人々を驚かせた。

これは推測だが、GNHを唱えたブータン前国王が直接的、あるいは間接的に、影響を受けていたものに、

70年代はじめに出版された『スモール・イズ・ビューティフル——人間中心の経済学』があっただろう。著者の経済学者E・F・シューマッハーは、アドバイザーとして訪れた仏教国ビルマでの経験と、そこで受けたインスピレーションを基に、これまでの「食欲の経済」から「知足の経済」への転換を唱え始めた。そしてその考え方を、彼は「仏教経済学」を名づけた。ケインズの次の世代の経済学界のリーダーとも目されていたシューマッハーがそんなことを言い出したのだから、仲間の経済学者たちは驚くやら、あきれんやら。「経済が仏教と何の関係があるのか」という問いに、シューマッハーはユーモアたっぷりにこう答えたそうだ。「仏教のない経済は愛のないセックスのようなもの」³。

ブータン国王のGNHと同様、この答は単に相手をはぐらかすための冗談ではなかった。GNPに対するGNHがそうであったように、シュ

ーマッハーは、モノとその量をしか対象にしない経済学を、愛のない経済学として痛烈に皮肉ったのだ。

近年、世界中で豊かさの概念を問い直す動きが盛んになってきている。GNHが国際的に注目されたのもその動きと深く関係しているだろう。一方、GNHへの風当たりも強い。特にGNHを評価した側から、GDPやGNPのような「学問的」で“客観的”な指標とするために、それを数値化すべきだという声が高まっていった。

こうした声を受けてか、やがてブータン政府もGNHの指標化へと動き始める。GNHを指標として整えることによって学問の世界にも政治の世界にも、国際的にアピールしようというわけだ。

しかし、計測可能なものと見なされた途端に、GNHから何か大切なものが失われる。思えば、もともと駄洒落だった言葉だ。そこから、まずはユーモラスな批評精神が消えて



ブータンの山村の人々と風景 2

なくなる。

日本でGNHについて文章を書くとき、ぼくは「国民総幸福」という訳語を使うのだが、校正時に、わざわざ親切に「国民総幸福量」と“正して”くれる編集者がよくいた。(学生のレポートには“幸福料”と書く者もいたが、誤変換だと思いたい。)

ここにも「数量主義」が顔を覗かせている。経済を中心とする主流社会は、今も圧倒的に「質」より「量」のほうに傾いている。しかし、だ。ブータンの第4代国王がああ“駄洒落”にこめた重要なメッセージは、おそらく「この世には計測できない大切なものがある」ということだったはずなのに。

ぼくは思う。GNHとは、GNPに代わる指標の提案ではない。経済という“土俵”に代わる、幸せという“土俵”の提案でもない。それはむしろ、グローバル経済競争の“土俵”に弱小国を引きずりこもうとする大きな圧力への抵抗であり、進んで土

俵に乗ろうとする他の“途上国”への忠告だったろう。

そもそも、GNHを支える「4つの柱」の中の「健全な自然環境」を、その自然が人間に与えてくれる恩恵を、文化の活力を、その文化が人間に与えてくれる恩恵を、どう測れるというのだろうか？ 逆に、「測れるものだけを信じる」という心のあり方こそが、社会に深刻な問題を引き起こし、人間を不幸せにしているのである。

計測可能性を超える

シューマッハーの“スモール・イズ・ビューティフル”が「大きさの論理」への挑戦だったように、スロー・イズ・ビューティフルは「速さの論理」を超える試みである。この2つの論理を支えてきたのは計測可能性 (measurability) についての確信、つまり、「世界は計測可能なものでできている」という世界観だ。

「速さの論理」とは逆に、スローとは、計測可能性に寄りかかるのを拒む態度である。行為の結果としてのモノやコトへの評価とは別に、行為のプロセスそのものに、「計測不能性」という価値が生み出される。

チャールズ・アイゼンスタインの言葉を借りれば、こうも言えるだろう。「ゆっくりする」とき、ぼくたちは、計測可能性という価値とは別の価値に導かれているのだ、と。たとえば、何かしら違うモチベーションが働いているとか、ある種の情熱に動かされているとか⁴。

それは、「計測可能性」という観点から見れば、何の価値もないようなものかもしれない。たとえば、経済性や効用という視点からすれば、何の役にも立たず、何の見返りもない。損得勘定という合理的行動の基準から言えば、不合理で非合理だ。

それでも、なぜか、そこに情熱を感じる、ということが確かにある。その情熱の源は、文化によって、ま

た、個々人の資質によってまちまちだ。美意識、倫理、宗教、スピリチュアリティ、愛……。『速さ』はそれら計測不能な価値の豊かな領域に背を向け、逆に、『遅さ』はそこへと歩み入る。

アイゼンスタインが言うように、一見とるに足らない個人的な行動や、一見非効率だがていねいな生き方を、その社会的効果などに関わりなく、評価し、尊ぶことを誰もが知っている。また、計測され、予測されたものとは、行為の結果がまったく逆だということもある。さらに、計算された行為より、計算されない行為こそが、影響力や波及効果をもたらすこともよくある。

このことに光を当てたのが、現代世界の代表的な賢者として知られる禅僧ティク・ナット・ハンの「インタービーイング (inter-being 相即)」という考えだ。

自分自身と宇宙はお互いを写し合う。どの存在に起きることは何でも、私たち自身のうちにも起きている。私のすべての行動が波紋となって全世界に影響を与え、逆に、私たち自身にも跳ね返ってくるのだ⁵。

スローとはつながり

スローを「ゆっくり」、「遅い」と訳すことにためらいを感じる。そうした途端に量的な概念と化してしまいうるからだ。では、スローを日本語にするにはどうしたらいいのか。そう問われる度に、ぼくは「つながり」だと言ってきた。それを「インタービーイング」と言い換えることもできるだろう。同じように、“ファスト”とは単なる「速さ」ではなく、「つながりが断たれること」であり、「分離」である。

世界のすべてをつないでいる関係の1つひとつに、それ相応の時間性

が備わっている。「急ぐこと」、「効率化」「スピードアップ」は、その時間性への圧力となり、ある限度を越せば、関係そのものを損なうことを意味する。

著書『無銭経済宣言——お金を使わずに生きる方法』で、人間とお金の関係について思索を展開するマーク・ボイルはこう指摘している。

「カネは諸悪の根源」という言い方がよくされるが、それは正確ではない。むしろ、「まちがった自己認識こそが、現在の多くの個人的・社会的・生態学的危機の根源だ」と⁶。

このように言うボイルとは、イギリスで3年近くにわたって、お金を一切使わない生活と「贈与経済 (ギフトエコノミー)」を実践した男だ。あの東日本大震災と同じ年の末に、彼の前著『ぼくはお金を使わずに生きることにした』は、心のこもった贈り物のように、海の向うからぼくのもとに届いた。3年間カネなし生活を通じて、ボイルは単に器用にブリコラージュ (日曜大工) をこなす生活者になっただけではなく、一流の人類学的フィールドワーカーに、そして偉大な思想家になった。そしてその彼が達した結論とは、金まみれの生活によって断たれた根源的なつながりを、無銭生活によって取り戻すことができるということだった。つまり、彼はお金を失うことで世界を得たのだ。

これだけ深刻な危機が世界を覆っているというのに、多くの人々はなぜ今までと同じようにしか振る舞えないのか。その根本原因は「自己」に関する「錯覚」にある、とボイルは考える。お金とはこの錯覚を温存し、強化する道具立てなのだ、と⁷。

そしてお金こそが、世界のあるゆるものを量に還元し、計測可能なものにする手だてだ。

地球上いたるところで上がっている人間たちの、そして他の生命たちの、さらに自分自身の悲痛な叫びが聞こえないのだろうか。ボイルはそ

う問いかけ、こう答える。いや、そんなはずはない。ただ、お金という分断の道具をつかまされたために、『孤立分離の幻想』(ティク・ナット・ハンの表現) に囚われているだけなのだ。

お金に邪魔されて、世界から、そして自分自身からも“分断”されているぼくたちは、自分が今生きているはずの「今・ここ」からも隔てられている。ボイルはダライ・ラマのこんな言葉を引用している。

将来の心配ばかりして現在を楽しもうとしない。そういう人は結局、現在も将来も生きてなどないのだ。あたかも死ぬことなどないかのように生き、本当の意味で生きることなく死んでいく⁸。

ではもう一度、スローとは何か。インタービーイングとしての自分自身、そして「今・ここ」の再発見である。スローライフとは、孤立分離の幻想から抜け出して、他者との、コミュニティとの、人間以外の生きものたちとの、そしてこの世界のすべてのモノやコトとのつながりを取り戻すことである。

注

1 辻信一『スロー・イズ・ビューティフル——遅さとしての文化』平凡社、2011年、129-130頁

2 GNHについて、詳しくは辻信一『辻信一とともに歩く タシデレ(幸あれ)! —— 祈りはブータンの空に』SOKEIパブリッシング、2016年を参照

3 E.F.シューマッハー著、坂井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル再論』講談社、2000年、8頁

4 Eisenstein, Charles, July/August 2016, “Big Problems Need Small Solutions,” Resurgence & Ecologist, Issue 297, pp.29-31.

5 同上

6 マーク・ボイル著、吉田奈緒子訳『無銭経済宣言——お金を使わずに生きる方法』紀伊国屋書店、2017年、40頁

7 同上74頁

8 同上45頁

支え合う社会を

宮本みち子 (放送大学教養学部教授・副学長、千葉大学名誉教授)

Michiko MIYAMOTO



1947年、長野県松本市生まれ。東京教育大学文学部経済学・社会学専攻卒業。お茶の水女子大学大学院家政学研究科修士課程修了。社会学博士。専攻は家族社会学、若者の社会学、生活保障論。1975年千葉大学教育学部助手、同助教授、同教授、のち名誉教授。1997-1998年英国ケンブリッジ大学社会政治学部客員研究員。2005年放送大学教養学部教授、2014年同副学長。中央教育審議会委員、社会保障審議会委員、内閣府子どもの貧困対策に関する有識者会議座長等。著書に『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容』（勁草書房）、『若者が無縁化する——仕事・福祉・コミュニティでつなぐ』（ちくま新書）、『すべての若者が生きられる未来を——家族・教育・仕事からの排除に抗して』（岩波書店）、『下層化する女性たち——労働と家庭からの排除と貧困』（勁草書房）、『人口減少社会の構想』（編著、放送大学教育振興会）など。

格差拡大する社会の子どもの貧困

2017年に訳本が刊行されたロバート・パットナム『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』（柴内康文訳、創元社、原本は2015年）は、〈夢なき社会〉を生んだ米国の貧困を、人々の生き立ち、つまり子どもの物語の詳細な聞き取りと、豊富なデータと理論によって米国の20世紀後半から現在まで社会がどのように変化したのかを描く力作だ。問題関心は副題が示すとおりで、「アメリカにおける機会格差の拡大」という点にある。その第1章に、アメリカンドリームを体現したオハイオ州ポートクリントンにおける1950年代の子どもの日常が描かれている。その特徴を一言でいえば、経済または教育は拡大し、所得平等性は比較的高く、低階層に生まれた子どもが、社会経済的なはしごをよじ登るための機会は豊富だったのだ。

インタビューした大人たちはこのような子ども時代を回想して、つぎのような表現を多用している。

・スポーツを通じて、みなは同じに見えていた。

・町の牧師の1人が気にかけてくれて……学資援助の受け方や、どのように出願手続きを踏むかの手ほどきをしてくれた。

・社会経済的なはしごで最下層にいる家族との間の社会的距離は、現在の標準よりもずっと短いものだった。

・肉体労働者の子どもも専門職の子どもも似たような家から集まって、意識しない形で学校や地域、ボーイスカウトや教会のグループで混じり

合っていた。

異なる社会階級出身の3人が異口同音に言うのは、「子どもたちのなかでは貧しいということのをそれほど意識することはなかった」ことだった。コミュニティの人々は子どもたちを「われらの子ども Our Kids」として声をかけたり助けたり、ときには叱るのが日常の光景だったという。

その後この地はどうなったのか。21世紀に同じ地で、労働者階級の子どもはかつてと比べようもないほど、困難が多く孤立した絶望的な生活を送っている。ある少年は「ふらついている」ばかりで誰からの導きもまったくなかった。1950年代だったら、教師やコーチ、教会の長老、さらには毛皮をまとったご婦人すらもがこのような子どもに手をさしのべたのだが、今や街の人々は少年を自分で苦闘するままたまかせている。1950年代の大人のだれもが、つまりビリヤードの達人から牧師にいたるまで、少年のことを「われらの子ども」と考えていたことから考えると驚くべき変貌ぶりだ。パットナムが描くアメリカのコミュニティと子どもの暮らしの変貌ぶりは、7人に1人が貧困という日本と比較しても比べものにならないほどで、格差の拡大にともなう暮らしの崩壊がすさまじい。

ところで、1950年代のアメリカの豊かさは日本の比ではなかったにもかかわらず、パットナムが描く当時のアメリカのコミュニティの風景は、かつての日本の風景に通じるものがある。コミュニティには実があり、家族崩壊の例は少なく、貧しい家庭の子でも裕福な家庭の子でも、子ど



図1 ロバート・パットナム著、柴内康文訳『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』(創元社、2017年)

もの世界に乖離は少なく、さまざまな大人たちが子どもにチャンスを持ってきてくれたというアメリカの風景は、団塊の世代である筆者の子ども時代と本質においてそれほどの違いが感じられない。それだけ、日本社会が失ってしまったものの大きさをあらためて感じるのである。

日本では2015年に子どもの貧困対策法が成立し、その後各地で取り組みが始まった。しかし貧困が話題になるとき必ず誰かの口を突いて出る言葉がある。「自分も子どもの頃は貧しかったけれど、努力して今のくらしができています。人は努力すれば何だって克服できるはずだ。努力をしようとしないうちを甘やかすべきではない」といった批判である。高度経済成長前半期に子ども時代を過ごした人々のなかに特に多い。それは、アメリカの1950年代と2000年代の構造的違いを無視した批判とパットナムが記述しているものとよく似ている。

若者の暮らしと孤立・貧困

人々の無理解・無関心は子どもの貧困に限ることではない。不安定な仕事や、心身のハンディや、家族内のごたごたや人間関係を悩んで将来

の展望のみえない若者についても同じような現象がみられる。いやむしろ、若者の問題となると子どもの問題以上に受け入れない人々がいる。「健康で働ける年齢の若者にできないことはないはずだ」という認識があるのだ。無業の若者(いわゆるニート)がさまざまなハンディを抱えた若者たちに多いという実態も知られていない。

そこで、筆者が取り組んできた事例のなかから、“失われた20年”における若者の孤立・貧困・排除の実態を描いてみたい。2008年から2016年にわたり4つの地方県で、不安定就労の状態にある130名に及ぶ若者から仕事・結婚・暮らしに関して詳しい話を聞くという調査に参加した。若者たちの語りには、20年におよぶデフレ状況がくっきりと反映していた(石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち——インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社、2017年)。

所得は全国的に伸び悩んでいるが、都市と地方の所得格差も拡大している。地方圏の少子高齢化と人口減少化により、ますます少なくなる若者たちが、安定した仕事に就けず、将来の見通しのある生活基盤を築けないという皮肉な構造が広がっている。

私たちの関心は、若者たちの仕事・結婚・暮らしがどうなっているか、地方圏の未来と、その担い手としての若者の人生に明るい展望があるのか、ないとしたら何が必要なのかを明らかにすることだった。

地方圏は変わったと思うことがいくつもある。ファッションや振る舞いも都会との差がそれほど感じられない。彼ら／彼女らが休日に出かけるというショッピングモールは全国共通であるし、車で2時間も飛ばせば地方圏の都市に出ることができ、高度成長期のような「東京に出たい」という憧れを抱く若者は少なかった。情報化とモータリゼーションは若者たちをすっかり変えたので

ある。それにもかかわらず、「仕事と暮らし」の点で、地方圏の若者が直面している厳しさには独特のものがあり、将来を見通すことのできない姿に懸念を感じざるをえなかった。

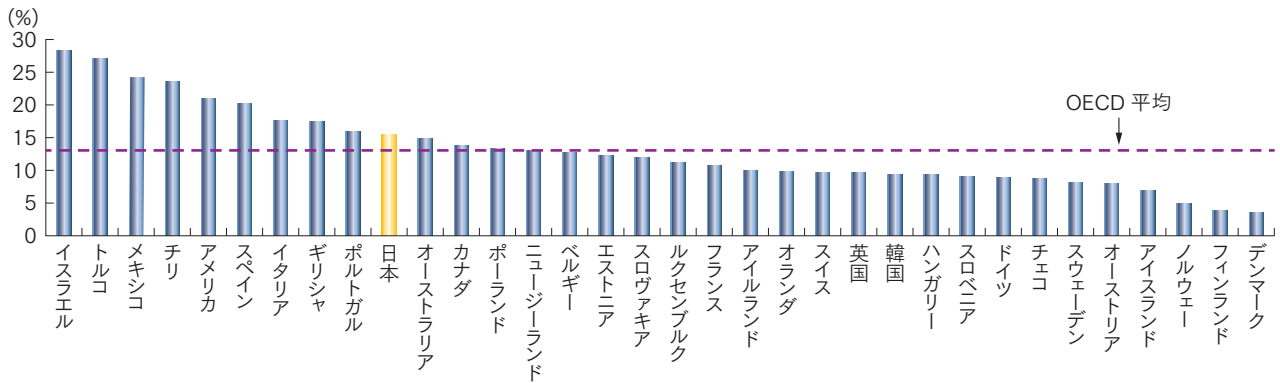
不安定就労の若者は親と同居している。つまり、親が若者の暮らしを支え、乏しい社会的支援を代替しているのである。いまや少子化対策として婚活推進は国を挙げての施策となっているが、若者たちの生活実態からして推進事業は容易なことではない。

神戸大学の西澤晃彦氏によれば、格差拡大という分極化圧力に対して踏みとどまろうとする家族単位の「生活構造の抵抗」が多数派の生活の基調となっているが、低所得層を中心として生涯未婚率が上昇することによって、「生活構造の抵抗」が必要な人々が、「生活構造の抵抗」の単位(つまり家族世帯)を持ちにくくなっているという(西澤晃彦『貧困と社会』放送大学教育振興会、2015年)。地方圏の場合には、同居していた親が亡くなった後に単身になるだろう人々が、すでに生まれつつある。

若者のための社会的支援は少ない

若者期は人生の基礎固めをするという意味で非常に重要な時期であるが、若者を対象とする社会的支援は少ない。地方圏ではとくにそうである。不安定な就労から脱出するための試行錯誤を支援するサービスがほとんどない。たとえあったとしても有益な情報が若者には届いていない。人生の基礎固めをするべきライフステージにある若者たちに役立つはずの、仕事、教育・訓練、結婚、住宅、地域移動、お金、健康、レジャー等に関する有益な情報を若者がいつでもどこでも得られる環境を作る必要がある。とくに、先が見えない日々を過ごし、「限定された地域にひきこもる」ようなくらしをしている若者たちを生まないためには、若

(1) 子どもの貧困率



(2) 全体

順位	相対的貧困率		子どもの貧困率		子どもがいる世帯の相対的貧困率									
	国名	割合	順位	国名	割合	合計		大人が1人			大人が2人以上			
1	チェコ	5.8	1	デンマーク	3.7	1	デンマーク	3.0	1	デンマーク	9.3	1	ドイツ	2.6
2	デンマーク	6.0	2	フィンランド	3.9	2	フィンランド	3.7	2	フィンランド	11.4	1	デンマーク	2.6
3	アイスランド	6.4	3	ノルウェー	5.1	3	ノルウェー	4.4	3	ノルウェー	14.7	3	ノルウェー	2.8
4	ハンガリー	6.8	4	アイスランド	7.1	4	アイスランド	6.3	4	スロヴァキア	15.9	4	フィンランド	3.0
5	ルクセンブルク	7.2	5	オーストリア	8.2	5	オーストリア	6.7	5	英国	16.9	5	アイスランド	3.4
6	フィンランド	7.3	5	スウェーデン	8.2	6	スウェーデン	6.9	6	スウェーデン	18.6	6	スウェーデン	4.3
7	ノルウェー	7.5	7	チェコ	9.0	7	ドイツ	7.1	7	アイルランド	19.5	7	オーストリア	5.4
7	オランダ	7.5	8	ドイツ	9.1	8	チェコ	7.6	8	フランス	25.3	7	オランダ	5.4
9	スロヴァキア	7.8	9	スロベニア	9.4	9	オランダ	7.9	8	ポーランド	25.3	9	フランス	5.6
10	フランス	7.9	9	ハンガリー	9.4	10	スロベニア	8.2	10	オーストリア	25.7	10	チェコ	6.0
11	オーストリア	8.1	9	韓国	9.4	11	フランス	8.7	11	アイスランド	27.1	11	スロベニア	6.7
12	ドイツ	8.8	12	英国	9.8	11	スイス	8.7	12	ギリシャ	27.3	12	スイス	7.2
13	アイルランド	9.0	12	スイス	9.8	13	ハンガリー	9.0	13	ニュージーランド	28.8	13	ハンガリー	7.5
14	スウェーデン	9.1	14	オランダ	9.9	14	英国	9.2	14	ポルトガル	30.9	13	ベルギー	7.5
15	スロベニア	9.2	15	アイルランド	10.2	15	アイルランド	9.7	15	メキシコ	31.3	15	ニュージーランド	7.9
16	スイス	9.5	16	フランス	11.0	16	ルクセンブルク	9.9	15	オランダ	31.3	15	ルクセンブルク	7.9
17	ベルギー	9.7	17	ルクセンブルク	11.4	17	ニュージーランド	10.4	17	スイス	31.6	15	英国	7.9
18	英国	9.9	18	スロヴァキア	12.1	18	ベルギー	10.5	18	エストニア	31.9	18	アイルランド	8.3
19	ニュージーランド	10.3	19	エストニア	12.4	19	スロヴァキア	10.9	19	ハンガリー	32.7	19	オーストラリア	8.6
20	ポーランド	11.0	20	ベルギー	12.8	20	エストニア	11.4	20	チェコ	33.2	20	カナダ	9.3
21	ポルトガル	11.4	21	ニュージーランド	13.3	21	カナダ	11.9	21	スロベニア	33.4	21	エストニア	9.7
22	エストニア	11.7	22	ポーランド	13.6	22	ポーランド	12.1	22	ドイツ	34.0	22	スロヴァキア	10.7
23	カナダ	11.9	23	カナダ	14.0	23	オーストラリア	12.5	23	ベルギー	34.3	23	ポーランド	11.8
24	イタリア	13.0	24	オーストラリア	15.1	24	ポルトガル	14.2	24	イタリア	35.2	24	日本	12.7
25	ギリシャ	14.3	25	日本	15.7	25	日本	14.6	25	トルコ	38.2	25	ポルトガル	13.1
26	オーストラリア	14.5	26	ポルトガル	16.2	26	ギリシャ	15.8	26	スペイン	38.8	26	アメリカ	15.2
27	韓国	14.9	27	ギリシャ	17.7	27	イタリア	16.6	27	カナダ	39.8	26	ギリシャ	15.2
28	スペイン	15.4	28	イタリア	17.8	28	アメリカ	18.6	28	ルクセンブルク	44.2	28	イタリア	15.4
29	日本	16.0	29	スペイン	20.5	29	スペイン	18.9	29	オーストラリア	44.9	29	チリ	17.9
30	アメリカ	17.4	30	アメリカ	21.2	30	チリ	20.5	30	アメリカ	45.0	30	スペイン	18.2
31	チリ	18.0	31	チリ	23.9	31	メキシコ	21.5	31	イスラエル	47.7	31	メキシコ	21.0
32	トルコ	19.3	32	メキシコ	24.5	32	トルコ	22.9	32	チリ	49.0	32	トルコ	22.6
33	メキシコ	20.4	33	トルコ	27.5	33	イスラエル	24.3	33	日本	50.8	33	イスラエル	23.3
34	イスラエル	20.9	34	イスラエル	28.5	—	韓国	—	—	韓国	—	—	韓国	—
	OECD 平均	11.3		OECD 平均	13.3		OECD 平均	11.6		OECD 平均	31.0		OECD 平均	9.9

図2 相対的貧困率の国際比較(2010年)

出典:OECD(2014)Family database“Child poverty”

注:ハンガリー、アイルランド、日本、ニュージーランド、スイス、トルコの数値は2009年、チリの数値は2011年。

者の生活を丸ごととらえて相談に乗ったりエンパワーする場が必要だ。就労していても賃金が低かったり不安定であることに対して、それを補完する住宅手当または公営住宅、児童扶養手当などの補完的所得があれば暮らしは成り立つ。

地方圏の調査から気づいたことは、帰属する場や集団がなく、社会関係の広さや厚みが感じられない若者が少なくないことだった。つまり、若者

たちは地元における若者集団を成してはおらず、個人化しているか孤立化している。地域共同体の衰退は、かつて若者たちが担っていた青年団や消防団活動などを衰退させた。転職が多く不安定な雇用状態にある若者ほど、確固とした帰属先をもてない状態にある。地域社会の衰退と仕事の世界の弱体化が相まって、若者たちの安定した生活の場を衰退させているのである。

若者の暮らしを外に開く

オーストラリアのワーキングホリデー制度を利用する日本の若者に関する静岡大学の藤岡伸明氏の研究がある。対象としたのはノンエリート層で、国内の労働市場が閉塞するなかでそれぞれの理由からワーキングホリデー制度を利用して海外へ出た若者たちである。その研究から興味



図3 「よりそいホットライン」の案内チラシ <http://279338.jp/yorisoit/>

深い発見があった。ひとつは、国際的な雇用・労働システムが「若者の不満の爆発を未然に防ぐ安全弁」となっていることだった。もうひとつは、ワーキングホリデーでの労働体験が「自己効力感の強化によって若者の就業意欲を回復させる再生装置」として機能している可能性があることだった。ワーキングホリデーから帰国した若者たちは必ずしも安定した仕事に就いているわけではないのだが、それにもかかわらず数年間の海外体験は若者たちに「何か」を与えていることはまちがいない（藤岡伸明『若者ノンエリート層と雇用・労働システムの国際化——オーストラリアのワーキングホリデー制度を利用する日本の若者のエスノグラフィー』福村出版、2017年）。

私たちがインタビューした若者たちの多くは、仕事、地域移動、教育機会に関する豊かな情報がなく、異文化との接触も限られていた。その点で、藤岡氏のワーキングホリデー研究の知見は示唆に富んでいる。高度経済成長期に若者の多くが故郷を捨てて都会をめざして移動したことを必ずしも肯定するわけではないが、若者たちの暮らしが外に開かれ、いつでも広い世界を体験できることや広い視野を培うことは重要である。それは郊外のショッピングモールの

客として、全国チェーン店やグローバルチェーン店を自由に出入りすることで代替できることではない。

社会的孤立化は、自分あるいは自分の属する集団や場を越えたところの事象に対する無関心をまねく。そのことが、地元への無関心、主体的参加意欲の喪失に結びつくとすれば、若者たちは地元の担い手とはならない。

社会から排除される人々への社会的支援を——よりそいホットライン

かつてのコミュニティが果たしていた機能を新しい方法で果たす必要がある。ひとつの例を紹介しよう。2012年2月に国の事業として開設された「よりそいホットライン」は、被災地から始まり全国に広がっている無料の24時間電話相談事業である。一般社団法人社会的包摂サポートセンターが受託し、全国の支援活動に従事する人々が相談・支援ネットワークを構成し、必要なら訪問や伴走支援につながる活動で、2015年にスタートした生活困窮者支援制度と一体となって機能している。1日平均3万コールを超えるアクセスがあり、つながりにくい状態が続いている。

相談件数が多いのは、①心の悩み、②人間関係、③病气、④お金の

順であるが、実際のところ相談内容は多岐に及んでいる。複数の要因が重複していることも多く、相談者は自力では解決できない状態に陥っている。また、お金と仕事と病がワンセットになっているものも多く、家族解体のリスクを抱えている。もっともコールが多いのは40代、続いて30代と50代という現役層で、子どもの貧困化ともつながり、国民生活が悪化している社会状況を物語っている。

よりそいホットラインをはじめとする民間支援団体の活動から見てくるのは、「死ぬほどつらい」と思う人が非常に多いこと。これらの人々は身近な理解者や支えになる存在が極めて少ないばかりでなく、夫や家族や身内の暴力や排除におびえている例が少なくないという実態である。それは、家族機能が崩壊しているというより、家族そのものが社会から排除されているために、家庭内で最も弱い者が排除による負の結末を引き受けさせられた状況である。家族内で負の連鎖が起こっているといえよう。

よりそいホットラインは、これまでの細分化、専門化、分断化した限定的な専門職による支援事業ではない。困難を抱える当事者にそっと寄り添いながら支援を行ってきた全国各地の民間団体が中心となって展開する事業である。そのため、相談員が日々の業務を通じて互いの分野の支援策を学び、これからの「新しい公共」の担い手に育っていくことが期待されている。

ロバート・パットナムが描いた1950年代の米国コミュニティがもっていた「われらの子ども」への責任意識、困っている人には手をさしのべようという共生・共感の意識を取り戻すと同時に、よりそいホットラインの例のように新たな社会システムを打ち立てることがこの社会の存続と発展のためにも必要なのである。

公共哲学とポジティブ心理学の出会い

——マイクロとマクロの幸福の相互循環

小林正弥（千葉大学大学院社会科学研究院教授）

Masaya KOBAYASHI



1963年東京都生まれ。東京大学法学部卒業後、同大助手、ケンブリッジ大学客員研究員、千葉大学教授などを経て、現在、千葉大学大学院社会科学研究院教授、同大公共研究センター長（公共哲学センター長）。日本ポジティブサイコロジー医学会理事。専門は政治哲学、公共哲学、比較政治。マイケル・サンデル教授と交流が深く、NHK「ハーバード白熱教室」では解説も務めた。最近ではポジティブサイコロジーの研究にも取り組む。著書に『対話型講義——原発と正義』（光文社新書）、『日本版白熱教室——サンデルにならって正義を考えよう』（文春新書）、『サンデル教授の対話術』（サンデル氏と共著、NHK出版）、『サンデルの政治哲学——〈正義〉とは何か』（平凡社新書）、『友愛革命は可能か——公共哲学から考える』（平凡社新書）、『人生も仕事も変える「対話力」——日本人に闘うディベートはいらない』（講談社+α新書）、『アリストテレスの人生哲学』（講談社）、『神社と政治』（角川新書）など多数。

ポジティブ心理学との出会い

マイケル・サンデルが語ったような政治哲学とポジティブ心理学とはどのような関係にあるのだろうか。

私は政治哲学や公共哲学を専門として研究している。世界の公共哲学の第一人者マイケル・サンデルのハーバード白熱教室がNHKで放送されて注目を集めたが、その解説を行ったことをきっかけにして私自身も対話型講義を行うようになり、これらの活動が一般にも知られるようになった。

他方で、最近ではポジティブ心理学の研究にも傾注しており、科学的調査を行いつつ、ポジティブ心理学国際学会で報告を行ったり、学術的論文を執筆したりしている。千葉大学でもこれについての講義を開始した。

この関連で京都大学こころの未来研究センターの先生方にもさまざまなご協力やご教示をいただいている。昨年、日本のポジティブサイコロジー医学会は京都の龍谷大学で行われ、私が「ポジティブで幸せな社会に向けて」というセッションの座長となって、広井良典先生や内田由紀子先生にご登壇いただいた。千葉大学公共学会の『公共研究』第13巻第1号（2017年）¹に広井先生のご講演の内容が掲載されているので、ご覧いただければ幸いである。

さて、このような心理学的関心が人目につくにつれて、「なぜポジティブ心理学に関心を持ったのですか？」という質問を受けることが多くなった。公共哲学や政治哲学のイメージ

が強いので、一見縁遠いように見える心理学に力を注いでいるのが不思議に見えるのだろう。そこでこの関係から説明を始めよう。

ここには論理的関係があるが、はじめはその内容よりもむしろ対話型講義との関係でポジティブ心理学の存在に気付いた。ハーバード白熱教室が話題になってから、NHKは他のさまざまな海外の大学の講義を「白熱教室」と銘打って放送し始めた。その状況の中で、やはりハーバード大学で多くの受講生が集まっていた有名講義として、タル・ベン・シャハーの『ハーバードの人生を変える授業』（大和書房、2010年）が翻訳出版された。私はさまざまな白熱教室にも関心を持ったので、これにもざっと目を通した。

当時はまだ詳しい内容は知らなかったが、「善き生き方」や「幸福」を扱う学問の新しい潮流を感じて好感を持った。そこでハーバード大学のサンデルを訪ねた後で、ニューヨーク大学でアラン・シュレヒターとダニエル・ラーナーのポジティブ心理学についての人気講義を拝聴した²。その講義は参加者に質問しながら進めていくもので対話型講義とも似ていたので、私は大いに関心をかき立てられた。その後、ポジティブ心理学の本家ともいえるペンシルバニア大学のMAPPプログラム（応用ポジティブ心理学修士課程）の授業にも2回ほど一部に出席させていただいたが、進め方は似ていた。それはむしろ当然で、若手のダニエル・ラーナーはこの教育スタッフの役割も務めていたからである。



図1 公共哲学とポジティブ心理学

このような第一印象に触発されてその内容を調べていったところ、この新しい心理学は公共哲学の内容と関連しており、後者をさらに発展させて定着させるために大きな役割を果たしうること気づいた。

サンデルの「正義論」にせよ、ポジティブ心理学にせよ、いずれも学生たちが探求している幸福や「善き生き方・善き社会」に示唆を与えるものだからこそ、大きな注目を集めているのだろう。この2つの授業方法の類似性やその人気は、内容的な関連と無関係ではなかったのである。ならば、この2つを結びつけば、いわば「幸福の公共哲学」が成立するのではないだろうか（図1参照）。

アリストテレス的心理学の「善き生」と幸福

サンデルや私の公共哲学はコミュニタリアニズムといわれている。他の近代的な政治哲学と対比した際の大きな特徴は、「善き生」と言われるような倫理的・精神的側面に注目していることと、個人だけではなく「共に」生きて考え行動することを重視していることである。正義を考える際には、「善き生」との関係にも注目して公共的な議論を行う必要性を主張するのである。

そこで日本におけるサンデルや政治哲学についての講演や著作で私は「善き生」の概念にしばしば言及している。これには反響があり、医療や

宗教などの会議や学会などにもしばしば招聘されるようになった。「善き生」に注目する必要性を関係者が感じているからだ。

ところがそのうち、一般の聴衆に対しては「善き生」といっても、そのイメージがうまく伝わっていないような気が始めた。西洋で「善き生」というときには、ギリシャ哲学やユダヤ・キリスト教の人生観がすぐに念頭に浮かぶだろう。ところが日本ではそれに相当するような具体的な像があまりないようなのだ。考えてみると、若い世代にとっては仏教や儒教、神道などの伝統的な宗教や倫理とは接する機会が少ないから、それも当然だろう。

そこで私は『アリストテレスの人生相談』（講談社、2015年）という啓蒙書を刊行した。敏腕編集者の質問に対して、ビジネスパーソンなどが抱くさまざまな問いについてアリストテレスの観点から答えたのである。アリストテレスの倫理学は「善き生」についての古典中の古典だ。この本の反響を見て、今の日本人には「善き生」についての基本的な説明が必要なことを確信した。コミュニタリアニズム的な政治哲学の意義を広く知らせて政治の質を向上させるためにも、「善き生」についてもっと多くの人々が知り考えなければならぬ。それは、善き政治の実現を可能にするための前提条件である。

そのような試みをしている過程で、ポジティブ心理学は「善き生」を科

学的に明らかにしつつあることに気づいた。一般向けのその紹介書でもよく「善き生」という言葉が用いられていて、アリストテレス以来の哲学の流れとも関連させて説明されていることが多いのだ。

簡単に説明すれば、従来の心理学は主として精神病などのネガティブな心理状態からの回復を目指していたのに対し、ポジティブ心理学は健康や幸福などのポジティブな心理状態を研究し、それを実現したり増進したりすることに焦点を合わせている。アリストテレスの倫理学は、人生の最大の目的を幸福の実現に求めているから、ポジティブ心理学と共通性が高いのだ。

しかもその創始者のマーティン・セリグマンやクリストファー・ピーターソンらは、人間の人格的特性を研究し、世界のさまざまな文化的伝統に共通するものとして、6つの美德とそのもとの24の人格的な強みを抽出した。幸福の実現のためには、特徴的な人格の強みを発揮することが大事だと考えられていて、ポジティブ介入と言われる実践的なエクササイズでは、これを自覚して活性化できるように働きかける。

この考え方は、アリストテレスの幸福論そのものといえる。彼は「人間にとっての善とは美德（卓越性）に即した魂の活動である」と定義して、それによって幸福、ギリシャ語におけるエウダイモニアがもたらされるとした。これは、金銭で得ることができる享乐的な快楽とは異なり、浅い物質的な幸福ではなく深い内面的な幸福だ。たとえば音楽家が魂に潜む音楽的素質を開花して優れた音楽を演奏したら、それは人々に喜びを与えると同時にその人自身にも幸福をもたらす。魂の資質に即したその人固有の幸福なのだ。

アリストテレス的倫理学の紹介に努めていた私にとっての大きな発見は、この幸福観のエッセンスが科学的な心理学によって解明されつつあ

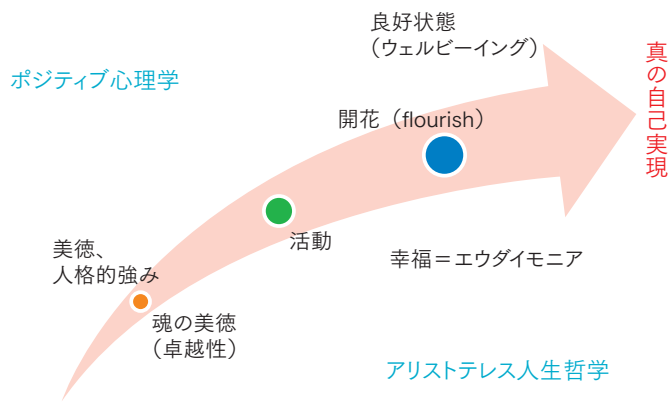


図2 善き生と幸福

ることだった。ポジティブ心理学は主として統計的分析によって、人間の心理と健康や成功などの相関関係や因果関係を科学的に明らかにしている。たとえば楽観的な人は悲観的な人に比べて、心臓病や風邪になりにくいし、学業や仕事でも成功する傾向が強い。要するに、幸福になりやすいのである。

現代人は科学の成果に魅せられているから、このような研究の社会的意義は大きい。ギリシャ哲学のような古典的哲学には目を向けない人でも、科学的研究の成果には耳を傾けざるを得ないからだ。そこで私は、古典的な哲学や倫理学の洞察を今の世界に生かすためには、ポジティブ心理学の発見を広く紹介し発展させることがきわめて有益だと考えるに至ったのである。

ポジティブ心理学への哲学的寄与と研究内容

もっともこの心理学研究者たちは哲学には詳しくない場合が多いから、その内容は必ずしも明確には思想的に整理されていない。ポジティブ心理学は幸福研究と密接な関係があり、相互に刺激し合いながら発展している。初期にはこれらは功利主義という近代的哲学と共通性が高いという見解が強かった。快樂や喜びについて主観的良好状態(ウェルビーイング)と言われる指標などで主観的幸福感を計測して、それを増減さ

せる要因を研究したからである。だからその代表者たちは「快樂の心理学」という名称をすら使っていた。

それに対して自己実現や意味などが幸福に大きな影響をもたらすという考え方が台頭し、快樂を表す「ヘドニア」との対比で「エウダイモニア」という言葉で幸福を呼び始めた。双方は幸福感の計測においても、それぞれの考え方に基づいて作られている調査票を用いて、健康や業績、成功などとの相関を調べて自分たちの考え方の妥当性を主張した。「ヘドニア-エウダイモニア論争」と言われる。

この結果、それぞれの指標に基づく幸福度には有意義な相関があることが明らかになり、さまざまな変数との相関を見ても、いずれの幸福指標も有意義であることが明らかになった。単純なポジティブ感情についてはヘドニアに相当する主観的良好状態の指標も大きく関係するが、自己実現や意味などについてはエウダイモニアに相当するエウダイモニア的良好状態のほうが相関は大きい。2種類の指標は関連しているが、それぞれが独立した意義を持つわけである。

このような論争の刺激もあって幸福の観念についても省察が行われた。もともとセリグマン自身は、単純なポジティブ感情による「快い生」だけではなく、より大きな存在への貢献という「善き生」も「本当

の幸福」にとって重要であるとしていた。さらに近年では、「ポジティブな感情、没入、ポジティブな人間関係、意味、達成感」という5つの次元によって良好状態を計測するという良好状態理論を提起している。幸福という概念を科学では使うのをやめて、開花・旺盛・繁栄を意味する栄え(弥栄; flourish)という概念を多用するようになってきている。意味をはじめとするエウダイモニア的観念に力点がますます置かれるようになってきているわけである。

そこで私はこのようにポジティブ心理学の近年の発展を哲学的に整理し、アリストテレス的心理学と特徴付けた(図2参照)。方法論的に見ても、価値に中立的で厳密な近代科学というよりも、エウダイモニア的な幸福を実現することを目的とする実践学と解釈できるからである。つまりこの心理学は、アリストテレスの学問分類を適用すれば、厳密な理論的科学ではなく、大きな傾向的法則を明らかにする実践的科学なのだ。

これが、2015年に国際ポジティブ心理学会第4回世界大会で発表した私の議論のエッセンスである。ちょうどその前にバーバラ・フレデリクソンという著名なポジティブ心理学者が、共同研究者マーシャル・ロサダの数理的モデルを撤回した。彼女は、ポジティブな感情とネガティブなそれとの比率(ロサダ比)が2.90対1を超えると、繁栄する可能性が高まるという主張をしていた³のだが、その基礎となっていた数理的モデルに間違いが指摘されたのである。これも、ポジティブ心理学が厳密な理論的科学ではなく、大まかな心理的傾向的法則を明らかにする実践的科学であることを証左している。このような観点から、千葉大学における経験的研究では、日本において良好状態指標の有効性を検証するとともに、エウダイモニア的指標を発展させることを目指している。

また、ポジティブ心理学は発足当

初から組織についての研究も3つの柱の中の1つに挙げていたが、マクロな社会との関係については他の領域ほど進展してはいないので、近年は残るフロンティアとして注目されている。そこで、今年の第5回世界大会ではこの領域に関して、コミュニタリアニズムとリンクさせることによってポジティブ心理学自体の豊かな発展が可能になる、という議論をラウンドテーブルのセッションで提起した。すでに述べたようにポジティブ心理学は「善き生」という倫理的側面を科学的に明らかにしているとともに、ポジティブな人間関係が幸福感にとって最大の役割を果たし、コミュニティとの関わりも大きな意味を持つことがわかっているからである。

哲学と科学との架橋による幸福の相互循環

このように公共哲学と組み合わせることでポジティブ心理学を研究することは、コミュニタリアニズムを科学的に補強し進展させるとともに、公共哲学の洞察を生かしてポジティブ心理学をマクロな領域に発展させることを可能にするだろう⁴。そのビジョンを簡単に言えば、個々人にポジティブで幸福な心が増えることによって、ポジティブで幸福な社会が発展するし、逆に後者のマクロな進展によってミクロな前者も増大するということである。ポジティブ心理学と連携したこのような公共哲学を「幸福の公共哲学」とか「ポジティブ公共哲学」と言ってもいいだろう(図3参照)。

もしこのような試みが成功すれば、哲学と科学を架橋するという大きな可能性が現れる。今日という時代の大きな問題は、古典的哲学と近代的科学とが分裂してしまっているということだ。文系と理系の分断といってもいいだろう。人文的な教養智と自然科学的な知識が分かれてしまい、人間の心の問題が置き去りに

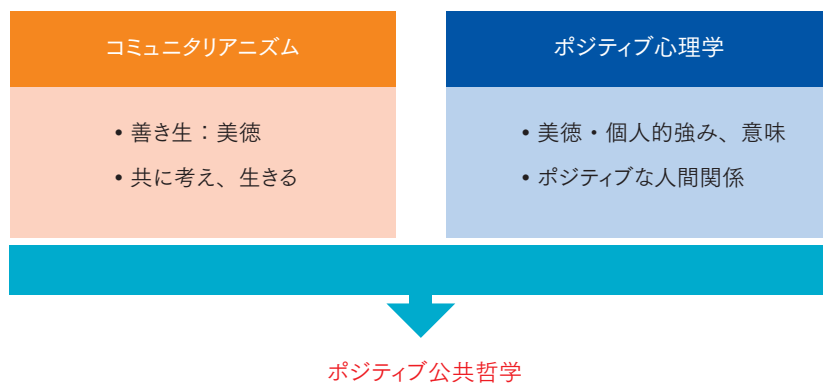


図3 ポジティブ公共哲学

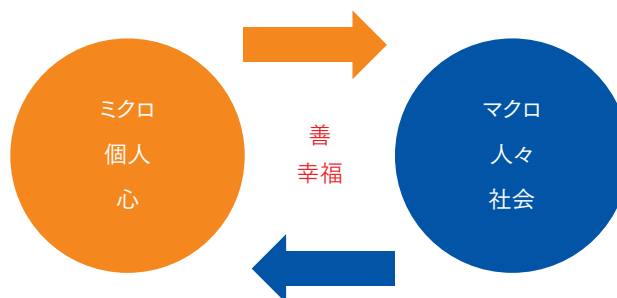


図4 幸福の相互循環

される一方で、科学的・技術的發展が暴走して環境問題をはじめとするさまざまな社会的問題を引き起こしてしまっている。これに対して、コミュニタリアニズムの公共哲学ないしアリストテレス的哲学とポジティブ心理学が統合的に発展することができれば、哲学や倫理学と科学、ひいては文系と理系の知が接続し、相互に触発し合いながら発展することが可能になるだろう。

それは、心の研究を哲学的かつ科学的に進展させ、それに基づいて政治経済などを含めた社会を健全に発展させることを可能にするはずだ。そこには、ミクロな個々人の心の幸福が起点となることによってマクロな社会の幸福が促され、それがまた個々人の幸福を広げるという相互循環がありうるだろう(図4)。これは、大小の幸福の相互循環というまさにポジティブな夢に他ならない。

注

1 「幸福政策は可能か: 幸福をめぐる理念と公共政策」<http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/103401/>

2 Daniel Lerner and Alan Schlechter, MD, Thrive: How To Succeed In College (And Life), New York, Little, Brown and Company, 2017.

3 バーバラ・フレデリクソン『ポジティブな人だけがうまくいく3:1の法則』(日本実業出版社、2010年)。

4 この大要として、拙稿「ポジティブ心理学と公共哲学」『公共研究』第13巻第1号(2017年) <http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/103399/>



研究プロジェクト一覧(平成27年度)

*肩書きは当時

教員提案型連携研究プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
自然とからだ	生態智の拠点としての聖地文化 ― ところ・場所・癒しの研究	鎌田東二
	身体疾患・症状に関する心理療法の研究	河合俊雄
	遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明	船橋新太郎
	意思決定と社会性の神経基盤の研究	阿部修士
	環境要因が潜在的認知に及ぼす影響	上田祥行
きずな形成	終末期に対する早期支援	カール・ベッカー
	対人相互作用に関わる認知・感情機能	吉川左紀子
	つながり・共生のメカニズムとところの豊かさ	吉川左紀子
	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	地域の幸福プロジェクト	内田由紀子
期待感とところの豊かさについての研究	柳澤邦昭	
ところ観	ところ観の思想的・比較文化論的基礎研究(人類はところをどのようにとらえてきたか?)	鎌田東二
	ところとモノをつなぐワザの研究 ― 伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に	鎌田東二
	ところの古層と現代の意識	河合俊雄
	ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義	熊谷誠慈
発達障害	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	前頭葉機能検査成績の発達に伴う変化	船橋新太郎
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
現代の生き方	文化・歴史的観点からのところの豊かさ比較研究	河合俊雄
	出生をめぐる医療と倫理	カール・ベッカー
	組織文化とところのあり方:日本における企業調査	内田由紀子
	孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究 ― 京町家「くらしの学び庵」プロジェクト	清家 理
	認知症をもつ人および家族のQOL向上のための施策のあり方研究 ― 認知症初期集中支援チーム介入分析からの考察	清家 理
教育	ところ学創生:教育プロジェクト	吉川左紀子
	連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
震災	東日本大震災関連プロジェクト~ところの再生に向けて~	鎌田東二
幸福感総合	国民総幸福(GNH)を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈
負の感情	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家 理

一般公募型連携研究プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
被災地のところときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究IV	大西宏志(京都造形芸術大学芸術学部教授)
心理療法場面に見られる象徴化機能の現代の問題に関する臨床心理学的研究 ― 事例にみられるイメージ表現から	前川美行(東洋英和女学院大学人間科学部准教授)
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀(追手門学院大学経営学部准教授)
自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは:市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて	伊勢武史(京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)
甲状腺疾患におけるところの働きとケア	長谷川千紘(京都文教大学臨床心理学部講師)
高齢者の認知能力に及ぼす運動スキルの影響とその神経基盤	積山薫(熊本大学文学部教授)

研究プロジェクト

環境要因が潜在的認知に及ぼす影響

上田祥行 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

■ 研究の目的

普段、われわれの目には多くの情報が入ってくるため、それらのすべてを意識的に処理することはできない。個々の物体すべてを正確に認識する代わりに、これらの物体から抽出した統計的情報を認識していることが知られている (Ariely, 2001)。このような認識はアンサンブル知覚と呼ばれ、意図的な処理を必要とせず自動的に行うことができる (Chong & Treisman, 2005)。知覚されたアンサンブル情報は2秒程度の短い時間であれば、記憶されていることが示されている (Brady & Alvarez, 2011; Chong & Treisman, 2003)。本プロジェクトでは、知覚されたアンサンブル情報がより長い時間記憶されているのか、また記憶されているならば、そのアンサンブル情報が後の行動に影響を及ぼす可能性があるのかについて検討した。

■ 研究の方法

この目的を達成するために、本プロジェクトでは単純接触効果のパラダイム (Zajonc, 1968) を用いて実験を行った。単純接触効果とは、一度見たことのある物体を、そうでない物体よりも好きであると答える効果である。この効果には、見た物体の潜在的な記憶が関与していると考えられている (Bornstein & D'Agostino, 1992; Seamon et al., 1995)。もしアンサンブル情報が、観察者が意識しないうちに比較的長時間記憶されているのであれば、後から同じアンサンブル情報を持つ物体を見たときに、1度も見たことがない物体であったとしても好きだと答えることが予想される。

実験では、図1に示すような多数の円を画面上に呈示した。実験参加者の課題は、今の画面で呈示された円の平均の大きさ (アンサンブル情報の一種)

と1つ前の画面で呈示された円の平均の大きさのうち、どちらが大きいかを解答することであった。これらの判断をしばらく行ったあと、2つの大きさの円を参加者に呈示し、どちらの円がより好ましいと思うかを解答するように教示した。ここで呈示された2つの円

のうちの1つは、前の判断課題で呈示されていた円の平均と等しい大きさであり、もう1つは平均よりもわずかに大きい、もしくは小さい円であった。実験の結果、判断課題で呈示されていた円の平均の大きさを持つ円が、より好ましいものとして判断された。特筆すべき点は、判断課題のときに、平均の大きさの円は一度も呈示されていなかったことである。このことは、われわれは計算されたアンサンブル情報を意図せずに記憶しており、この記憶された情報によって、知らず知らずのうちにその後の選択行動が変化していることを示している。

実験1では、参加者に平均の大きさを比べるように、つまり平均を計算するように教示していた。しかしながら、アンサンブル情報は意図的に計算することなく取得できることが示されている (Chong & Treisman, 2005)。このため、続く実験では、参加者に明示的にアンサンブルを計算することを教示しない状態でも、このような効果が見られるのかについて検討した。

実験2では、前の実験と同様に多数の円を繰り返し画面上に呈示した。これに加えて、ランダムなタイミングで色に変化する十字の注視点を画面中央に呈示した。実験2での参加者の課題は、注視点が赤色になったときに、で

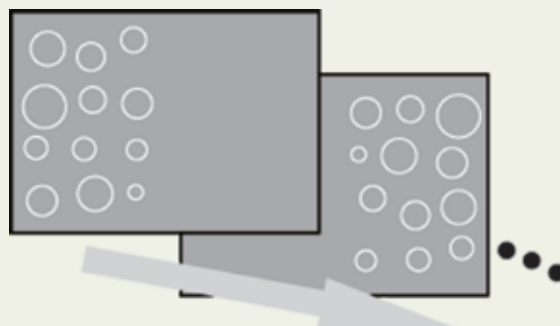


図1 実験参加者に呈示された実験画面。実験2では画面の中央にランダムなタイミングで色に変化する注視点も同時に呈示された。

きるだけ早くかつ正確にボタン押しで報告することであった。また、参加者には周辺に呈示される円が注意を逸らすための妨害刺激であるので、それらを見逃して注視点の色に注意を向けて解答するように明示した。この課題をしばらく行ったあと、実験1と同様に2つの大きさの円を参加者に呈示し、どちらの円がより好ましいかを解答してもらった。実験の結果、注視点課題で妨害刺激として呈示されていた円の平均の大きさを持つ円が、より好ましいものとして判断された。この結果は、平均の大きさの円は注視点課題のときに一度も呈示されておらず、かつ多数の円は妨害刺激なので無視するように教示されていても、それらのアンサンブル情報が記憶されていることを示している。

■ 考察

われわれは普段の生活で、目に映る物体の平均の大きさや、配置の偏りを意図的に計算したり、記憶したりはしていない。しかしながら、こうした環境中の統計情報は、気づかないうちに蓄えられ、認知に影響を及ぼしていると考えられる。この蓄積が、文化による認知の差や個人差などの原因になっている可能性が示唆される。

対人相互作用に関わる認知・感情機能

——2者の関係の認知における直感判断・熟考判断の比較

吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター教授)+ 上田祥行(同特定助教)

■人物の印象判断と2者の関係に関する判断

人の対人行動は、他者の顔に含まれるさまざまな情報を手がかりに調整されている。中でも顔の表情は、その人物の感情状態を表すシグナルであるだけでなく、その人物がどのような性格特性をもっているかを推測する手がかりともなる。たとえば、怒りの表情は「支配性の強さ」の印象を、微笑みは「親しみやすさ」の印象を伝える表情であることが知られている。

一方、これまでの研究から、対面する2者の関係についての判断(例: どちらの人物がより支配的に見えるか)は、こうした個々の人物に対する印象判断に基づいて行われているわけではないことが明らかにされている。たとえば、怒り、嫌悪、驚き、恐怖、喜び、悲しみなどの表情を表す人物について支配性の強さの印象評価を行うと、怒り表情の人物はもっとも支配性が強く、喜び表情の人物の支配性は弱いと評価される。しかし、怒り表情の人物と喜び表情の人物が向き合う場面を見て、どちらが支配的な人物かを判断する課題では、喜び表情の人物が一貫して「支配的」と判断されるのである。

複数の人物が存在する場合、人物間の関係性を正しく理解して初めて人は適応的な行動をとることが可能となる。しかし従来の表情認知研究では、こうした「人物間の関係についての判断」において、表情やそれ以外の情報がどのような役割を果たしているのかについてはほとんど検討されてこなかった。そこで、複数の人物に関する関係性判断がどのような過程で行われるのか、またそうした判断の難易度を左右する要因を明らかにすることを目的として実験を行った。

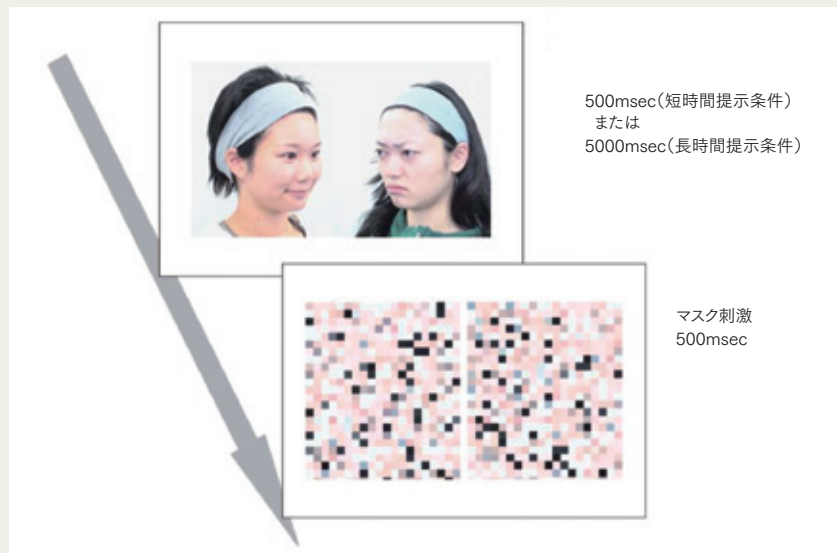


図1 実験で用いた刺激の提示様式

■信頼性、魅力、味方選択課題

本研究では、「どちらの人物が信頼できるか」「どちらの人物が魅力的か」「どちらの人物の側につきたいか」という3種の関係性判断を取り上げ、これらの判断における怒り、喜び、悲しみ、中性表情の影響について検討した。また、情報が短時間(500msec)しか利用できず、直感に基づく判断を要する条件と、情報が比較的長時間(5000msec)利用でき、熟考判断が可能な条件を設定して比較した。

表情の提示様式は図1に示した。実験では、12名の女性モデルの中から毎試行ランダムに2名の写真を提示した。表情写真を提示した後、ランダムモザイクをマスク画像として提示し、その後2択の判断を求めた。

信頼性、魅力、味方選択課題のいずれにおいても、短時間提示条件では、喜び表情の人物が他の表情の人物よりも有意に選択される頻度が高かった。しかし、こうした喜び表情に対するバイアスは、長時間提示条件ではいずれの課題においてもみられなかった。信頼性、魅力、味方選択課題での関係性判断において、短時間での直感的判断

が求められる状況では、表情は有効な手がかりとして利用されるが、長時間の熟考が可能な状況では、表情以外の顔の諸特性が判断に利用されることが明らかになった。

表情は、短時間でも認識可能な、知覚的流暢性の高い情報である。さらに、喜び表情は接近行動を誘発するシグナルとなるため、信頼性や魅力、あるいは「この人物の側につきたい」という味方選択判断を短時間で行う場合には、有効な情報源として利用されるのだろう。

現実場面では、知らない人物同士のやりとりの様子を見て、非言語情報のみから2人がどのような関係にあるのか、どちらが優勢なのかといったことを正確に見抜くのは容易ではない。本研究から、時間的な制約が厳しい状況では、人は表情という一過性の情報を用いて人物の特性判断や行動判断に役立てていることが示された。

2者の関係性についての熟考判断において、表情以外のどのような情報が利用されているのかは現在のところよく分かっていないため、今後さらに検討する必要がある。

研究プロジェクト

つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ

一言英文 (京都大学こころの未来研究センター特定助教) + 内田由紀子 (同准教授) + 吉川左紀子 (同教授)

■はじめに

現在の日本の社会においては、経済成長を超えた新たな豊かさの形成が求められている。これまで「豊かな地域」については主に経済状態・労働状況・人口動態などの指数から測定されることが多かった。近年では住民の肯定的な心理変数を測定し、その地域平均をもって地域の豊かさを数量化しているが、地域全体として人々のつながりやこころの豊かさを反映するようなマクロ指標を作成した研究は存在しない。

持続可能な地域の形成には多様な住民が地域外の他者とも連携し、地域を守り育てる互助の風土を基盤とし、持続的に地域の共有価値がはぐくまれるマクロ状態（社会状態・風土・社会関係のあり方）を形成することが必要である。そこで、人々のつながりやこころの豊かさが存在する地域の状態を捉える指標を考案し、地域の絆と価値の形成を理解するための研究を行った。

■実施内容

本年度は、①関西地区の2エリアにて社会調査ならびに住民の生活環境調査のデータとの関連を検討した。また、②地域住民が集まる拠点にて、住民の生活に関するインタビュー調査を行った。

■方法

①社会調査と生活環境調査

調査対象者は対象地区内の20歳以上の住民全員で、回収率は50%、男女比は1:1であり、年齢の中央値は「60～64歳」であった。

心理調査で得られた集落ごとの自他の幸福の相関関係（心理調査から算出した回帰係数「自己の幸福=B〔集落の人々全般の幸福認知〕+e」のBの値）を算出した。Bが高い集落は、その集落全体として相互依存的事であることを

示す。すなわちBは、地域的な「つながりの指標」とみなすことができる。

地域の持続性として「子ども110番」のステッカーを自宅に貼付している件数を観察して数量化し、調査対象となった7地区それぞれの平均値を算出した。

②地域拠点におけるインタビュー調査

調査対象者は、①の「つながりの指標」で高い得点を示した地域において人々の交流の要となっている百貨店に2015年11月の1週間に来店し、許可の得られた地域住民13名であった。調査者は同意を得た後、店舗にておよそ15分程度にわたり「あなたにとって、『幸福なくらし』とは何ですか？」という問いかけを伴うインタビューを行った。

■結果

①社会調査と生活環境調査

「子ども110番」ステッカー貼付件数の地域平均と「つながりの指標」との間には、正の相関関係がみられた。すなわち、人々のつながりが強い特徴を持つ地域ほど、次世代を保護しようとする向社会的な社会行動が見られ、持続性に資する特徴がある。

②地域拠点におけるインタビュー調査

住民に共有されている幸福観は（表1）、総じて「結びつき」が含意されていた。すなわち、自分と地域住民との間、自分と暮らしている自然環境との間といった、自己と周囲の存在との関係性に対して感謝など肯定的感情を含む特徴があった。また、「ありのまま」

表1 インタビューに対する回答例（太字は要点）

		回答
1	女性	毎日普通に暮らせることなんですかね。普通に健康に。年取ってきてますそう思う。
2	男性	平々凡々な、何も無いのが幸せ。病気をしないこと。
3	男性	まずは健康。あと、活きた野菜だな。活きている野菜はうまい。スーパーにあるのはハウスのまがいもん。
4	男性	素朴。自由奔放がいいのではないかな。
5	男性	おいしいもの、おいしいお酒。みんな、地域や家族を愛している。自分が不幸だと思っている人は少ないと思う。
6	女性	みんな仲良く。
7	男性	基本的には健康で、家族みんな元気で、そこそ収入があること。
8	男性	田舎の良さ、のんびりしているところ、人情味に幸せを感じる。周りの人も幸せだと思う。
9	女性	ここの生活が幸せ。幸せは人による。自然に近いところで人間らしく生きていきたいと思って東京から来た。
10	女性	健康であること、体が資本。田舎の生活は不便だけど、食の安心、食への感謝の気持ちの方が大きい。人の愛情もすごい。田舎の生活の受け取り方、受け入れ方によると思う。
11	男性	世代で暮らしていること。他の人が（幸せか）どうかはよくわからない。平凡なのが幸せなのかもしれないが、なかなか気づかない。
12	男性	田舎では食べていけたらいい。とにかく借金しないで自分で食えたら幸せ。贅沢はできない。
13	男性	人間的に豊か、というかほっとする気持ちで過ごせることが一番いい。横のつながりが最近希薄になっていると感じる。顔を合わせたら挨拶をする、とか。

であることを評価した「知足」の価値観も見取ることができ、これはコミュニティアニズムという持続性を持つ種類の幸福観（広井，2009）に近いと解釈した。

■まとめ

これらの研究より、つながりのある地域には、（1）地域全体として向社会的行動が見られ、（2）地域住民の交流の拠点では、つながりと知足を旨とする幸福観が見られることが分かった。今後は、人々の交流行動やネットワークを捉えること、言語報告によらない健康の測定方法（例：生理指標）を併用することや、つながりの指標の低い地域の特徴を具体的に明らかにしていく必要があると考えられる。

農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本

内田由紀子(京都大学こころの未来研究センター准教授)

本研究では、日本の地域社会の中で、どのような地域がどのような社会関係を持ち、その中で個人がどのように振る舞うのかを検討する。現在、非都市部の人口減少や高齢化の問題はひとくりに語られ、方策が練られることが多い一方で、地域特有の文化やコミュニティのあり方が確かに存在しており、それらを解明することにより、各地域に適合した施策を見出すことが重要である。本研究では、特に農業と漁業という生業文化に着目し、地域コミュニティの特性と、住民の心理傾向の関係を検証した。

本研究の目的は、以下の2つの柱にまとめられる。

■研究目的

1) コミュニティにおける社会関係資本の生成

これまでの研究においてわれわれは農業・漁業コミュニティにおける普及指導員(農業や漁業などの技術指導あるいはコミュニティ形成を促進する普及事業を実施する都道府県の職員)の役割に注目し、コミュニティの社会関係資本(たとえば、コミュニティ内部の人同士の信頼関係)に普及指導員が及ぼす影響を検討してきた(内田・竹村, 2012)。本研究では、普及指導員だけでなく、農業者・漁業者を回答者とする調査を実施することで、農業者・漁業者の視点から社会関係資本に普及活動が及ぼす影響を検討することを目的とした。

2) 地域コミュニティの生業と住民の心理傾向

地域コミュニティと一口に言っても、実際にはそのあり方は多様である。本研究では、過去の文化心理学の知見に立脚しつつ、地域コミュニティの主たる生業が、そのコミュニティの社会関係や住民の心理・行動に影響するメカ

ニズムの解明を目指した。

■調査の実施とこれまでの知見

調査1: 同業者グループのリーダーおよび担当普及指導員の調査

近畿・中国・四国を中心としたエリアの農業者グループ・漁業者グループのリーダーの立場にある人々を対象とした調査データを分析した。この調査には、グループの社会関係資本、ならびに農業者・漁業者の視点から見た普及活動の役割・効果を検討するための項目などが含まれていた。同時に、各グループを担当する普及員を対象とした調査も実施し、農業者・漁業者視点に加えて、普及員視点からの分析も可能とするデータベースを構築した。

調査1のこれまでの分析から、普及員が社会関係の「コーディネーター」としての機能を担っており、農業者同士・漁業者同士の信頼関係に影響力を持っていることが示された。第1に、同業者グループ内の信頼関係を高めやすい普及員は、「多くの知識・技術」「人を引っ張り統率し、方向転換させる指導力」「周囲と連携してチームワークを形成する」といった特徴を持っていた。第2に、グループの状態(たとえば、メンバーの相互扶助の程度)について、グループのリーダーと担当普及員が一致した認識を持っているときに、グループ内の信頼関係が高まりやすかった。第3に、リーダーと担当普及員の認識が一致しやすいのは、リーダーが多くの種類の地域活動に参加しているときであることが示された。

調査2: 農業地域・漁業地域住民を対象とした郵送調査

近畿・中国・四国・東海地方の一部を対象地域として、412集落(調査2a)ならびに164集落(調査2b)の住民を対象とした郵送調査を実施した。分析では、住民1人ひとりの生業(特に、

農業と漁業)の影響に注目しつつ、地域コミュニティ(集落)で農業・漁業がどれだけ盛んに行われているかにも注目し、住民の「相互協調性」への影響を主に検討した。相互協調性(本調査では特に、周囲の人が自分をどう思っているかを気にする傾向)は、これまでの比較文化研究で、欧米より東アジアで強く見られることが示されてきた心理傾向である。

2回の調査データを分析した結果、農業・漁業といった生業が、個人の心理傾向に影響していることが示された。ただし、農業と漁業では、その影響の在り方が異なった。農業の場合、回答者本人が農業を営んでいるかどうかと関係なく、農業が盛んな集落に居住していれば、より相互協調的な傾向が生じていることが示された。さらに、集落内の農業者率が高いときには、集合活動(たとえば、排水路の維持活動)への住民参加率が高くなり、その結果として、住民の相互協調性が促進されることが示された。

一方、漁業が盛んな集落に住んでいる人々に共通する心理的要素は見られなかった。そして、漁業集落では、農業集落と比べて集合活動への参加を促す効果が弱かった。こうした集合活動への参加の違いが、農業と漁業で異なる影響が心理傾向に対して見られた一因になっていたと解釈される。代わりに、漁業に従事している人々には共通性がみられた。本人が漁業を営んでいるときには、自尊心とリスク回避傾向がともに高まっていたのである。以上の知見は、生業によってコミュニティ内部に形成される社会関係が変化してくること、また、それによって、心理傾向にも違いが生じることを示している。

研究プロジェクト

期待感とこころの豊かさについての研究

柳澤邦昭 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

■日々の幸福感を満たす期待

私たちは、ものを所有すること（モノ消費）や出来事を経験すること（コト消費）で、さまざまな喜びや幸せを感じる。最新家電製品を手に入れ使用したとき、友人と海外旅行に出かけたときなど、その状況はさまざまである。加えて、人は商品を使用したときやサービスを実際に経験したときだけでなく、そのような消費行動を頭に浮かべ、その到来を期待しているときにも、幸せな感覚を得ることができる。ただし、その感覚はモノ消費とコト消費でやや異なっている可能性がある。たとえば、同じ金額の金銭報酬ならできるだけ早い時期にもらえることが嬉しいものの、もし映画に出てくるような有名女優にキスしてもらえるならば今すぐよりも3日後くらいに経験したいという(Loewenstein, 1987)。この3日程度の期間を空けることにどのような意味があるのか不確かではあるものの、その1つには特別な経験を心待ちにすること自体に喜びや幸せを感じていることが示唆される。このような将来の消費を期待・想像することで得られる幸せをローウェンスタインはセイバリング(Savoring)として言及している。

近年の研究では、セイバリングはモノ消費よりもコト消費で大きく(Kumar, Killingsworth & Gilovich, 2014)、その背景に消費に関する他者との会話が関連すると報告されている(Kumar & Gilovich, 2015)。これらは、コト消費は会話を通じ、他者との共有が可能であるため、そのような消費に対するセイバリングは社会的つながりの感覚を得ることができるためと考えられる。そこで、本研究ではセイバリングが日常の幸福感を向上させる効果を持つかどうかを明らかにする心理実験を行った。特に、これらの関係に社会的要素(e.g., 他者との会話)が必要であるか

どうかを明らかにした。さらに、モノ・コト消費のセイバリングを促進する背景要因を探索的に検討した。

■セイバリングに関わる諸要因

本研究では実験参加者に対し、商品を使用しているところをイメージしてもらい、そのイメージをすること自体がどの程度幸せかを回答させた(セイバリング指標)。また、それらの商品に関する特徴として、購入後に他者との会話の材料になるかどうか、ストレスが和らぐようなものかどうか、参加者自身の価値観の変化をもたらすものかどうか、商品を使っている状況を明確に想像できるかどうかを回答させた。さらに、実験参加者の日常の幸福感の指標として人生満足度(Diener et al., 1985)や相互協調的幸福感(Hitokoto & Uchida, 2015)を回答させた。分析の結果、消費の種類にかかわらず、セイバリングの程度が高い場合に他者との会話は促進し、ストレスの低減効果があり、価値観の変化をもたらす、消費行動に対する想像力は高いことが示された。したがって、セイバリングはさまざまな心理的・社会的要因と関与することが確認された。

■日常の幸福感を導くセイバリング

日常の幸福感に対してセイバリングの程度が及ぼす影響を検討した結果、コト消費に関わる商品のセイバリングのみ幸福感と有意な正の関連があることが示された。すなわち、コト消費に関するセイバリングをしやすい人は、日常において幸福感を感じやすいといえる。また、コト消費の明確なイメージが可能である場合や、購入後に他者との会話を促す商品と捉えている場合に、日常の幸福感が高いことも示された。加えて、セイバリングをしやすい人が日常において幸福感を示しやすい

背景に、他者とのつながりの形成・維持や消費に対する明確なイメージ力の影響があることが示された。これらはコト消費に付随する社会的要素に加え、イメージを明確に行えることが、セイバリングと日常の幸福感を結び付ける重要な要因であることを意味する。とりわけ、近年、モノ・コト消費の具体・抽象処理に関する議論がなされているが(Kumar & Gilovich, 2016)、そのような処理の違いがもたらす影響について明確なエビデンスは得られていない。今後の研究では、本研究の知見を拡張し、将来の消費に関わる明確なイメージの個人差だけでなく、実験操作により具体・抽象処理を促進した場合にセイバリングと日常の幸福感の関係が調整されるかどうかを検討する。

引用文献

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2015). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, 16(1), 211-239.
- Kumar, A. & Gilovich, T. (2016). To do or to have, now or later? The preferred consumption profiles of material and experiential purchases. *Journal of Consumer Psychology*, 26(2), 169-178.
- Kumar, A., & Gilovich, T. (2015). Some "thing" to talk about? Differential story utility from experiential and material purchases. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41(10), 1320-1331.
- Kumar, A., Killingsworth, M. A., & Gilovich, T. (2014). Waiting for Merlot: Anticipatory consumption of experiential and material purchases. *Psychological Science*, 25(10), 1924-1931.
- Loewenstein, G. (1987). Anticipation and the valuation of delayed consumption. *The Economic Journal*, 97, 666-684.

ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財回寄付研究部門特定准教授)

■研究の背景・目的

1989年にダライラマ14世がノーベル平和賞を受賞し、1997年にはブラッド・ピット主演のハリウッド映画『セブンイヤーズ・イン・チベット』がヒットしたことなどにより、チベットは世界的注目を集めるようになった。また、ヒマラヤの小国ブータンも、GNH (国民総幸福) という特徴的な政策により近年、世界的注目を集め、2011年の国王来日以降は、わが国でも注目度が高まっている。このように、昨今わが国にとって、チベットやブータンに代表されるヒマラヤ地域は以前と比べて格段に身近な存在となり、各種メディアを通じて大量の情報が流入してきているようになった。しかし、それらの大部分は、ヒマラヤ地域が現代の国際社会においてどのような政治性を持っているか、という点に着目したものに限定されており、同地域の文化的特性、とりわけその精神性についての理解はいまだ十分とはいえないのが現状である。

以上のような背景から、本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域の文化・精神の支柱というべき位置を占める「チベット仏教」と「ボン教」という2大宗教を中心として、同地域の宗教的・伝統的精神の包括的な解明に乗り出すことを決めた。なお、「チベット仏教」は7世紀以後、ブータン、ネパール、シッキム、ラダック、北東インド、中国西部、さらにはモンゴルにまで広汎に伝播し、それぞれの地域で深く土着化が進んで、地域色豊かな独自の展開を遂げている。一方、「ボン教」についてはいまだ謎に包まれている部分が多く、今後の詳細な調査を待たねばならないが、これらの地域の大半に、仏教ほどの浸透度はないものの、ほぼ同様の広がりを見せているのではないかと予想される。したがって、本研究は、これら2大宗教が広大な土地を跨いでどの

ように伝播したか、そして、どのように地域化していったかという問題にも取り組むことによって、広くヒマラヤ文化圏全般における宗教精神の普遍性・共通性と、地域性・個別性の双方を理解することを目指す。

■研究の方法・内容

本プロジェクトでは、①文献研究と②フィールド研究を軸として、「仏教」と「ボン教」というヒマラヤ文化圏の2大宗教を中心として、同地域における宗教的精神のありようを、宗教哲学、歴史学、文化人類学などの視点を通して、多角的・包括的に検証してきた。

「仏教」については、1. 「チベット仏教」、2. 「モンゴル仏教」、3. 「ブータン仏教」、4. 「その他ヒマラヤ地域の仏教」、と区分し、「ボン教」については、1. 「チベットのボン教」、2. 「ブータンのボン教」、3. 「その他ヒマラヤ地域のボン教」、と区分してきた。

このうち、「ブータン仏教」の研究については、別途推進している研究プロジェクト「ブータン仏教の思想、歴史、およびその現状」(科学研究費 若手研究A: 研究代表者 熊谷誠慈)、「ブータンにおけるニンマ派の初期的展開」(科学研究費 若手研究B: 研究代表者 安田章紀)と連動させ、「ボン教」の研究については「ボン教範疇論の研究: 仏教アビダルマ思想との比較を通じて」(科学研究費 挑戦的萌芽研究: 研究代表者 熊谷誠慈)と連動させた。

①文献研究

平成27年度には、ブータンの宗教マジョリティであるドゥク派の開祖ツァンパ・ギャレー(1161-1211)の著作群の写本テキスト校訂、内容解析を進めた。また、チベット四大宗派の1つニンマ派については、ロンチェンパ(1308-1364)やペマリンパ(1450-1521)を中心とした学僧たちの著作群

の文献学的研究を進めた。

また、ボン教典籍 Srid pa'i mdzod phug の精読に基づき、ボン教が仏教の範疇論を参考にして独自の教義を作り上げたことを特定した。特に心や心の作用の分類について、ボン教教義と仏教教義を比較し、その考察結果を英文論文として公表した。また、安田章紀研究員はブータン仏教の二大宗派であるニンマ派の著作群についての研究成果を論文として公表した。

②フィールド研究

ブータンでは、少数宗派(サキャ派・ゲルク派)の歴史と現状を解明するためにフィールドワークを行った。ブータンのサキャ派の歴史と現状についての研究成果は、国際学会にて口頭発表を行った。さらに、国内外のチベット・ヒマラヤ研究者を招へいして京都大学ヒマラヤ宗教研究会を開催し、様々な領域の研究者と学際的な議論、情報交換を行った。

■研究会・ワークショップ

- ・第7回京都大学ヒマラヤ宗教研究会: 2015年5月8日(月) 17:00~18:30
- ・第8回京都大学ヒマラヤ宗教研究会: 2015年6月15日(月) 17:00~18:30
- ・第9回京都大学ヒマラヤ宗教研究会: 2016年1月14日(木) 17:00~19:00

■今後の展望

平成28年度も、これまで同様、古典文献の研究を継続するとともに、現地調査をより意識的に行い、また異分野間の研究連携を進めることで、現代的な視点をより意識的に取り込んでいく予定である。

研究プロジェクト

子どもの発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

■研究の概要

発達障害の子どもへの心理療法によるアプローチが成果をもたらすことは、多く臨床家の実践知として確かなものであり、プレイセラピーが奏功した事例研究も多数報告されてきた。しかしながら、具体的にプレイセラピーがどのような点で有効であり、子どもにどのような変化をもたらすことを期待できるのかについては不明なことも多く、客観的指標を用いた検討まではなされていない。発達障害への社会的関心が高まるとともに、それへの対応が急務となっている現在においては、心理療法の専門家を対象にした事例研究だけでなく、医療・教育関係者など隣接領域の専門家にも認められる客観的・実証的な形で、プレイセラピーの有効性と意義を発信していくことが重要であろう。

こうした背景から、平成22年度より発足した本プロジェクトでは、発達障害の診断を受けた子どもに対して6カ月間のプレイセラピーを行い、子どもにどのような変化が見られるのかを発達検査などの客観的・数量的指標をもとに検討してきた。その成果は既に、学会発表、論文、書籍という形で学術発信の他、講演会やセミナーの形で社会に還元してきている。

また、本プロジェクトは、専門の訓練を受けたセラピストによって心理療法が実施されるため、研究そのものが実践的な発達障害への支援であるところに大きな特色と意義がある。平成27年度には、前年度から継続の10ケースに加え、新規に14ケースの申し込みがあった。1つの事例につき6カ月という時間を要する地道な実践研究であるが、平成28年3月現在で受け入れた子どもの数は延べ42名に上っている。

■平成27年度の研究成果

しかし、他機関で発達障害という診断を受けて訪れる子どものなかには、プレイセラピーや検査の関わりを通じて見ると、発達障害とは見立てられないものも決して少なくない。これは過剰診断が蔓延しているためとも考えられるが、一見発達障害にも見えるような行動や問題を呈する子どもがそれほど多いという事実を示しているとも言える。こうした発達障害の心理療法をめぐる新たな課題を考える上で、当プロジェクトでは「発達障害の診断を受けながらも発達障害とは見立てられない事例」に着目し、そうした事例にはどのような特徴があり、真性の発達障害とはどう異なるのか、そして、そのプレイセラピーにおいて何がポイントになるのかを解明することを試みた。

まず、プレイセラピーの様子、発達検査の結果、保護者面接からの情報をもとにして、発達障害とは見立てられなかった事例が発達障害と診断されるに至ったと考えられる要因を抽出し、そのポイントを元に事例の分類を行った。その結果、①自分を守る方略として一見自閉的な表現を取っている自己主導群、②周囲が子どもの現状を許容するために発達の機会に乏しい摩擦回避群、③他者から見られる意識が過剰なために抑制されてしまっている他者意識群、④周囲の環境との相互作用から問題が生じる心理反応群という4つの群が生成された。そして、この各群に共通した発達障害とは異なる特徴として、自他が当初より分化し、内的な他者イメージが存在しているということが浮かび上がった。

さらに、これまでの研究から、発達障害のプレイセラピーにおいては、自他融合的な状態から融合と分離のテーマを通じて主体が成立していくことがポイントになることを示してきたが、

発達障害とは見立てられない事例においては、どのような点がプレイセラピーのポイントになるのかについても検討を行った。該当する複数の事例のプレイセラピーの展開について詳細な分析を行ったところ、こうした子どものセラピーにおいては、セラピーのなかでリアリティを伴う他者を体験することで、不自然につくられていた一見自閉的なあり方が崩れて内的過程が新たに動き出したり、内面を抱える基盤が形成されたりすることが重要な契機となることが示唆された。

■今後の展開

今後もプレイセラピーの受け入れを継続し、発達障害の子どもに対する心理療法の機会を提供していく（プレイセラピーを希望される方はセンターのウェブサイト「センターからの募集」欄 http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/recruitment/2014/04/play_therapy をご覧いただきたい）。そうした実践を通じてデータの蓄積をはかり、これまでの知見をさらに定量的に裏付けていく。また、6カ月を超えてセラピーを継続した長期事例をもとに、長期的なセラピーが何をもちたらしめるのかも検討したいと考えている。加えて、プレイセラピーが進展するなかで子どもの問題行動が一時的に悪化したり、発達指数が低下するなどの一見ネガティブな出来事が生じることがあるが、そうした事象がもつ意味についても考察を進める予定である。

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

小川詩乃(京都大学大学院人間・環境学研究科特別研究員 PD)+ 吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター教授)

本研究プロジェクトでは、発達障害の子どもを対象に、継続的な学習支援・コミュニケーション支援を実践として行いながら、発達障害の認知的特性を実験的に検討する基礎研究を行っている。また基礎研究の結果から支援内容を見直し、より体系的な支援の構築を目指している。

■研究の目的

本研究プロジェクトには、生活場面で様々な困難を示す子どもたちが参加しているが、参加者の一部には、読みに困難を抱える子どもたちも含まれている。読みに困難を抱える子どもたちは、本人に合わせた方法で継続的な支援を受けることにより、文字を習得することができるようになってくる。そうした子どもたちの一部は、文字や単語は正確に読むことができるようになって、文章になると読み間違いがあったり、逐次読みになったりすることがある。

継続的な支援を行う中で、文字と音の対対応は習得したものの読みの流暢性に課題のある子どもは、「単語のまとまり読み」が困難なのではないかと着想し、以下のような基礎研究を行った(Ogawa et al., 2016)。

「単語のまとまり読み」を検討するにあたり、転置単語に着目した。転置単語とは、単語内の文字が入れ替わっている文字列であり、たとえば“chocolate”の文字を入れ替えた“cholocate”という転置単語は、“chocolate”と認識されやすいことが知られている。

本研究では、「単語のまとまり読み」の困難さを検討するためにストループ課題の手法を取り入れた。ストループ課題では、単語意味とインク色が一致する刺激(赤という言葉が赤インクで書かれている:一致条件)や単語意味とインク色が一致しない刺激(青とい

う言葉が赤インクで書かれている:不一致条件)の色名を答える際、一致条件に比べて不一致条件のほうが回答に時間を要することが知られており、その現象はストループ効果と呼ばれている。もし、単語のまとまり読みが容易にできるのであれば、一般的な色の単語でも、その転置単語でもストループ効果がみられるはずである。

ストループ課題で用いたのは色名を表す4文字の単語で、比較的目的とする頻度が高い「むらさき」「みずいろ」「きみどり」の3単語であった(図1)。刺激は4条件に分かれており、その内訳は、(a) ひらがなの正単語で、単語意味とインク色が一致しているもの(「むらさき」が紫色で書かれているもの)、(b) ひらがなの正単語で、単語意味とインク色が一致していないもの(「むらさき」が水色で書かれているもの)、(c) ひらがなの転置単語で、単語意味とインク色が一致しているもの(「むさらき」が紫色で書かれているもの)、(d) ひらがなの転置単語で、単語意味とインク色が一致していないもの(「むさらき」が黄緑色で書かれているもの)であった。(b)の反応時間が(a)よりも長いと、正しい綴りの単語でストループ効果があると判断でき、(d)の反応時間が(c)よりも長いと、転置単語でストループ効果があると判断できる。

■結果

この課題を、読みに困難のない一般の成人や子どもを対象に行ったところ、正しい綴りの単語でも転置単語でもストループ効果を示した。一方、読みに困難を示す子どもは、正しい綴りの単語ではストループ効果を示したのに対し、転置単語ではストループ効果を示さなかった。これにより、読みに困難がある子どもは、単語の読みが可能であっても、スムーズに単語をまとまり

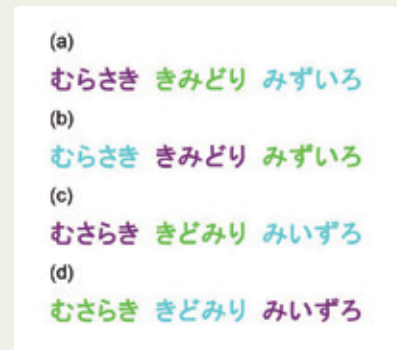


図1 ストループ課題で用いた刺激の例

として認識する力が弱い可能性が明らかになった。こうした子どもには、単語のまとまり読みを促すような支援が必要となると考えられる。

■まとめ

本成果は、子どもたちの読みの支援に継続的に関わることによって着想を得た基礎研究の一例である。今後も支援と研究の融合を目指す本プロジェクトの特徴を活かし、支援のみでは捉えきれない子どもの認知の特徴を実験により明らかにし、その成果を次の支援に活かしていきたいと考えている。

参考文献

Ogawa, S., Shibasaki, M., Isomura, T., & Masataka, N. Orthographic reading deficits in dyslexic Japanese children: Examining the transposed-letter effect in the color-word Stroop paradigm. *Frontiers in Psychology*, 7: 767, 2016.

研究プロジェクト

大人の発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定助教)

■発達障害をめぐる現状

2000年代以降、発達障害が社会問題化し、大人の発達障害へも関心が向けられるようになってきた。周囲から発達障害を疑われたり自ら心配したりして来談する思春期以降の世代の人はまだまだ多いが、臨床現場における実感からすれば、発達障害の中核群といえるような事例はむしろ減少してきているといえる。しかしながら、これは「発達障害と考えられる人は減っている」とシンプルに捉えられることではない。「発達障害とは診断されないが、ごく軽い発達障害様の特徴が認められる」とか、「発達障害との診断を受けているが、定型的なところも多分にみられる」というように、発達障害と定型発達との境界に位置づけられる事例が増えているように思われるのである。

このような現象は、学生相談や思春期臨床に携わる専門家から指摘されている。たとえば高石(2009)は大学生の学生相談の場において「問題解決のハウツーや正解の提供を求める性急な学生」と、「漠然と不調を訴え、何が問題なのかが自覚できていない学生」の2極化が起きており、いずれにしても主体的に悩めないことが共通していると述べている。これらの特徴は発達障害の特徴とも重なっており、症状や状態像の理解という意味でも臨床的対応という意味でも発達障害と定型発達との境界はますます曖昧になってきているといえる。本プロジェクトは、そもそも思春期以降の発達障害への理解と対応を目的とするものであったが、こうした視座のもとに進めた研究が近年では発達障害にとどまらず普遍的に通用するものになりつつある。この意味では、発達障害が照らし出す現代社会のあり方を描き出すという、このプロジェクトのもつもう1つの視点がより正鵠を得るものとなってきたと思われる。

■内実のなさと「リアル」との出会い

これまでも継続的に行ってきた事例検討会では、学生相談の事例が複数検討された。それらに共通する特徴は、主訴が曖昧で友人関係や家族関係などに葛藤がみられず、心理的な課題のポイントが見つけないということである。心理「相談」を訪れるといっても、近年では何らかの主訴や困りごとをもっていることは当然の前提でなくなりつつある。彼らは漠然とした不全感や「やる気が出ない」感じなどについては述べたとしても、そのきっかけや原因になるような出来事も、それらの背景にある気持ちもうまく語る事ができず、またそれを隠している様子でもない。さらには、そもそも自身や人生に対して期待や希望が薄いため現在の状態から抜け出そうという意欲やエネルギーに欠けているようでもある。このような焦点のない状態が一見、発達障害様にもみえ、事例によってはそのような診断を受けていることさえみられた。これらの事例では「自分」が中心として機能していないような状態にあると思われたが、心理療法的プロセスを検討していくと、たとえば好きなアニメや声優など、限定された領域においては関心をもって主体的に行動を起こしたり、身近な関係の中で現実的なトラブルが起こったりすることによって、彼らの「自分」が明瞭な輪郭を持ち始めるのが興味深いところであった。

また、リアルな実感をもつ契機は内実的なものであってもかまわない。40代の女性、Aは皮膚に原因不明の違和感を訴えて来談し、ひたすら症状消失のための現実的アドバイスを求め続けた。Aが描いたバウムテスト(木を1本描いてもらう描画テスト)が図1である。大きな樹冠をもち、それなりに立派にたっている木ではあるが、その内面の空虚さがよく現れているように思われ

る。自ら心理療法を求めて来談したにもかかわらず、内面的な領域に一切関心が向いていないAの様子をよく表しているといえるだろう。



図1 Aが描いたバウムテスト(模写)

その後、セラピストの求めに応じてAは毎回の面接で夢を語るようになる。すると夢の中で「家族が家から出て行く→新たなペアとして異性が出現→遊び人の彼を捨て、現実的で社会的な年上男性との結婚を決める」というイメージの変化が生じてくる。一連の夢にはAがそれまでのあり方を捨て、新たな関係に乗り出していくプロセスが見てとれたが、これに並行して身体的な違和感は消失し、現実でも新たな挑戦にのりだして心理療法は終結することとなった。この事例では、本来は内実的な葛藤として内省され得たかもしれない違和感がまずは身体という内界と外界の境界面に現れ、それが夢という通路を通して再びAの内面に浸透し、現実面での変化につながっていったと考えられる。このように、一見、内面が空虚に思える事例においては、何であれ実感を伴うリアルな対象に出会うことが重要な契機となるようである。現代において「自分」を中心としたこころの構造は必ずしも必要ではないかもしれないが、何もない空間に漠然と浮遊するような状態の中に居続けることは困難である。このような意味で、現代の心理療法は、こころの中に定点を見つけるプロセスに寄り添うことがひとつの大きな仕事になっていくのかもしれない。

文化・歴史的観点からのこころの豊かさ比較研究

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

■研究の背景・目的

近代以降、物質的な豊かさが追及されていく中で、対概念である精神的な豊かさについてもその重要性が認識されるようになってきた。とりわけわが国においては、東日本大震災を経て、科学技術や経済など物質的側面に対する過剰かつ盲目的な信仰への反省から、人々の絆やこころの豊かさについて再び注目が集まるようになってきた。しかし、そもそも「こころが豊かである」とはどのようなことだろうか。特に日本においては文化・歴史的に見て独自のこころ観があると考えられるが、本プロジェクトでは個人、地域、文化、時代ごとに異なる「こころの豊かさ」を、複数の学術領域から多面的・多角的に解明することを目標に、研究を推進してきた。

■研究の方法・研究の内容

1. 臨床心理学

臨床心理学領域では今年度、特に「否定的なもの」とこころの豊かさについて検討を進めた。こころの豊かさといえば、右上がりの発達や成長が典型的にイメージされるが、本プロジェクトでは“マイナスがないものとしての豊かさ”について、心理療法や震災後のこころのケアなどの事例の検討から新たなモデルの提案を行った。図1に示したように、このモデルにおいてはマイナスから見ることによってゼロの地点が豊かなものとして体験されるという見方が基礎になっている。まず、緑色の矢印で示されるのは人間のこころの自然なレジリエンスを示している。震災後のこころのケアの活動の中で、震災から3カ月経過すると、多くの子どもの自由画が構造を取り戻し、大人が震災の経験を語ったり夢にみたりするようになったように、無やマイナスの状態からの回復のプロセスでは「普通」「通常」の状態が豊かに体験され



図1 心理療法の経験からみた豊かさの新たなモデル

る。これは前近代において神の世界と人間の世界が循環して毎年豊かさがもたらされていたのと同型のモデルといえる。次に、水色の矢印で示されるのは、震災をきっかけに相談に訪れたが、震災とは関係のない個人の問題に取り組むような場合である。これは外的な災害によって受けた問題をさらに深めているとも言えるが、深められた問題の解決は元の状態からの〈復元〉以上の変化をもたらすことがある。最後に、黄色の矢印で示されるのは個人や世代を超えた課題の解決につながる、より普遍的なレベルの豊かさである。これについては紙幅の都合によりここでは割愛するが、大澤真幸編『岩波講座現代6 宗教とこころの新時代』（岩波書店、2016年）所収の河合の論考でも議論されている。

2. 思想・歴史文献学

「こころの豊かさ」研究の予備的研究として、「こころ」という概念の成立した場所と時代について、歴史的観点から調査を進めた。

研究地域を南アジアから東北アジア、東アジアに限定し、①インド語圏、②チベット語圏、③中国語圏、④日本語圏という4つの言語圏に着目し、各言語圏における「こころ」という概念の発生・展開（時間軸）について検証した。結果、①インド語圏では、紀元前13世紀頃の編纂とされる『リグヴェーダ』の中に「こころ」という概念が登

場しており、②中国文化圏では、紀元前14～13世紀頃に「心臓」という概念は存在したものの、精神的な「こころ」という概念の起源は紀元前の10世紀頃であったことが確認できた。チベット文化圏に仏教が定着した8世紀、日本では『万葉集』が編纂されたが、同書に「こころ」の多様な用法が存在していたことを確認した。

「こころ」の概念は、言語圏ごとに独自の展開を遂げていく（時間軸）一方で、言語圏を超えて共有される（空間軸）普遍的な「こころ」も存在していたことを確認した。奈良時代の日本で栄えた、俱舎宗、法相宗、三論宗、成実宗などの哲学は、同時代のインド、チベット、中国、朝鮮にも存在しており、これら4宗派の掲げる「こころ」および「こころの働き」の概念が、広く共有されていたことが分かった。

このように、言語文化圏ごとに異なる特殊な「こころ」の概念と、言語文化圏を超えて共有される普遍的な「こころ」の概念の両方が存在してきたことを、ほぼ特定することができた。

■今後の展望

今後も、臨床心理学および思想・歴史文献学的視点から「こころの豊かさ」研究を推進していくとともに、さらに他分野の研究者との連携も進め、より多角的な視点を取り込んでいく。「こころの豊かさ」が何かということが明瞭になっていけば、「こころの豊かさ」を実現するための取り組みについても、より効果的に推進していくことが可能となるであろう。また、「こころの豊かさ」という概念を起点として、地域・世代を超えて共有されている価値観の共通性、ならびに地域・世代毎に異なる価値観の特殊性の両面を理解することで、異文化・異世代理解にも繋がっていくことが期待される。

研究プロジェクト

組織文化とこころのあり方——日本における企業調査

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター准教授)

■プロジェクトの目的

仕事を持つ人々にとって、家庭生活にならび日々の幸福感や生きがいに直接寄与するのが職場での状況である。職場のメンタルヘルスについて、抑うつ感あるいは休職を余儀なくされるような状態、さらには若者の労働意欲の低下などが指摘される中、日本の組織や企業で働く人々の幸福感やメンタルヘルスの現状を分析し、それぞれの組織風土・文化との関わりを検討することは非常に重要なテーマの1つである。そこで本研究では日本文化における幸福感と社会関係の基盤を解明することを目的とした。グローバル社会のもとで日本の組織制度・文化が変容する中、その中で働き生活をする「人」、人々が織りなす「つながり」、そしてそれらを取り巻く「組織の制度・文化」がどのようにに連関し幸福感を生み出しあるいは低下させているのか検討を行った。

■「人が育つ組織」研究会

京都経済同友会の後援のもと、NPO法人ミラックならびに株式会社ウエダ本社と共催して、平成26年度より引き続いて7回にわたる研究会を実施した。研究会では、1) 日本の企業・組織の現状と方向性のモデルの生成、2) 2つの質問紙調査の結果の検討・議論、3) 検討結果の準公開ワークショップでの発表を行った。

企業の様々な事例を検討した結果から、企業風土に関して図1に提示する2次元モデルを作成した。この図の中では、人が育つ企業風土について「従業員個人の自立性」の高低の軸と、職場の信頼関係である「社会関係資本 (social capital; SC)」の高低の軸が重要なのではないかという仮説を立てている (図1)。そして近年の企業モデルにおいては、個人の主体的意思決定を促進すると同時に、職場の信頼関係で

あるSCを高く保つことを目標とすることを確認した。一方、伝統的な日本企業においてはSCは高いものの、自立性が低く村的コミュニティとなりがちであり、創造性に乏しくなる傾向にある。逆に、グローバル化の要請に応じて個人の自立性を高めようとするれば、つながりを切り離すこととなり、SCが低まる結果として、個人主義・「個人商店」化が起りがちとなると考えられた。このモデルを検証するために、2つの調査を行った。

■調査1:企業従業員一般を対象にした縦断的ウェブ調査

第1回ウェブ調査は450名の正規雇用の従業員を対象とし、平成26年12月に行った。第2回調査は第1回に参加した者のうち150名を対象とし、平成27年11月に行った。このうち、いずれかの回で経営者である者、第2回調査で企業に雇用されていなかった者を除く121名を分析対象とした。主要な結果として、自立性 (項目例:「何か「できない」ことがあったとしても、私は道を切り開く」) と職場のSC (項目例:「職場の人は信頼できると思う」) の関係は、1) 第1回調査でSCが高ければ、その後第2回調査で自立性が高まる傾向にあり、2) 第1回調査で自立性とSCが両方高かった個人はその後自立性・SCともに高くなるが、3) 逆にSCと自立性が両立していなかった個人はその後自立性もSCも低まる傾向にあることが示唆された。つまり、職場で信頼関係を築けている個人は、それを基盤として自立的に働けるようになり、自立性・SCともに高め合うようになると考えられる。また、自立性・SCはともに高め合うことが可能であることを示唆する。しかし、一方で自立性・SC

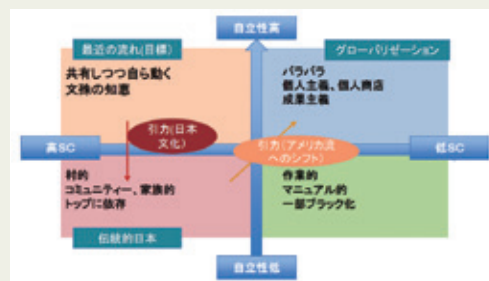


図1 日本の企業・組織の現状と方向性のモデル

が共に高い個人自体は多くないことも示された (たとえば共に平均以上であったのは全体の約29%であった)。

■調査2:個別企業・組織を対象にした調査

組織風土の分析のためには、様々な企業・組織単位での調査参加が必要である。そこで地域の経済同友会などの協力を仰ぎ、組織・企業ごとに参加を募り調査を行った。この調査では、1) 個別企業・組織の代表者 (社長等) へのインタビューによる質的調査、2) 調査1と同様の項目を用いた従業員 (原則として正社員の全員) を対象とする質問紙調査、3) 調査結果の企業・組織への報告書・面談によるフィードバックを行っている。これにより、学術調査としての目的を達するのみならず、そこで得られた知見を直接的に社会に還元し、またその過程で新たな問題意識を見出すという、学術界と社会との互恵的な関係を目指している。調査は50社からの参加を目標としているが、現在、約20社の調査が進行中または完了している。予備的結果として、多くの組織の従業員においては幸福感は会社への愛着と関連しており、また、会社への愛着を支える要因は企業によって異なっており、ユニークさがあることが見だされている。今後、調査参加企業数を増やし、より信頼できる結果を示して行く予定である。

孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究

—京町家「くらしの学び庵」プロジェクト

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財回寄付研究部門特定助教)

■研究背景・目的

本研究のパイロットスタディ（平成25年度、平成26年度の調査）結果から、延命治療の有無、療養先の検討を迫られ、意思表示や自己決定が難しくなるような疾患（認知症、脳血管系疾患、ガンや非ガン末期など）に罹患する前から、年老いていくわが身の備えとして、「どこで、どのように生きぬくのか」を考える仕組みづくりが必要であるとの結論が導き出された。また、「どこで、どのように生きていくのか」を考えないといけない前段階の状況（フレイル、要介護状態）から、地域住民の互助・共助で支えあう意識の醸成や、互助・共助のリーダーシップを図れる人材育成の必要性も考えられた。これらのパイロットスタディーの結論を受け、京都市内にて試験的に多世代型学習方式による、自らの「生」「くらし」のあり方を主体的に考える動機づけプログラム（1クール：2回/月実施、3カ月で完結。計6講義実施。定員20名；通称「くらしの学び庵」）を平成26年度より試行開始した。平成27年度は引き続き、「くらしの学び庵」を2クール（①平成27年5月16日～平成27年7月22日、②平成28年1月16日～平成28年3月26日：各回ともに2回/月実施、3カ月で完結。定員20名）を継続し、自らの「生」「くらし」のあり方を主体的に考える動機づけプログラムの効果検証を研究目的とした。

■研究方法

研究対象は、医療・心理・貯蓄・介護領域で構成される試行的プログラム2クール（1クール〔2回/月、3カ月：6講義開講〕を2回開講：1クールあたりの定員20名）に参加した34名であった。34名は、京都大学こころの未来研究センターホームページ、一般新聞にて公募を行い、先着申し込み順で

表1 試行的プログラムの概要

初級コース	講義領域とテーマ 講義：14:00-15:00 意見交換会：15:00-15:30	担当講師	よろず相談 15:30-16:30
1講義	毎日できる運動で衰え知らず！ 【医学：介護予防運動】	京都大学大学院医学研究科 青山朋樹	
2講義	健やかなところで暮らす知恵 【心理学：対人関係、心の安寧】	京都大学 こころの未来研究センター 吉川左紀子	○
3講義	老化と病気の予防で錆び知らず！ 【医学：老化と病気の予防】	国立長寿医療研究センター 荒井秀典	
4講義	毎日できる栄養管理で病気を知らず！ 【栄養学：栄養管理と疾患】	京都大学医学部付属病院 幣 憲一郎	○
5講義	老後の備えて？ —アリとキリギリス物語— 【法律：貯蓄と成年後見制度】	京都信用金庫業務部業務課 高岸達哉	
6講義	介護って何？ 【福祉：介護と地域福祉】	京都大学 こころの未来研究センター 上廣こころ学研部門/清家 理	○

*現在は、上廣寄付研究部門に名称変更

参加を決定した。参加基準は、生活や健康について主体的に学びたい京都市民とした。

1クールあたりの試行的プログラムは医学領域（運動・栄養・老年内科）、心理領域、生活領域（貯蓄、介護）の6コンテンツで構成された（表1）。データは、1クールの開始および終了時の自記式アンケートで収集し、主なデータは、基本属性（年齢、疾患有無、家族構成）、ソーシャルネットワーク（尺度）、ヘルスリテラシー（尺度）、講義コンテンツ毎の学習意欲（5件法）、学習活用意向度（5件法）、他者への伝達意向度（5件法）とした。

■結果と考察

平成26年度から平成27年度の通算4期開講で121名の参加があり、そのうち、プログラム6講義の半分以上に出席した者を「修了者」としているが、通算修了者は90名（74.4%）であった。また、修了者の属性は90名の平均年齢69.8±4.5歳、継続的治療を有する者54名（60.0%）、地域活動実施者76名（84.4%）であった。

その結果、3カ月の学びを通じ、ヘルスリテラシーの自発的行動のうち、「集めた情報が正しいか自己確認」の得点が1.9±0.9→2.0±2.3、「得た知識をもとに生活の変化を図る」の得点が2.9±0.8→3.4±1.2にいずれも上昇してい

表2 よろず相談の件数

よろず相談実績 のべ件数135件(1期・2期・3期・4期合算)	
領域	相談カテゴリー
医療 n=36	延命治療の内容(9)、病院の選び方(7)、慢性痛予防(3)、認知症予防(2)、認知症治療方法と進行予防(2)、訪問診療の内容と費用(2)、腎臓対応病院(4)、主治医とのつきあい方(2)、受診の仕方(1)、リハビリ方法(3)、受診拒否者への対応方法(1)
看護・栄養 n=12	咀嚼機能と食事内容(2)、病気をたべあわせ(4)、体に影響がある食べ物(2)、ダイエット方法、疾患による食事形態の変更方法、術後栄養管理方法、サプリメントの選び方(各1=4)
福祉 n=33	福祉制度の内容(8)、施設介護の費用(5)、認知症の対応方法(5)、介護方法(4)、施設介護内容(3)、エンディングノートの必要性(3)、遺言の書き方(2)、在宅介護の費用、在宅医療支援の費用、介護用品購入方法(各1=3)、介護負担軽減法、デイサービス利用と、生涯学習活動の資金獲得方法(各1)
心理 n=19	人づきあいの悩み(9)、生きる気力やモチベーション維持方法(4)、抑うつなど不安への対応(3)、人づきあいの方法(2)、よくわからない自己感情との向き合い方(1)
法律・貯蓄 n=24	相続(16)、隣の家との境界問題(4)、後見人(3)、空き家対応の問題(1)

た。一方で、自由記載では、「どのような終活があるのか、調べてみたい」、「積極的な治療をどうしようか悩んでいた友人に、何を考えたらいいか、何を専門家に相談したらいいか、教えてあげよう」などの行動変容が見られた。

また偶数回講義後に実施している、医療・看護/栄養・介護・心理・法律領域のワンストップサービス「よろず相談」の相談内容の結果（のべ件数135件）を示したものが（表2）である。5領域のうち、最も相談件数が多かったのは、医療と福祉領域であった。そのうち、赤色で示した項目は、すべて治療や介護における支援活用方法に関するものであった。また、最近、メディアでも多く取り上げられるようになった、「終末期の備え」に関する相談項目も多くを占めていた。参加者の主観的効果（質的データ）では、学習効果に対する満足について記載した者が60.0%を超えた。また、コミュニティ活動への活用、「支援する」人材になるための学習開始など、アドバンス的な取り組みへの意欲について記載した者が20.0%を占めた。

以上により、本プログラムの試行が、自発的に自らの「生」について考え、行動すること、共助につながる動機づけになったと言える。

研究プロジェクト

認知症をもつ人および家族のQOL向上のための施策のあり方研究

——認知症初期集中支援チーム介入分析からの考察

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定助教)

■研究と目的

平成25年度から、「認知症の早期診断・早期対応」のモデル事業として、「認知症初期集中支援チーム設置促進モデル事業」が全国14市町村で実施され、本報告の調査フィールド「宇部市」は、その1つである。本事業が開始されるまでは、地域生活上に関する相談支援の多くは、地域包括支援センターで担われ、その中には、認知症に関する相談も多く含まれていた（宇部市報告）。今回、新たに設定された初期集中支援チーム（以下、初期集中S）が既存の地域支援システムの中でうまく機能するためには、地域事情に合致した初期集中Sの展開が求められる（図1）。そこで、本研究では、宇部市で実施された初期集中Sの支援実態と介入効果を検証した。

■研究方法

本研究は、宇部市認知症初期集中支援チーム員が属する宇部市役所健康福祉部高齢者総合支援課との共同研究である。研究対象は、平成25年度（モデル事業初年度）に初期集中Sが介入した51事例である。データ収集は、初期集中Sのケース記録から、認知症をもつ人（疑い含む）や家族の属性、介入契機、相談介入までの期間、相談支援機関、支援課題、介入による効果を中心に、数量的・質的データを抽出した。

■研究結果

本研究対象51事例の認知症をもつ人もしくは疑いの人の属性について、年齢は75歳以上～85歳未満60.8%、性別は女性58.8%、夫婦世帯49.0%が最も多くを占めた。また、介入時から介入後の認知症に関する変化について（介入時→介入後）、診断が無かった事例割合：41.2%→29.4%、DASC：49.4±13.0→50.8±12.2、DBD：21.4±



図1 地域事情に合致した初期集中支援チームの展開

9.6→22.8±10.5、J-ZBI：14.0±7.3→12.2±8.1であった。把握ルート別（当事者〔認知症をもつ人、家族〕、医療機関〔かかりつけ医等〕、地域の他機関、地域包括支援センター）の発症（症状出現察知も含む）から相談介入までの期間について、地域包括支援センターからの事例で3年以上経過しているものが50.0%を占めた。また、把握ルート別の初期集中S介入後の支援課題では、当事者では、「認知症をもつ人の介入拒否」56.7%、医療機関や地域の他機関では、「キーパーソンの不在」66.6%、75.0%を占めたが、地域包括支援センターでは、「医療連携の課題」50.0%が最も高い割合を占めた。

一方、初期集中S介入後の支援対象者の変化を「生活・暮らし」の語りの変化から分析を実施した。「困っている、不安、何もしたくない、どうしたらいいかわからない」の言語表出を否定的反応、「ほっとした、落ち着いてよかった、元気になった、ありがとう、うれしい」の言語表出を肯定的反応とし、総表出言語数に対するそれぞれの反応言語表出の割合について、認知症をもつ人および家族別に、介入時、介入後比較を実施した。その結果、認知症をもつ人では、否定的反応（介入時→介入後）：64.4%→26.3%、家族では、否定的反応（介入時→介入後）：27.1%→69.3%であった。

■考察

把握ルート別の相談介入までの期間は、地域包括支援センターからの相談事例において、長い時間経過が見られ、かつ、介入後の支援課題において、医療連携の課題が多くを占めていた。つまり、専門医への受診支援がスムーズに行えず、総支援期間も長期化する傾向がうかがえた。また、初期集中Sの介入により、認知症をもつ人およびその家族の「生活・暮らし」に関する語りの内容に肯定的な反応の増加が見られていた点に、初期集中Sの介入意義が見出された。

■結論と今後の課題

今後の課題は、当事者、専門職を含め、スムーズな連携を図る上での「共学・協働」体制の整備である。初期集中Sが介入すれば効果が見られるにしても、「初期介入」でなければ、当事者の生活課題は増大するばかりである。また各地域の専門機関が長い間、支援介入後、停滞している事例も見られ、初期集中Sの本来の設定目的から大きく外れて介入している事例も多くみられた。つまり、認知症および周辺領域に関する医学的知識および家族を含めたアセスメントについての知識を共学で深めていくことが課題である。

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター教授)+ 内田由紀子(同准教授)

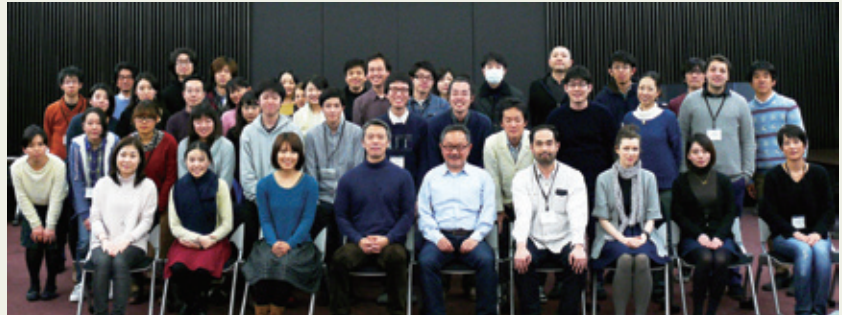
■こころの科学集中レクチャー

2016年2月29日から3月2日までの3日間、2015年度こころの科学集中レクチャー「こころの謎～脳科学からの挑戦～」が稲盛財団記念館大会議室で開催された。年度末の恒例となっている本レクチャーは、ミシガン大学教授でセンター特任教授でもある北山忍先生がその年の講義テーマを設定し、3日間にわたり北山先生を含む3名の講師が講義とディスカッションをおこなうユニークな教育企画である。研究者同士の最先端のディスカッションや、そこから生じるアイデアの創発は、参加者にとってもエキサイティングな時間で、毎年聴講する熱心な受講生も多い。各日とも、講義後のディスカッションの進行は内田由紀子准教授により行われた。

■講義の概要

2015年度のレクチャーでは、初日に北山忍先生が、「進化・文化・こころ：生きる意味の心理生物学に向けて」と題して、文化心理学における「文化」の意味とその学習プロセスについて、強化学習、遺伝子多型とその社会的意味の観点から話題提供を行った。講義では、文化の学習を通して獲得される「生きる意味」や「善の概念」について、遺伝子発現という生物学的なメカニズムとの関係から最新の文化神経科学的知見を交えて紹介された。

2日目の杉浦元亮先生(現在、東北大学加齢医学研究所/災害科学国際研究所教授)のレクチャーでは、「脳科学的自己3層モデル：その基礎と加齢・災害科学への応用」と題して、「自己」の概念を、脳機能から3層構造(身体的自己・対人関係的自己・自己の社会的価値)で捉える枠組みが提示され、各レベルにおいて順予測による随伴性の学習があると仮定する枠組みが脳画



集中レクチャーの講師と受講生

像研究の知見に基づいて論じられた。さらに、加齢とともに変化する脳・身体機能に対する人の適応的認知や、災害時のレジリエンスを支えるパーソナリティについても紹介された。

3日目の渡邊克巳先生(早稲田大学理工学術院教授)のレクチャー「身体・こころ・社会」では、人間の社会性を調べる上で、最小限の社会性が生じる実験室での認知活動を測定する「ミニマリスト」と、実社会に近い状況での活動を測定する「インクルーシブ」という2つのアプローチがあることが紹介された。また、2者で共同課題を行う際に、社会的抑制や促進が、相手との相互作用によって無意識的に生じていることや、動きや声などの身体情報のフィードバック効果に関する知見から、自己の行動に対する後付け的な認知が生じるプロセスが紹介された。

3日間の講義では、「こころ」を生み出す脳機能や生理的機能の特性、認知行動特性からその社会文化的意味の問題にいたるまで、幅広い内容が取り上げられた。毎回講演の後には、3名の講師の間で受講生を交えた活発なディスカッションがおこなわれた。

■受講生の感想から

授業の後の受講生の感想の中から、いくつかを紹介する。「このセミナーを受講すると知的に刺激され、自分の研究と講義で聞いた知見はどうすれば結

びつけられるか考えるのが非常に楽しく、モチベーションが上がる。3名の先生のお話は統一的なテーマはありつつもアプローチが異なるので、大変有益な知見が得られる(大学院生)」「知的好奇心を大いに刺激された。人文系の主題と神経科学的な検討とのつながりが、挑戦的なアイデアを含みつつも歩み寄って解説されていたのが印象的だった。楽しそうに議論されている先生がたの姿が学生にとっては貴重な刺激だった(大学院生)」「様々な分野の第一線のお話が聴けて本当に面白かった。さまざまなアプローチがありながら“こころ”として共通に語れる部分が多く、先生がたのディスカッションでさらに理解が深まったり新たな発見につながったりするのが興味深かった(大学院生)」「専門的なディスカッションを聴く機会が今までになく、初めてだったので、議論には終始圧倒されました。内容は難しかったですが、とても面白く、興味深いと感じました(学部生)」。

研究プロジェクト

連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開

阿部修士（京都大学こころの未来研究センター特定准教授）

■本プロジェクトの概要

平成24年3月のMRI装置の設置以降、こころの未来研究センター連携MRI研究施設の実験設備は、複数の部局の研究者によって幅広く利用されている。こうした最先端の研究設備を最大限利用するには、若い研究者が積極的に設備を利用できる環境・機会を提供することが必要である。

本研究プロジェクトでは、学部学生・大学院生・研究員を主なターゲットとして、認知神経科学の教育事業を実施する。こうした教育事業を継続的に実施することで、MRI装置利用のための環境を充実させ、若手研究者の積極的な研究への参加を促進できると考えられる。

■教育事業の概要

平成27年度は、(1) fMRI体験セミナー、(2) fMRI解析セミナー、(3) 脳科学集中レクチャーを実施した。以下に、それぞれの事業の概要を記載する。

(1) fMRI体験セミナー

2015年9月1日・2日の2日間、fMRI (functional magnetic resonance imaging) 体験セミナー2015をこころの未来研究センター連携MRI研究施設にて開催した。本セミナーは、これまでMRIを用いた研究経験のない若手研究者をターゲットに、fMRIを体験する機会を提供するために企画された。今年度は主に学内の大学院生・学部生・研究員を対象に、まず脳機能画像研究についての簡易的なレクチャーを実施した。その後、MRIを用いた実験を体験してもらい、自分の脳のデータ解析を行った。今後fMRI研究を行う若い研究者にとっては、実際のMRI研究を体験することで、スムーズに自身の研究に取り組める機会を提供できたと考えている。



左からfMRI体験セミナー、fMRI解析セミナー、脳科学集中レクチャーのチラシ

(2) fMRI解析セミナー

2015年12月3日・4日の2日間、fMRI解析セミナー「脳領域間結合解析基礎編+SPM豆知識」を稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師には、河内山隆紀先生（株式会社ATR-Promotions、脳活動イメージングセンタ）をお迎えし、領域間結合に関する画像解析のスキル獲得を目的とした講義および実習を行った。講義では解析法の背景にある理論についての理解を深め、実習では参加者それぞれが持参したPCを用いて、自ら手を動かしながら実際のデータを解析した。画像解析ソフトウェアSPMの応用的利用方法についての講義・実習も行われ、参加者にとっては画像解析の手法に習熟するための貴重なセミナーになったと考えられる。

(3) 脳科学集中レクチャー

2015年12月24日・25日の2日間、こころの未来脳科学集中レクチャー2015「こころを創る脳と身体」を、稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師に大平英樹先生（名古屋大学大学院環境学研究科教授）をお迎えし、認知神経科学、生理心理学の観点から、人間の行動を解明するための研究についての講義をお願いした。2日間にわたる集中講義では、主に身体性を重視する立場から、脳と自律神経系・内分泌

系・免疫系がどのように相互作用して、感情や意思決定に影響を与えるのかを、わかりやすく講義していただいた。ご本人の研究を超えた様々な興味・関心にも話が及び、受講者にとっては刺激的な2日間になったと考えられる。

■今後の展望

こころの未来研究センターに設置されたMRI装置は、文系・理系の研究者が学問分野の垣根を超えて「こころ」に関する研究を行う環境を提供している。学際融合的な研究を推進する上では、研究成果の発信のみならず、教育における有効利用も極めて重要である。来年度以降も、本年度に実施した研究事業を継続的に実施することで、認知神経科学に関わる若手研究者に、最先端の知識および技術獲得の機会を提供したいと考えている。

国民総幸福(GNH)を支える倫理観・宗教観研究

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定准教授)

■研究の背景・目的

GNH (国民総幸福) という概念は、1970年代に、ジクミシング・ワンチュク第4代ブータン国王により提唱され、ブータンの国策の軸に据えられた。以後、GNHはブータンの代名詞となり、各国の幸福政策のモデルの1つとなっている。世界的な注目が高まる中、2012年には国連において「世界幸福デー (International Day of Happiness, 3月20日)」が制定されるに至った。

第二次大戦終結後、ブータン研究を担ったのは主に歴史学や人類学であったが、1990年代の「王立ブータン研究所」(Centre for Bhutan Studies) 設立以降、国際GNH学会の開催などによってGNH研究は一気に加速し、現在まで経済学者や心理学者、開発学者などが中心的な役割を果たしてきている。

ただ、ここで忘れてはならないのはブータンが仏教国だということである。国民総幸福を含む同国の先進的政策が、あくまでその基盤を同国に深く根付いた独自の宗教的倫理観の上に置いている事実は看過されがちである。この点を無視して、ブータンの本当の理解には到達し得ない。そこで本研究では、国民総幸福という広く知られた概念の根底に存在する倫理観および宗教観の仕組みについて、広くチベット・ヒマラヤ文化圏全体を視野に収めつつ、多角的に検証する。

■研究の方法・研究内容

2015年度は、以下の3つの柱に沿って研究を進めてきた。

1. 文献研究

文献学的手法に基づいて古文書を解析することで、ブータン仏教の思想や幸福観、倫理観の解明を進めた。特に、ブータンの国教的な位置づけにあるドゥク派の開祖ツァンパ・ギャレー (1161-1211) の著作群の写本校訂テキストな

らびに試訳の作成を進めてきた。同著作群はブータンの国家的アイデンティティの基底をなすものでありながら、文献へのアクセスが困難であったために、これまで研究がなされてこなかったことから、その内容解明は今後のブータン精神史研究に大きく寄与することとなる。

2. フィールド研究

本プロジェクトでは、ブータン仏教の多数派 (ドゥク派・ニンマ派) よりも、少数派 (サキャ派・ゲルク派) に焦点を当てて現地調査を進めてきた。理由としては、少数派の伝統は途絶えつつあるため、情報の回収を急ぐ必要があるからである。2015年度にはサキャ派の全寺院の調査結果を整理し、研究成果として第4回国際若手チベット学会にて口頭発表した。ゲルク派についても東ブータンにおける状況を現地調査し、隣接するインド共和国アルナチャル・プラデーシュ州のゲルク派の状況と比較検証を行った。今後は、両宗派の歴史、現状、課題について、隣国の事情とも比較しながら考察を進めていく予定である。

3. 学際的研究

今年度は京都大学ブータン研究会等を通じて異分野のブータン研究者間で情報交換・共同研究を進めた。また、ブータンの文化、社会などにおける仏教の影響について調査を進めた。「仏教倫理・哲学と幸福との関係性」について、TED x Kyoto Universityならびに第6回国際GNH学会において口頭発表を行った。

■研究会・講演会・シンポジウム

1. ブータン文化講座

・第6回「輪廻のコスモロジーとブータンの新しい世代」西平直 (京都大学大学院教育学研究科教授)、2015年12月4日。

・第7回「ブータンの仏教徒祭り ニマルン寺 (中央ブータン) のツェチュ祭」今枝由郎 (元フランス国立科学研究センター・研究ディレクター)、2016年3月28日。

2. 京都大学ブータン研究会

・第12回 発表①「学生という立場から見たブータン訪問」谷悠一郎 (京都大学農学研究所修士課程2回生)、発表②「サムテガンBHUにおける滞在報告」岸晃生氏 (京都大学医学部2回生)、2015年4月1日。

・第13回 「ブータン西部における「農」：その変貌と有機農業政策について」小林舞 (地球環境学舎・博士後期課程)、2015年7月16日。

・第14回 国際交流科目でのブータン訪問者報告会。2014年度訪問者および2015年度訪問者による報告、2015年1月20日。

・第15回 「ブータンでの半年と失業・過疎問題」酒井肇氏 (総合人間学部・4回生)、2015年12月18日。

・第16回 “Middle-Path Journalism: a conceptual framework towards a GNH Medial Model” Dorji Wangchuk (Dean, Royal Thimphu College, Bhutan), 2016年1月26日。

■今後の展望

今後は、「ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義」(連携研究プロジェクト) や「ブータン仏教の思想、歴史、およびその現状」(科学研究費 若手研究A 研究代表者 熊谷誠慈) などの研究プロジェクトとも連携し、より多角的な視点からブータン、ヒマラヤ地域の倫理観および宗教観を検証し、GNHの概念を捉えなおす予定である。また、京都大学ブータン研究会では、研究者のみならず学生の発表も歓迎することにし、若手研究者の育成にも力を注いでいく予定である。

研究プロジェクト

倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定助教)

■研究背景・目的

様々な支援介入効果の測定には、J-ZBIが用いられてきた。ZBIは、介護者の主観的介護負担を2点のストレイン（ロールストレイン、パーソナルストレイン）から定量化する指標であるが、トータルスコアの算出だけでは、介護者への介入ポイントが見えない。また、さらに研究が進み、カットオフ値が定められたとしても、介護者の倫理的課題を含め、介護にまつわる外的・内的環境課題の複雑さに応えうるとは言い難い。しかし、前述した既存尺度の未充足部分について、明確なエビデンスが示せていなかった。

そのため、本年度の研究では、認知症家族介護者Well-being scale開発を実施するエビデンスの明確化を目的に、厳しいデザインでの介入研究を実施した。介護者のストレス変化を見るための介入として、包括的教育支援プログラムを設定し、介護者の対処戦略負担感の相関(Pratt,C, 1985)、家族介護者ストレスモデル(Patton,1990)に基づき、「介護者への包括的教育支援により、対処戦略(Coping)や肯定的介護評価を獲得することで、介護者のストレス(抑うつ・バーンアウト)が軽減する」という仮説を設定した。その上で、包括的教育支援プログラムの効果検証をRandomized Crossover Trial(RCT)で実施し、倫理的側面も考慮しながら、前述した既存尺度の未充足のエビデンスを示すこととした。

■研究方法

研究対象60事例を介入群：包括的教育プログラム(家族教室基礎コース)参加30例(1回あたり15例で2回実施)、対照群：認知症の治療とケアに関する情報冊子による自習実施30例(1回あたり15例で2回実施)に割り付けた。3カ月で両群の入れ替えを行った。

データ収集方法は、介入開始時および介入開始3カ月後、そして同じ形式で、両群入れ替え後に自記式アンケート調査で行った。評価項目は、①要介護者の状況：A.認知症の状態(MMSE)、B.認知症の周辺症状の状態(DBDスケール)、C.身体機能状態(Barthel-Index等)、②介護者の状況：A.介護実態(介護年数、性別、就労有無等)、B.認知的介護評価(尺度)、C.介護者の対処方略(尺度)、D.介護負担感(日本語版Zarit-Burden-Interview)、E.精神状態(CES-D、BM-J)とした。同時に、電子カルテに所蔵されている、本研究参加直近の検査結果(包括的アセスメント評価〔通称：CGAデータ〕)から要介護者の属性データを抽出した。

■研究結果・考察

本研究の結果、プログラム参加前後3カ月間の変化で、介入プログラム群で変化量がポジティブな変化をしたものは、介護対処(F-2：介護役割受容、F-3：気分転換、F-4：フォーマルサポートの活用)、認知的介護評価(C-1：介護充足感、C-3：介護による自己成長感、C-6：社会的関係性の負担感)、抑うつ(CES-D)、バーンアウト(BM-J)であった。このうち、F-3(P=0.043)、F-4(P=0.045)、C-1(P=0.047)、CES-D(0.004)、BM-J(0.005)で有意差が確認された。DBD、J-ZBIは有意差なく増加していた。

本研究で用いた包括的教育支援プログラムの特性は、認知症の病態に関する知識よりも、BPSDへの対応方法、認知症当事者の思いを聴く方法などケア方法、介護者の内的・外的状況を把握し対処方法を検討する自己覚知方法など、より介護実践に資するコンテンツで構成されていた点であった。また、講義方法も座学だけではなく、グループワークやグループディスカッション

を多用し、相互交流を図ったことも特徴的な点である。進行過程にある認知症をもつ人の家族介護者に本プログラムをインプットした結果、DBDスコアの変動は両群で確認されなかったものの、ZBIは両群で上昇していた点から、要介護者の病態が悪化してなくても、主観的介護負担感は増加していると解釈できる。しかし、ストレスである、主観的介護負担感が増加しても、ポジティブな変化を見せたものがあった。包括的教育支援プログラム参加群の3カ月変化量につき、「抑うつ」、「バーンアウト」スコアが有意に減少、一方で、介護コーピング：「気分転換を図る」、「公的支援の活用」スコア、介護評価：「介護充足感の獲得」スコアが有意に上昇した点である。つまり、個の変化は、ストレス反応媒介要因に該当する「介護コーピング」や「肯定的介護評価」の上昇が、ストレス緩衝になり、最終的に介護ストレスを低減させると考えられた。

以上により、レクチャーと相互交流で提供される、包括的教育支援プログラムが、介護者の介護コーピングや肯定的介護評価を上昇させること、介護ストレスを低減させることが実証された。これらの結果を踏まえ、介護における外的・内的環境課題を的確に測定するものとして、介護者の転帰調査結果から試作化した尺度(構成要素5領域、下位項目82)が、今回効果が実証された「介護コーピング」や「肯定的介護評価内容」を含むため、試作化尺度の内的妥当性検証研究の進行に支障がないことも同時に示されたと言える。以上により、2016年度は、介護者の内的・外的環境や対処を基軸にした、新尺度開発を進めていく。

吉川左紀子

論文

布井雅人, 吉川左紀子 (2016) 「表情の快・不快情報が選好判断に及ぼす影響——絶対数と割合の効果」『心理学研究』87 (4), 364-373.

Nunoi, M. & Yoshikawa, S. (2016) "Deep processing makes stimuli more preferable over long durations." *Journal of Cognitive Psychology*, 28(6), 756-763.

Ueda, Y. & Yoshikawa, S. (2017) "Beyond Personality Traits: Which facial expression imply dominance in two-person interaction scenes?" *Emotion* (Advance online publication).

学会発表

Nagaoka, C., Matsushima, K., Yoshikawa, S. & Kato, T. "Therapist-Child Interaction: A Preliminary Study of Occupational Therapy using Quantitative Analysis." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.28.

Sanders, Jet G., Minemoto, K., Ueda, Y., Yoshikawa, S. & Jenkins, R. "Other-race effect in hyper-realistic mask detection: a new challenge for facial identification." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.29.

Sekiyama, K., Nishiguchi, S., Kawagoe, T., Yamada, M., Suzuki, M., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R. & Yoshikawa, S. "The impact of a dual-task exercise intervention on neural efficiency in older adults." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.29.

Ogawa, S., Yoshikawa, S. & Funabiki, Y. "Individualized learning support program for children with developmental disorders using MSPA (Multi-Dimensional Scale for PDD and ADHD)." IACAPAP 2016 (International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions World Congress), Calgary, Canada, 2016.9.21.

田村綾菜, 小川詩乃, 吉川左紀子, 正高信男 「自閉症スペクトラム障害のある児童のフラストレーション場面における言語的な表示規則の使用——P-Fスタディを用いた検討」日本発達心理学会第28回大会 (広島市) 2017.3.26.

講演等

吉川左紀子 「豊かさとは何か——『幸福な人生』を考える」夏期女性講座 (京都市生涯学習センター, 京都市) 2016.7.28.

吉川左紀子 「心を豊かにするコミュニケーション」京都SKYシニア大学入学式 (京都テルサホール, 京都市) 2016.9.6.

吉川左紀子 「表情による感情表出とその理解」日本認知心理学会公開シンポジウム 「認知科学のフロンティアVIII——感情・感性・コミュニケーション」(工学院大学, 東京都) 2016.10.1.

吉川左紀子 「感性価値を発見し, 感性価値を活かす——感性科学への期待」感性科学研究会シンポジウム ((株)花王小田原事業所, 小田原市) 2016.10.21.

吉川左紀子 「人間関係とコミュニケーション」京都府看護協会実習指導者講習会 (京都府看護協会研修センター, 京都市) 2016.11.2.

吉川左紀子 「心理学から見たユマニチュード」孤立防止のための自助・互助強化プログラム開発プロジェクト2016年度シンポジウム 「認知症ケアを問い直す: 人間らしくあるということ——ユマニチュード」(京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2017.3.5.

吉川左紀子 「『人間らしくあること』を支えるデザイン」京都工業繊維大学COIヘルスサイエンス拠点シンポジウム 「尊厳のこころを繋ぐユニバーサルデザイン」(キャンパスプラザ京都, 京都市) 2017.3.15.

社会活動等

日本認知心理学会理事.

文部科学省研究成果展開事業 「センター・オブ・イノベーションプログラム」構造化チーム委員.

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員.

京都市社会福祉審議会委員.

京都市社会教育委員.

(公) ひと・健康・未来研究財団理事.

河合俊雄

著書

Kawai, T. (2016) "Psychological Relief Work after the 11 March 2011 Earthquake in Japan: Jungian Perspectives and the Shadow of Activism." Kiehl, E. et al. (Eds.) *Analysis and Activism: Social and Political Contributions of Jungian Psychology*. 193-199. London: Routledge.

河合俊雄 (2016) 「現代社会における物語」大澤真幸編『岩波講座現代6 宗教とこころの新時代』岩波書店, 145-168.

河合俊雄 (2016) 「発達障害の増加と発達の『非定型化』」河合俊雄, 田中康裕編『発達の非定型化と心理療法』創元社, 4-24.

河合俊雄 (2016) 「発達障害とは見立てられない子どもとそのプレイセラピーの特徴」河合俊雄, 田中康裕 (編) 『発達の非定型化と心理療法』創元社, 144-155.

論文

畑中千紘, 田中崇恵, 加藤のぞみ, 小木曾由佳, 井芹聖文, 神代未人, 土井奈緒美, 長谷川千紘, 高嶋雄介, 皆本麻実, 河合俊雄, 田中康裕 (2016) 「発達障害へのプレイセラピーにおける保護者面接の意義と可能性」『箱庭療法学研究』29 (2), 17-28.

皆本麻実, 畑中千紘, 梅村高太郎, 田附紘平, 松波美里, 岡部由菜, 粉川尚枝, 鈴木優佳, 河合俊雄, 田中康裕 (2016) 「診断を受けながらも発達障害とは見立てられない事例の特徴」『箱庭療法学研究』29 (2), 43-54.

河合俊雄 (印刷中) 「『ケンカができない』と語った20代女性との面接事例」へのコメント『学習院大学心理相談室紀要』.

河合俊雄 (2016) 「世界の中での日本のユング心理学」日本ユング心理学会編『ユング心理学研究』第8巻「世界における日本のユング心理学」創元社, 13-24.

金山由美, 田中美香, 河合俊雄, 山森 (卯月) 路子, 桑原晴子, 梅村高太郎, 長谷川千紘, 鍛冶まどか, 西垣紀子 (2016) 「甲状腺疾患患者のバウムと人格特徴」『心理臨床学研究』33 (6), 591-601.

田中美香, 金山由美, 河合俊雄, 桑原晴子, 山森路子, 長谷川千紘, 深尾篤志, 窪田純久, 伊藤充, 宮内昭 (2016) 「甲状腺専門病院における心理臨床」『日本甲状腺学会雑誌』7 (1), 12-16.

河合俊雄 (2017) 「WAT (Jung 言語連想) の治療的利用」『精神療法』43 (1), 32-35.

河合俊雄 (2016) 連載「こころの最前線と古層」第1回「変わるこころ, 変わらないこころ」『究』2016年9月号, 2-3.

河合俊雄 (2016) 連載「こころの最前線と古層」第2回「発達障害と中世のこころ」『究』2016年10月号, 2-3.

河合俊雄 (2016) 連載「こころの最前線と古層」第3回「箱庭療法と内面化」『究』2016年11月号, 2-3.

河合俊雄 (2016) 連載「こころの最前線と古層」第4回「発達の非定型化」『究』2016年12月号, 2-3.

河合俊雄 (2016) 連載「こころの最前線と古層」第5回「心理療法と古い」『究』2017年1月号, 2-3.

河合俊雄 (2017) 連載「こころの最前線と古層」第6回「心理療法と巡礼」『究』2017年2月号, 2-3.

河合俊雄 (2017) 連載「こころの最前線と古層」第7回「身体と心理療法」『究』2017年3月号, 2-3.

河合俊雄 (2016) 「刊行によせて」河合俊雄『〈物語と日本人の心〉コレクションI~V』, 岩波現代文庫.

河合俊雄 (2016) 「解説 臨床家の読んだ『源氏物語』」河合俊雄著,

河合俊雄編「〈物語と日本人の心〉コレクションⅠ 源氏物語と日本人 紫マンダラ」岩波現代文庫。

河合俊雄 (2017) 「心の深いところが描かれているファンタジー」『清流』2017年2月号, 清流出版, 58-59.

河合俊雄 (2016) 「ハルキをめぐる読みの冒険——『海底火山』は何のメタファーか」NHK出版『英語で読む村上春樹——世界のなかの日本文学』2017年1月号, 118-127.

河合俊雄 (2017) 「解説 その時のことば, 今聞くことば」河合隼雄『私が語り伝えたかったこと』河出文庫。

千葉久美子, 河合俊雄, 田中康裕, 笹原留似子, 宇田川一夫 (2016) 「“ゆらぎの物語”を創る」『箱庭療法学研究』29 (1), No.1, 121-145.

編集

河合隼雄著, 河合俊雄編 (2016) 『〈物語と日本人の心〉コレクションⅠ 源氏物語と日本人 紫マンダラ』岩波現代文庫。

河合隼雄著, 河合俊雄編 (2016) 『〈物語と日本人の心〉コレクションⅡ 物語を生きる——今は昔, 昔は今』岩波現代文庫。

河合隼雄著, 河合俊雄編 (2016) 『〈物語と日本人の心〉コレクションⅢ 神話と日本人の心』岩波現代文庫。

河合隼雄著, 河合俊雄編 (2016) 『〈物語と日本人の心〉コレクションⅣ 神話の心理学——現代人の生き方のヒント』岩波現代文庫。

河合隼雄著, 河合俊雄編 (2017) 『〈物語と日本人の心〉コレクションⅤ 昔話と現代』岩波現代文庫。

学会発表

Kawai, T. "A Traditional View of Nature and Its Transformation: Lessons of the 2011 Earthquake in Japan." A Landmark Conference Celebrating Pacifica's 40th Anniversary, Pacifica, California, 2016.4.21-24.

Kawai, T. "Haruki Murakami and State of Psyche today." C.G. Jung Institute of Los Angeles Public Programs: Winter/Spring 2016, 2016.4.24.

Konakawa, H., Kawai, T., Tanaka, Y., Matsuoka, T., Hatanaka, C., & Umemura, K. "The relationship between sense of self of dream I and the structure of dreams." International Association for Analytical Psychology Congress in Kyoto 2016. Kyoto International Conference Center, Kyoto, 2016.8.28-9.2.

粉川尚枝, 松岡利規, 田中康裕, 河合俊雄, 畑中千紘, 梅村高太郎 「夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連」日本箱庭療法学会第30回大会 (帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.15-16.

田附紘平, 畑中千紘, 梅村高太郎, 皆本麻実, 松波美里, 岡部由菜, 粉川尚枝, 鈴木優佳, 西珠美, 大場有希子, 松岡利規, 望月陽子, 河合俊雄, 田中康裕 「発達障害のプレイセラピーにおけるネガティブな事象——発達検査, 日常生活の検討を含めて」日本箱庭療法学会第30回大会 (帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.15-16.

講演

河合俊雄 「こころの変容と宇宙——華嚴経にてらして」京都大学未来創世学国際研究ユニット第1回セミナー「宇宙とこころの不思議に迫る」(京都大学基礎物理学研究所・パナソニック国際交流ホール, 京都市) 2016.4.28.

河合俊雄, 岩宮恵子 「河合隼雄『ユング心理学と仏教』・『生と死の接点』と現代の心理療法」日本ユング派分析家協会2016年度夏学期セミナー (京都テルサ, 京都市) 2016.5.8.

河合俊雄 「心理療法の成果の狭まりと広がり」日本ユング派分析家協会2016年度夏学期セミナー (連合会館, 東京都) 2016年7月17日.

河合俊雄 「夢と現実における他者」日本箱庭療法学会2016年度第1回全国研修会 (大正大学, 東京都) 2016.7.31.

河合俊雄, 日本遊戯療法学会第22回年次大会公開シンポジウム「発達障害の見立てと遊戯療法における転機」シンポジスト (天理大学, 天理市) 2016.8.28.

河合俊雄, 公開インタビュー「佐渡裕さんにきく: 河合隼雄の思い出」インタビュアー (京都国際会館アネックスホール, 京都市)

2016.8.30.

河合俊雄, シンポジウム「文化のトラウマとその癒し——世界における心理療法家のアプローチ」指定討論者, 日本心理臨床学会第35回秋季大会プレコングレス (パシフィコ横浜, 横浜市) 2016.9.4.

河合俊雄 「アウトリーチとしての心理療法と現代のこころ」第34回いのちの電話相談員全国研修会なら大会 (天理大学, 天理市) 2016.9.15.

河合俊雄 「自閉症スペクトラム障害への心理療法の試みと時代性」日本精神病理学会第39回大会教育講演Ⅲ (アクティシティ浜松コンgresセンター, 浜松市) 2016.10.8.

河合俊雄, 日本箱庭療法学会30回記念ケースシンポジウム「事例から見る箱庭療法の30年」シンポジスト (帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.16.

河合俊雄, 公開インタビュー「河合雅雄に聞く 弟・河合隼雄の宇宙——自然, サイエンス, 物語」インタビュアー (京都大学稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2016.10.30.

河合俊雄 「こころの病と対処法・今昔」奈良県立奈良高校平成28年度創立記念講演会 (奈良高校, 奈良市) 2016.11.2.

河合俊雄, 鏡リュウジ「ユング心理学における占星術と夢——その理論と実際」日本ユング派分析家協会2016年度冬学期セミナー (連合会館, 東京都) 2016.11.6.

河合俊雄 "Various developmental disorder and sandplay" 第19回韓国箱庭療法学会 (ソウル市立大学, 韓国) 2016.12.10.

河合俊雄 「発達非定型化と心理療法」日本ユング派分析家協会2016年度冬学期セミナー (京都テルサ, 京都市) 2017.1.22.

河合俊雄 「イメージ媒体の選択」2016年度第2回日本箱庭療法学会研修会 (京都リサーチパーク, 京都市) 2017.2.19.

河合俊雄 「アウトリーチとしての心理療法と現代のこころ」島根県臨床心理学研究会主催特別研修会 (松江テルサ, 松江市) 2017.3.12.

Kawai, T. "The historicity and possibility of Jungian analysis: another view of 'SWOT'." The Society of Analytical Psychology Annual Lecture, The Welcome Collection, (London) 2017.3.25.

メディア出演

NHK ラジオ第2放送語学講座「英語で読む村上春樹」2016年10月30日放送 (2016年11月5日再放送)

小村 豊

学会発表

Okamoto, K., Komura, Y., & Kajiwara, R., "Experimental design for investigating the music preference in rat," The SICE Life Engineering Symposium 2016, Osaka International House Foundation, Osaka, 2016.11.3-5.

Nikkuni, A., Fujimoto, S., & Komura, Y., "Feeling of knowing one's own status in humans and animals," Gordon Research Conference, Newry, USA, 2016.7.24-29.

講演等

Komura, Y., "Self-reflective codes in the deep brain." International symposium for SPIRITS, Invited, Inamori Foundation Memorial Building, Kyoto University, Kyoto, 2016.7.31.

小村豊 「新たな人間理解と知能モデル創生」ブレインウェア研究会招待講演 (東北大学, 仙台市) 2016.12.20.

小村豊 「意識は, 自然科学に『こころ』を開くのか?」こころの未来研究センター研究報告会2016「こころの拡がり」と未来 (稲盛財団記念館, 京都市) 2016.12.11.

小村豊 「自分を知ること, 他人を知ること」第34回関西若手実験心理学研究会招待講演 (京都大学, 京都市) 2017.1.28.

社会活動等

日本学術振興会・科学研究費審査委員。

広井良典

論文

- 広井良典 (2016) 「ケアの倫理と公共政策」『社会保障研究』1 (1), 22-37.
- 広井良典 (2016) 「鎮守の森コミュニティ・プロジェクト」『まちむら』136号, 6-7.
- 広井良典 (2017) 「幸福政策は可能か——幸福をめぐる理念と公共政策」『公共研究』13 (1), 108-122.
- 広井良典 (2017) 「コミュニティとしての都市一家族・地域コミュニティの変容とこれからの都市自治体政策のあり方」『都市とガバナンス』第27号, 3-11.

著書

- 広井良典 (2016) 『『脱成長の福祉国家』は可能か——ポスト資本主義とコミュニティ経済』中野佳裕編訳, ジャン＝ルイ・ラヴィル, ホセ・ルイス・コラッジオ編『21世紀の豊かさ』コモンズ, 302-327.
- 広井良典 (2017) 「なぜいま福祉の哲学か」広井良典編著『福祉の哲学とは何か——ポスト成長時代の幸福・価値・社会構想』ミネルヴァ書房, 1-76.
- 広井良典 (2017) 「超長期の歴史把握と現在」広井良典, 大井浩一 共編著『2100年へのパラダイム・シフト——日本の代表的知性50人が, 世界/日本の大変動を見通す』作品社, 7-43.
- 広井良典 (2017) 「定常型社会を迎え, 日本は何をめざすのか? ——成熟と幸福のための科学技術考」国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター編『科学をめざす君たちへ——変革と越境のための新たな教養』慶応義塾大学出版会, 314-339.
- 広井良典 (2017) 「人口減少社会と地域コミュニティ」他, 宮本みち子・大江守之編『人口減少社会の構想』放送大学教育振興会, 200-219, 262-300.
- 広井良典 (2017) 『ポスト資本主義——科学・人間・社会の未来』(韓国語版), AKコミュニケーションズ(ソウル).

学会発表

- 広井良典「公共政策, 科学哲学の視点からみたケアサイエンス」日本学会会議 健康・生活科学委員会 看護学学科会(お茶の水女子大学, 東京都) 2016.7.23.
- 広井良典「鎮守の森とコミュニティづくり」社叢学会平成28年度年次総会シンポジウム(鹿島神宮, 鹿嶋市) 2016.6.19.
- 広井良典「幸福政策は可能か——幸福をめぐる理念と公共政策」第5回日本ポジティブサイコロジイ医学会学術集会(龍谷大学, 京都市) 2016.10.22.
- 広井良典「持続可能な医療と統合医療・鍼灸への期待」世界鍼灸学会連合会学術大会(つくば国際会議場, つくば市) 2016.11.5.
- 広井良典「『持続可能な福祉社会』と地球倫理」地球システム・倫理学会第12回学術大会シンポジウム(麗澤大学, 柏市) 2016.11.12.

講演

- 広井良典「幸福度指標をめぐる課題」, 「岩手の幸福に関する指標」第1回研究会(盛岡市), 2016.4.28.
- 広井良典「日本の社会保障と医療保険」JICA ベトナム国健康保険制度に係る情報収集・確認調査研修(弘済会館, 東京都) 2016.5.16.
- 広井良典「人口減少社会を希望に——幸福度指標とこれからの日本社会」幸セリーグ(住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合)実務者会議(日暮里サニーホール, 東京都) 2016.7.8.
- 広井良典「Science, Innovation and Policy for Sustainable Welfare Society/ 持続可能な福祉社会のための科学・イノベーション・政策」フランス国立科学センター(CNRS), フランス国立社会科学高等研究院(EHESS) 日仏財団, 科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター(RISTEX) 共催日仏国際会議「Innovation beyond Technique」(KKRホテル東京, 東京都) 2016.9.13.

広井良典「人口減少社会を希望に——ローカル化時代のコミュニティとまちづくり」第8回人と環境にやさしい交通をめざす全国大会(福井市) 2016.11.27.

広井良典「Economy, Ethics and Happiness in the Post-Growth Era/ ポスト成長時代の経済・倫理・幸福」立命館大学稲盛経営哲学研究センター主催・第2回国際シンポジウム「稲盛経営哲学に基づく社会の実現に向けて」(立命館大学, 茨木市) 2016.12.8.

広井良典「2040年, 日本は持続可能か——定常型社会への展望」東京大学高齢社会総合研究機構(IOG)「ヘルシーエイジング社会の設計」シンポジウム(東京大学, 東京都) 2017.3.4.

広井良典「鎮守の森とコミュニティづくり」, 京都大学フィールド科学教育研究センター公開シンポジウム(京都大学益川ホール, 京都市) 2017.3.19.

新聞等掲載

- 広井良典「この3冊: 広井良典選『ポスト成長』」毎日新聞, 2016年5月15日.
- 広井良典「経済と倫理 調和探る動き」読売新聞, 2016年5月18日.
- 広井良典「教えて! 政策チェック: ベーシックインカム」朝日新聞, 2016年7月2日.
- 広井良典「ポスト成長の時代」日本経済新聞, 2016年9月24日.
- 広井良典「社会保障世論調査: 全世代で応分の負担を」読売新聞, 2016年10月19日.
- 広井良典「未来への希望 京滋から問う(新春座談会)」京都新聞, 2017年1月1日.
- 広井良典「成長神話のその先へ」毎日新聞, 2017年1月11日.
- 広井良典「宗教への関心強い若者 夢と現実の新たな地平」『AERA』2017年1月16日.
- 広井良典「生活困窮 心の問題と連動」読売新聞, 2017年2月8日.
- 広井良典「『無』と『死』を考える時代」①「人工知能は死の夢を見るか?」②「『無の科学』は可能か」, ③「生と死のグラデーション」④「ポスト成長時代と“夢人口”」, 『WEBRONZA』2016年10月26日, 11月2日, 11月7日, 11月10日.

カール・ベッカー

論文

- カール・ベッカー「スピリチュアルに生きる意味」『楽園』超高齢社会特集64号, 7-13, 2016.7.
- 谷山洋三, 得丸定子, 奥井一機, 今井洋介, 森田敬史, 御堀ヨセフ, カール・ベッカー, 高橋原, 鈴木岩弓「経文聴取による喪失悲嘆ストレスのケア」『仏教看護・ビハラー』11号, 151-165, 2016.8.
- カール・ベッカー他「公衆衛生に仏教の力を——高齢社会迎え役割に期待」『週間佛教タイムス』2686号, 3, 2016.9.29.
- カール・ベッカー「見えないものを感じ取る力」『楽園』66号, 8-13, 2017.1.
- 沖永隆子, カール・ベッカー「終末期に対する早期支援」『こころの未来』第16号, 52, 2017.3.
- 赤塚京子, カール・ベッカー「出生をめぐる医療と倫理」『こころの未来』第16号, 53, 2017.3.
- 中嶋文子, 赤澤千春, 近藤恵, カール・ベッカー「新人看護師の職場適応への過程——5年目看護師の語りの分析」『椋山女学園大学看護学研究』9号, 1-13, 2017.3.

講演

- カール・ベッカー「中堅管理職の医療倫理」, 医療倫理研修会(武田病院, 京都市) 2016.4.28.
- カール・ベッカー「生と死を考える」, 未来創成学国際研究ユニット(パナソニック国際交流ホール, 京都市) 2016.5.10.
- Carl Becker, "Can spirituality transform our world? Has it new frontiers?" British

Assn. for Study of Spirituality, Manchester University, 2016.5.25
カール・ベッカー「今を生き、明日をいきる」いのち教育セミナー
2016（上越教育大学，上越市）2016.6.10.
カール・ベッカー「看取りを考える，緩和ケア/在宅医療の看護師」
日本財団（東京都）2016.6.12.
カール・ベッカー「念仏者の生き方と往って生きるお浄土」浄土真
宗勉強会（滋賀県）2016.6.20.
カール・ベッカー「終末期の仏教的スピリチュアルケア」JSSC太融
寺（太融寺，大阪市）2016.7.15.
カール・ベッカー「超高齢社会を生きる——日本人の死生観を活か
す」老人看護学会（大宮市）2016.7.24.
カール・ベッカー「ペットロスに関する一考察」科研会議（東北大
学，仙台市）2016.7.30.
Carl Becker, Responsible Bioethics from a Japanese Perspective, IACCP（国際
比較心理学会），（名古屋大学，名古屋市）2016.7.31.
カール・ベッカー「生きる力をどう引き出すか」学校教育相談研究
大会（平安高等学校，京都市）2016.8.5.
カール・ベッカー「生きがい感を如何に探せるのか」教育大学協会
家庭部門大会（金沢市）2016.8.19.
カール・ベッカー「看護師を疲弊からどう守れるか」ビハーラ学会
（龍谷大学，京都市）2016.8.26.
カール・ベッカー「宗教研究と地球環境問題——国際グローバル理
解」日本宗教学会（早稲田大学，東京都）2016.9.9.
カール・ベッカー「日本仏教とグリーンケア」悲嘆シンポジウム（稲
盛記念館3階大ホール，京都市）2016.9.15.
カール・ベッカー「介護者・看護師のストレスコーピング」第40回日
本死の臨床研究会（札幌コンベンションセンター，札幌市）2016.10.7-
9.
カール・ベッカー「これからの医療とまちづくり」MOA金沢（金
沢市民ホール，金沢市）2016.10.15.
カール・ベッカー「終末期介護を考える：SOC, ACP, EOL」ライフ・
イン京都30周年記念会（ライフ・イン京都，京都市）2016.10.25.
カール・ベッカー「総合病院におけるスピリチュアルケア」総合病
院精神医学会（日本教育会館，東京都）2016.11.26.
カール・ベッカー「日本人の死生観と出雲」古代出雲歴史博物館・
上廣歴史文化フォーラム（古代出雲歴史博物館，出雲市）2016.11.27.
カール・ベッカー「多様化するこころと倫理」こころの未来研究セ
ンター上廣こころ学研究部門2016年度研究報告会「多様化するこ
ころと共生」（稲盛記念館3階大ホール，京都市）2016.12.11.
カール・ベッカー「中堅管理職の医療倫理」医療倫理研修会（武田
病院，京都市）2017.1.24.
カール・ベッカー「『心』が患者を救えるか？ 医療者を支え得る
か？」広島皮膚科病院部会会議（広島ロイヤルホテル，広島市）
2017.1.29.
カール・ベッカー「生老病死 輝くいのちを見つめて——日本的仏
教的スピリチュアルケア」福岡ビハーラ公開講座，本願寺派福岡教
区ビハーラ福岡（本願寺福岡教堂，福岡市）2017.2.22.
カール・ベッカー「心の対話と心のケア——患者理解と介護疲弊」
大分教区ビハーラ公開講座（大分県立総合文化センター，大分市）
2017.2.25.
カール・ベッカー「最後の一口はどこで？」愛知県歯科衛生士会（愛
知学院大学，日進市）2017.3.5.
社会貢献
国際個別化医療学会顧問。
日本実存療法学会顧問。
日本宗教学会理事。
日本人体科学会理事。

日本スピリチュアル・ケア学会理事。
仏教看護ビハーラ学会理事。
国際生命情報科学会評議員。
日本医学哲学・倫理学会評議員。
日本精神医学史学会評議員。
日本生命倫理学会評議員。
仏教心理学会評議員。
British Journal of Spirituality 編集員。
Mortality Journal 編集員。
Near-Death Studies Journal 編集員。
Personalized Medicine Universe 編集員。
Taiwan East Asian Studies Journal 編集員。

吉岡 洋

論文

吉岡洋（2017）「芸術と道徳をめぐって」AKIBI Plus 事務局編『辺境
芸術最前線——生き残るためのアートマネジメント』秋田公立美
術大学。

批評・エッセイ・対談等

吉岡洋，光島貴之（2016）「見えない世界を面白くするアート」たん
ばぼの家編『ソーシャル・アート——障害のある人とアートで社会
を変える』。

吉岡洋（2016）『フリーダ・カーロ 生涯と芸術』京都国立近代美
術館『視る』483号。

吉岡洋（2016）「刊行によせて」日本記号学会編『ハイブリッド・リ
ーディング——新しい読書と文字学』叢書セミオトポス11，新曜社。

吉岡洋（2016）「小さな裂け目を増殖させる」岐阜おおがきビエンナ
ーレ2015「日々の裂け目」カタログ。

吉岡洋（2016）「マッコをなだめる方法（アート）」MATSUO
MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w『有毒女子通信』第17号「アート
を舐めるマッコ」。

学会発表

吉岡洋「デジタルメディア時代のファッション」第37回日本記号学
会大会シンポジウム（明治大学，東京都）2016.5.21。

Yoshioka, H. "Questions about Mass Culture and Aesthetics." The 20th World
Congress of Aesthetics, Seoul National University, 2017.6.26.

Yoshioka, H. "Aesthetics of Media Arts in the East Asia." The 20th World
Congress of Aesthetics, Seoul National University, 2016.6.26.

Yoshioka, H. "Bento and Sento: Emergence of Artistic Practice in Everyday Life." The 20th World Congress of Aesthetics, Seoul National University, 2016.6.28.

Yoshioka, H. "Nuclear Imagination in Art and Pop Culture in the Postwar Japan." "Sovereignty, Migrants and Culture," the Second International colloquium on contemporary theory, philosophy, esthetics, politics, society, new media technology and economics. Atrium, Research Centre of the Slovenian Academy of Sciences and Arts in Ljubljana, ZRC-SAZU, Ljubljana, Slovenia, 2016.11.25.

講演・対談・シンポジウム

吉岡洋「通り抜けるためのアート」現代美術展「通り抜けフープ」
（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA，京都市）2016.8.27。

吉岡洋「メディアアートとは何か？ IAMAS20周年から考える」あ
いちトリエンナーレ シンポジウム「メディアアートの20年」（名古屋
市美術館，名古屋市）2016.10.10。

吉岡洋「森とアート」京都伝統文化の森推進協議会・公開セミナー
（稲盛財団記念館，京都市）2016.6.4。

吉岡洋「テクノロジーを地域化すること」地域技術とメディア美学
研究会，2017.1.9。

吉岡洋「地域の情報をつかってつくる，どこにもない本づくり」地

域と文化のためのメディアを考える連続講座, 鳥取大学「メディア連続講座」(鳥取大学, 鳥取市) 2017.1.15.

Yoshioka, H. "Art in Public in Japan" (マドリッドのメディアアート祭 "Publica 17" Circulo de Bellas Artes, Madrid, Spain) 2017.1.26.

Yoshioka, H. 「戦後日本の美術とポップカルチャーにおける〈核〉の想像力」(サラゴサ大学法学部, スペイン) 2017.1.27.

Yoshioka, H. "Art Festivals in Japan since 2000" リスボン地理協会, Lisbon, Portugal, 2017.1.30.

吉岡洋, 藤本由紀夫, 保山ひゃん「保山ひゃん個展 アババアババギャッ」(ギャラリー5, 神戸市) 2017.2.4.

吉岡洋「心の動きをたどる——芸術とはどんな〈出来事〉なのか?」公開講演会「自由風格・京大」(石川県文教会館, 金沢市) 2017.3.11.

吉岡洋「〈毒〉とアート」公開講演会「京大おもろトーク」(京都大学時計台ホール, 京都市) 2017.3.21.

国際会議企画

京都賞シンポジウム美術部門(京都大学時計台ホール, 京都市) 2016.7.9.

美術関係企画

末富綾子アーティストトーク「共通感覚論」(稲盛財団記念館, 京都市) 2016.12.16.

阿部修士

論文

Mugikura, S., Abe, N., Ito, A., Kawasaki, I., Ueno, A., Takahashi, S., & Fujii, T. (2016) "Medial temporal lobe activity associated with the successful retrieval of destination memory." *Experimental Brain Research*, 234: 95-104.

Yanagisawa, K., Abe, N., Kashima, E.S., & Nomura, M. (2016) "Self-esteem modulates amygdala-ventrolateral prefrontal cortex connectivity in response to mortality threats." *Journal of Experimental Psychology: General*, 145 (3): 273-283.

Ito, A., Fujii, T., Abe, N., Kawasaki, I., Hayashi, A., Ueno, A., Yoshida, K., Sakai, S., Mugikura, S., Takahashi, S., & Mori, E. (2016) "Gender differences in ventromedial prefrontal cortex activity associated with valuation of faces." *Neuroscience*, 328: 194-200.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N., & Nomura, M. (2016) "Causal relationship between effective connectivity within the default mode network and mind-wandering regulation and facilitation." *Neuroimage*, 133: 21-30.

阿部修士 (2016) 「アルツハイマー病における記憶錯誤」『老年精神医学雑誌』 27 (8) : 840-845.

柳澤邦昭, 阿部修士 (2016) 「社会神経科学」北村英哉, 内田由紀子編『社会心理学概論』ナカニシヤ出版, 365-385.

講演・学会発表・ワークショップ等

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N., & Nomura, M. "Causal relationship between effective connectivity within the default mode network and mind-wandering regulation and facilitation." Brain Stimulation and Imaging Meeting 2016, Geneva, Switzerland, June 24-25, 2016.

阿部修士「脳はどのように意思決定を行うのか? ——道徳心や“嘘つき”の研究から」京都市生涯学習総合センター アスニーセミナー(生涯学習講座)(京都アスニー, 京都市) 2016.7.15.

Sekiyama, K., Nishiguchi, S., Kawagoe, T., Yamada, M., Suzuki, M., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., & Yoshikawa, S. "The impact of a dual-task exercise intervention on neural efficiency in older adults." 31st International Congress of Psychophysiology, Yokohama, Japan, July 24-29, 2016.

Yanagisawa, K., Kashima, E.S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N. "Thinking about death increases temporal discounting: an fMRI study." 31st International Congress of Psychophysiology, Yokohama, Japan, July 24-29, 2016.

Ueda, R., Yanagisawa, K., Ashida, H., & Abe, N. "Why do some people engage

in immoral love?: Insights from neuroimaging and implicit association test." 31st International Congress of Psychophysiology, Yokohama, Japan, July 24-29, 2016.

Tominaga, H., Abe, N., & Uchida, Y. "What is a prosocial way in an interdependent cultural context? - Interdependent cultural value inhibits selfishness -." International Association for Cross-Cultural Psychology 23rd International Congress, Nagoya, Japan, Jul 30-Aug 3, 2016.

Abe, N. "Cognitive mechanisms in (dis)honesty: behavioral and neural evidence." International Symposium: Social Cognitive Biology on Representation of Environment, Kyoto, Japan, July 31, 2016.

Ueda, R., Yanagisawa, K., & Abe, N. "Implicit and explicit processes of inhibiting desire for an extra-pair relationship." International Symposium: Social Cognitive Biology on Representation of Environment, Kyoto, Japan, July 31, 2016.

阿部修士「脳とこころのはたらきにアプローチする産学連携の取り組み」日立京大ラボ開所式及び記念シンポジウム(京都市) 2016.8.1.

阿部修士「意思決定のメカニズム——心理学と脳科学の知見から」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科2016年度教育実践学フォーラム(大阪市) 2016.8.27.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N., & Nomura, M. "Asymmetric function of the right and left inferior parietal lobule in mind wandering - A tDCS and fMRI study." 6th International Conference on Transcranial Brain Stimulation 2016, Göttingen, Germany, September 7-10, 2016.

柳澤邦昭, 阿部修士「見知らぬ他者の存在がもたらす時間割引の抑制効果」日本社会心理学会第57回大会(関西学院大学, 西宮市) 2016.9.17-18.

柳澤邦昭, 阿部修士「日々の幸福感を満たす期待——物質主義者のパラドクス」日本グループ・ダイナミックス学会第63回大会(九州大学, 福岡市) 2016.10.9-10.

阿部修士「正直さを発現する脳のメカニズム」第5回日本ポジティブサイコロジイ医学会学術集会(龍谷大学, 京都市) 2016.10.22.

上田竜平, 柳澤邦昭, 蘆田宏, 阿部修士「浮気欲求への抵抗——潜在的・顕在的抑制機能の認知的説明」関西心理学会第128回大会(京都大学, 京都市) 2016.11.3.

上田竜平, 柳澤邦昭, 蘆田宏, 阿部修士「恋愛関係の維持における, 交際期間に依存した腹外側前頭前野の抑制機能」第19回日本ヒト脳機能マッピング学会(京都大学, 京都市) 2017.3.9-10.

メディア

阿部修士「ウソの科学」読売KODOMO新聞2016年11月10日10-11面.

内田由紀子

論文

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2016) "Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem among older children and early adolescents in Japan, 1999-2006." *SAGE Open*, 6(3), 1-8.

Kitayama, S., Akutsu, S., Uchida, Y., & Cole, S. W. (2016) "Work, meaning, and gene regulation: Findings from a Japanese information technology firm." *Psychoneuroendocrinology*, 72, 175-181.

Choi, E., Kim, Y.-y., & Uchida, Y. (2016) "The folk psychology of happiness in Korea." *Korean Journal of Culture and Social Issues*, 22, 165-182.

Ishii, K., & Uchida, Y. (2016) "Japanese youth marginalization decreases interdependent orientation." *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 47, 376-384.

Tsai, J. L., et al (2016) "Leaders' smiles reflect cultural differences in ideal affect." (9/14 authors). *Emotion*, 16, 183-195.

Boiger, M., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B. (2016) "Protecting autonomy, protecting relatedness: Appraisal patterns of daily anger and shame in the United States and Japan." *Japanese Psychological Research*, 58, 28-41.

内田由紀子 (2016) 「幸福感研究と指標活用」『生活協同組合研究』

2016年11月号, 12-19.

福島慎太郎, 竹村幸祐, 内田由紀子 (2016)「農業社会・漁業社会における社会関係の特徴に関する調査研究」『新たな価値プロジェクト研究資料』第1号, 「農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発」第3章, 75-109.

書籍

Nakayama, M., Ueda, Y., Taylor, P.M., Tominaga, H., & Uchida, Y. (2017) "Cultural Psychology as a Form of Memory Research." In T. Tsukiura & S. Umeda (Eds.), *Memory and the Social Context*. Tokyo: Springer Japan.

Hitokoto, H., & Uchida, Y. (in press). "Interdependent happiness: Progress and implications." In M. Demir, & N. Sumer (Eds.), *Close Relationships and Happiness across Cultures*. Dordrecht: Springer. Conference presentation.

内田由紀子, 一言英文, 中尾元 (2016)「健康と文化」大竹恵子編著『保健と健康の心理学——ポジティブヘルスの実現』ナカニシヤ出版, 193-212.

北村英哉, 内田由紀子編著 (2016)『社会心理学概論』ナカニシヤ出版 (編集ならびに14章「文化」担当).

内田由紀子 (2016)「震災前後の幸福感の変化」宅香菜子編『PTGの可能性と課題』金子書房, 170-171.

学会発表

Taylor, P.M., Nakayama, M., Uchida, Y., & Keltner, D. "Social awe in the corporate context: Awe towards executives is associated with commitment to the company." Poster presented at the 28th Annual Association for Psychological Science Convention, Chicago, USA, 2016.5.26-29.

Almeida, I., & Uchida, Y. "Different styles of keeping harmony in the collectivistic cultures of Brazil and Japan: The role of ideal affect in interdependence." Oral Presentation at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.25.

Tominaga, H., Uchida, Y., Miyamoto, Y., Yamasaki, T. "Negative Affect during Collective (but not Individual) Tasks are Associated with Holistic Attention." 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan, 2016.7.29.

Taylor, P., Uchida, Y., Nakayama, M., & Keltner, D. "When self-conscious and socially-engaging emotions overlap: Awe as a trigger for self reflection and evaluation in interdependent Japan." The 31st International Congress of Psychology 2016, Yokohama, Japan, 2016.7.28.

Taylor, P.M., Uchida, Y., & Keltner, D. "An overlap of self-conscious and socially engaging emotions: Social awe as a trigger for self reflection and evaluation in Japan." In Arimitsu, K. (Chair), Cross-cultural comparisons of positive self-conscious emotions. Symposium conducted at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.28.

Liu, I.H., Uchida, Y. & Norasakkunkit, V. "Does Marginalization Lead to Higher Risk of Cultural Deviance in Japan?" Rapid presentation at the International Association for Cross Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.1.

Ogihara, Y., Uchida, Y. & Kusumi, T. "Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem among older children and early adolescents in Japan." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.1.

De Almeida, I., Uchida, Y. "Cultural Marginalization Risk in Brazilian and Japanese University Students." Poster presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.2.

Taylor, P.M., Uchida, Y., & Keltner, D. "An intersection of fear and respect: Intra-cultural variations in Japanese reports of awe and their implications for American understandings of awe." In Nakayama, M. (Chair), Are meanings of awe shared across cultures? Symposium conducted at the 23rd Congress of the International

Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.1.

Nakayama, M., Taylor, P., Stancato, D., Monroy, M., Uchida, Y., Keltner, D. "Does self-construal affect worldview affirmation after meaning threats? Social effects reported more in Japan; Personal effects reported more in US." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.2.

Fukushima, S., Uchida, Y., Takemura, K., & Hitokoto, H. "Collective happiness: Community social capital reinforces the association between one's own happiness and one's neighbors' happiness." Paper presented at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.1.

Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S. "Farming cultivates a shared culture within a community: Examining the macro-level effects with multilevel analysis in farming and fishing areas." In A. K. Uskul (Chair), Economic environment as part of our ecology: Its role in who we are, how we think, and what we do. Symposium conducted at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan, 2016.8.2.

Ito, A., Gobel, M., & Uchida, Y. "Differences in sociometric status shape interpersonal attitudes and nonverbal behavior: Insights from cultural psychology." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.1.

Tominaga, H., Abe, N., Uchida, Y. "What is a prosocial way in an interdependent cultural context? -Interdependent cultural value inhibits selfishness." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.3.

Uchida, Y. "Cultural constructions of well-being." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan. (シンポジウム企画・指定討論) 2016.8.3.

Hitokoto, H., & Uchida, Y. "The interdependence of happiness: Its measurement validity and concept application." The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP), WINC Aichi, Nagoya, Japan, 2016.8.3.

中尾元, 内田由紀子「異文化間能力には包括的認知が必要か? ——文化的知性尺度 (Cultural Intelligence Scale) を用いた検討」ポスター発表, 日本社会心理学会第57回大会 (関西学院大学, 西宮市) 2016.9.18.

金子祥恵, 内田由紀子, 中山真孝, 竹村幸祐, 伊藤篤希「自己価値の随伴性と職場の価値観との不一致が従業員に及ぼす影響」日本社会心理学会第57回大会 (関西学院大学, 西宮市) 2016.9.17.

打田篤彦, 内田由紀子, 一言英文, 竹村幸祐「地域の価値の共有感と社会関係資本——京都府の都市・農村部を比較して」日本社会心理学会第57回大会 (関西学院大学, 西宮市) 2016.9.17.

伊藤篤希, 内田由紀子, Matthias Gobel「ソシオメトリック・ステータスの対人行動への反映——組織文化の違いが生み出すSMS獲得・維持の条件」日本社会心理学会第57回大会 (関西学院大学, 西宮市) 2016.9.18.

内田由紀子「コミュニティの幸福について考える」第5回日本ポジティブサイコロジイ医学会, 招待シンポジウム (龍谷大学, 京都市) 2016.10.22.

内田由紀子「地域の幸福とは何か——文化心理学からの考察」日本社会心理学会第60回公開シンポジウム「幸福感の社会心理学」(富山大学, 富山市) 2016.11.19.

Uchida, Y., Kitayama, S., Akutsu, S., Park, J., & Cole, S. T. "Will dispositional optimism longitudinally promote health? Exploration of a molecular mechanism." The 12th Cultural Psychology Preconference at the 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (SPSP), San Antonio, Texas, USA, 2017.1.

Liu, I.H., Uchida, Y., Ikeda, K., Mano, F., Joo, E. & Okura, M. "Hikikomori Risk Among Type 2 Diabetic Patients in Japan." Advances in Cultural Psychology Preconference poster presentation in Society for Personality and Social Psychology (SPSP), San Antonio, USA, 2017.1.

Taylor, P.M. & Uchida, Y. "Awe and Horror as Distinct Emotional Responses to Vast and Incomprehensible Experiences." Poster presented at the Emotion Pre-Conference of the Society for Personality and Social Psychology Conference (SPSP), San Antonio, 2017.1.

Taylor, P.M. & Uchida, Y. "Moral Intuitions Higher in Horror than in Awe." Poster presented at the Society for Personality and Social Psychology Conference (SPSP), San Antonio, 2017.1.21.

招待講演

内田由紀子「若者の幸福感・不適応感の文化的基盤」九州大学医学研究科精神科教室セミナー（九州大学，福岡市）2016.4.

竹村幸祐，内田由紀子，中山真孝「“幸福感”向上による働きがい醸成——メンバー能力最大化へのアプローチ」ナブテスコ株式会社鉄道カンパニー「くすのき会」講演会，2016.4.

内田由紀子「つながりがもたらす新しい価値と幸福——文化心理学からのマクロ・マイクロインタラクションアプローチ」産業競争力懇談会，パナソニック東京本社，2016.5.

内田由紀子，竹村幸祐，中山真孝「社員を育てる（社員の成長が会社の発展につながる）社員の幸福感や満足感のつくり方」京都微助っ人研究会春の例会（京都市）2016.5.

内田由紀子，竹村幸祐，中山真孝「経営者と幸福感」日本自動車部品工業会関西支部総務分科会講演会（京都市）2016.6.

内田由紀子「いま『幸福』を考える」第76回岩手県総合計画審議会（サンセール盛岡，盛岡市）2016.6.17.

内田由紀子「社会心理学研究とは何か——こころと社会の謎に挑む」2016学問発見講座，大阪府立茨木高等学校（茨木市）2016.7.9.

内田由紀子「地域コミュニティにおける文化と幸福——農業地域・漁業地域におけるマルチレベル分析」地球研セミナー，総合地球環境学研究所第4回栄養循環セミナー（京都市）2016.8.30.

内田由紀子「文化心理学研究から見た日本のリスク認知」京都シンポジウム2016 in 京大（第2回KURRN国際シンポジウム）「リスク研究のあり方を探る——政策に活かす視点から」（京都大学，京都市）2016.8.31.

内田由紀子「日本における個人主義」京都大学デザイン学セミナー（京都大学，京都市）2016.9.

内田由紀子，竹内幸祐，福島慎太郎「地域のつながりと幸福——普及が果たす役割」山梨県「農援隊」研修会（山梨県地場産業センター，甲府市）2016.10.

内田由紀子「文化と幸福について考える——心理学による幸せ研究」S G H関連講演（大阪府立北野高校，大阪市）2016.11.4.

内田由紀子「つながり普及活動と農業地域の幸福」近畿農政局（京都市）2016.11.

内田由紀子「地域の幸福を支える社会的つながり」第100回指導神職研修（伊勢市）2016.12.

内田由紀子「自然や他者への恐れと敬意——畏怖・畏敬感情のもつ働き」第100回指導神職研修（伊勢市）2016.12.

内田由紀子「地域の幸福とつながり」ミラック年次フォーラム（東京都）2016.12.23.

内田由紀子「幸福感とまちづくり」国際共同シンポジウム「超高齢社会の未来まちづくり——持続的に発展する地域とライフサポート」京都大学超高齢社会デザイン価値創造ユニット（京都大学，京都市）2017.1.13.

福島慎太郎，内田由紀子，竹内幸祐「漁村におけるつながりの醸成に資する水産業普及指導員の役割」平成28年度第2回水産業普及指

導員研修会（水産庁，東京）2017.2.

内田由紀子講演会「いま，幸福を考える——『しあわせの国』ブータンを通して見る日本」岩手県（岩手県民会館，盛岡市）2017.2.2.

Uchida, Y. "Interdependent happiness for sustainable society. Seminar: Culture and Well-being: Philosophy and mind." Kyoto University Kokoro Research Center. 2016.2.

内田由紀子「つながりを研究する——『つなぐ人』がもたらす価値」ナレッジキャピタル超学校，大阪大学COデザインセンター×ナレッジキャピタル——対話で創るこれからの「大学」（CAFE Lab./グランフロント大阪北館，大阪市）2017.3.16.

受賞

日本心理学会国際賞奨励賞（2016年11月）

熊谷誠慈

著書

熊谷誠慈（2017）「ボン教の歴史の概要」佛教学会編『仏教史研究ハンドブック』法蔵館，46-47.

論文

熊谷誠慈（2016）「インドからチベットへの中観派の展開」永沢哲監修『サンガジャパンVol.24 チベット仏教』サンガ，96-109.

熊谷誠慈（2017）「資本主義の先に何を指すべきか？ ポスト資本主義」広井良典，大井浩一共編著『2100年へのパラダイム・シフト——日本の代表的知性50人が，世界/日本の大変動を見通す』作品社，95-98.

Kumagai, S. (2017) "The Bonpo Abhidharma Theory of Perception (Samjñā)," *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 65-3, 1185-1192.

研究発表・講演等

熊谷誠慈「宗教は平和に寄与しうるか？——ブータンの事例を中心に」『京都大学公開講座 春秋講義』（京都大学百周年記念ホール，京都市）2016.4.6.

Kumagai, S. "Tibetan Interpretations of Satyadvaya," *International Workshop on Bhāviveka and Satyadvaya*, Ryukoku University, Kyoto, 2016.5.29.

Kumagai, S. "A Study through Biography and Chronicles on Tsangpa Gyare (1161-1211): the Founder of the Drukpa Kagyu School," *14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, University of Bergen, Bergen, 2016.6.22.

Kumagai, S. "New Horizon of Bhutanese Studies," *Emerging Sciences for Wildlife and Culture in Bhutan*, Kyoto University, Kyoto, 2016.7.11.

Kumagai, S. "Introduction of Bhutan Studies at KRC," *Official Meeting between Royal University of Bhutan and Kokoro Research Center*, Kyoto University (Kokoro Research Center), Kyoto, 2016.7.13.

熊谷誠慈「ボン教における『想蘊』の概念——ボン教アビダルマに影響を与える仏教思想」第67回日本印度学仏教学会（東京大学，東京都）2016.9.3.

Kumagai, S. "Re-examination of Aging and Death from Buddhist Philosophical Points of View: Well-being in a Super-aged Society," *Ageing, Health & Ethics*, University of Bristol, Bristol, 2016.9.20.

熊谷誠慈「GNHの源流——ブータンの仏教と幸福感」『ブータンの国民総幸福（GNH）——GNHの来歴・現況，その今日的意義』（国際協力機構（JICA）関西国際センター，大阪市）2016.9.29.

熊谷誠慈「ドク派開祖ツァンパ・ギャレー（1161-1211）の伝記研究——ブータン仏教とそのルーツ」チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究（京都大学，京都市）2016.11.26.

Kumagai, S. "Buddhism and Well-being in Bhutan (Source of Gross National Happiness)," Kokoro Research Center, Kyoto University, Kyoto, 2017.2.20.

Kumagai, S. "Buddhist Psychology for Happiness and Wellbeing," Taiwan

National University, Taipei.2017.2.22.

上田祥行

論文

Ueda, Y., & Yoshikawa, S. (2017) "Beyond Personality Traits: Which facial expression imply dominance in two-person interaction scenes?" *Emotion, Advance online publication.*

藤野正寛, 上田祥行 (2017) 「マインドワンダリングの低下に関わる集中瞑想と洞察瞑想の神経基盤」『精神科治療学』32 (5), 645-650.
市村賢士郎, 上田祥行, 楠見孝 (2017) 「清音ひらがな5文字のアナグラムデータベースの作成」『心理学研究』88, 241-250.

Ueda, Y., Chen, L., Kopecky, J., Cramer, E. S., Rensink, R. A., Meyer, D. E., Kitayama, S., & Saiki, J. (2017) "Cultural differences in visual search for geometric figures." *Cognitive Science*, 1-25.

Ueda, Y., Kamakura, Y., & Saiki, J. (2017) "Eye movements converge on vanishing points during visual search." *Japanese Psychological Research*, 59(2), 109-121.

Ueda, Y. (2016) "Ensembles of objects are stored without attention." 『基礎心理学研究』35, 95-96.

Higuchi, Y., Ueda, Y., Ogawa, H., & Saiki, J. (2016) "Task-relevant information is prioritized in spatiotemporal contextual cueing." *Attention, Perception, & Psychophysics*, 78(8), 1-14.

著書

Nakayama, M., Ueda, Y., Taylor, P.M., Tominaga, H., & Uchida, Y. (2017) "Cultural Psychology as a Form of Memory Research." In T. Tsukiura & S. Umeda (Eds.), *Memory and the Social Context*. Tokyo: Springer Japan.

学会発表, ワークショップなど

Ueda, Y. "The memory of ensemble mean is better for peripheral than perifoveal objects." International Meeting of the Psychonomic Society, Granada, Spain, 2016.5.8.

Kumakiri, S., Ueda, Y., & Saiki, J. "The effect of saliency and ensemble in visual search." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, USA, 2016.5.17.

Ueda, Y., Kamakura, Y., & Saiki, J. "Vanishing points attract eye movements during visual search." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, USA, 2016.5.17.

上田祥行 「グループの平均表情知覚の精度」日本認知心理学会第14回大会 (広島大学, 広島県) 2016.6.19.

市村賢士郎, 上田祥行, 楠見孝 「アナグラム課題の困難度と語彙特性の関連——ひらがな5文字のアナグラム課題データベースの作成」日本認知心理学会第14回大会 (広島大学, 広島県) 2016.6.19.

藤野正寛, 上田祥行, 水原啓暁, 齋木潤, 野村理朗 「洞察瞑想が線条体をシードとした機能的結合性に与える効果——集中瞑想との比較」第2回作業療法神経科学研究会学術集会 (北海道大学, 北海道) 2016.7.9.

Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J., & Nomura, M. "The functional connectivity of the striatum during focused attention meditation." 第39回日本神経科学大会 (パシフィコ横浜, 横浜市) 2016.7.20.

Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J., & Nomura, M. "How do focused attention meditation and open monitoring meditation regulate the default mode network activity?" 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.25.

Ichimura, K., Ueda, Y., & Kusumi, T. "Influence of self-ranking-feedback on learning performance and task motivation." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.27.

Ahmed, L., Ueda, Y., & Saiki, J. "Facial expression processing: The effect of culture and cognitive load." 31st International Congress of Psychology,

Yokohama, Japan, 2016.7.28.

Ueda, Y. "Simultaneous perception of multiple facial expressions and their personal traits." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.29.

Sanders, J. G., Minemoto, K., Ueda, Y., Yoshikawa, S., & Jenkins, R. "Other-race effect in hype-realistic mask detection: a new challenge for facial identification." 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.29.

Ueda, Y. "Visual experience modulates perception, attention, and preferences." Kyoto University-National Taiwan University International Symposium "Social Cognitive Biology on Representation of Environment." Kyoto, Japan, 2016.7.31.

藤野正寛, 上田祥行, 水原啓暁, 齋木潤, 野村理朗 「線条体とデフォルトモードネットワーク間の機能的結合性の違い」日本マインドフルネス学会第3回大会 (早稲田大学, 東京都) 2016.11.6.

上田祥行 「全体の雰囲気を感じる力とその個人差の規定因」日本基礎心理学会第35回大会 (東京女子大学, 東京都) 2016.10.29.

Ueda, Y. "Accuracy of ensemble summary of facial expressions." Psychonomic Society's 57th Annual Meeting, Boston, USA, 2016.11.18.

熊切俊祐, 上田祥行, 齋木潤 「顕著性とアンサンブルは眼球運動に同時に機能する」日本心理学会「注意と認知」研究会第15回合宿研究会 (名古屋市) 2017.3.6.

上田祥行, 齋木潤 「成績にもどづくフィードバックによる認知制御の促進」日本心理学会「注意と認知」研究会第15回合宿研究会 (名古屋市) 2017.3.6.

受賞

第2回作業療法神経科学研究会学術集会奨励賞基礎研究部門

日本マインドフルネス学会第3回大会最優秀研究賞

日本マインドフルネス学会第3回大会最優秀ポスター発表賞

日本基礎心理学会第35回大会優秀発表賞

清家 理

論文

清家理 (2016) 「患者さんの疑問から最新研究まで徹底解説! 糖尿病と認知症のふかへい関係不安を解決! —— 認知症なんでもQ&A, 徹底解説! 糖尿病と認知症のふかへい関係」『糖尿病ケア』13 (1), 56-61.

Seike, A., Sakurai, T., Toba, K., et al (2016) "Verification of Educational Support Intervention for Family Caregivers of Persons with Dementia." *Journal of the American Geriatrics Society*, 64 (3), 661-663.

櫻井孝, 清家理, 藤崎あかり, 大久保直樹, 竹内さやか, 森山智晴, 鳥羽研二他 (2017) 「平成28年度 愛知県委託事業認知症対策研究・支援事業」国立長寿医療研究センター編『認知症高齢者の家族介護者支援策の効果的な実施に関する研究等事業』

講演・学会発表

清家理, 住垣千恵子, 藤崎あかり, 武田章敬, 福田耕嗣, 遠藤英俊, 鷺見幸彦, 鳥羽研二, 櫻井孝 「ケアラーの介護ストレスに対するセルフコピーング手法の効果検証」第58回日本老年医学会 (金沢市) 2016.6.7.

清家理, 大久保直樹, 佐治直樹, 武田章敬, 鷺見幸彦, 鳥羽研二, 櫻井孝 「軽度認知障害および初期認知症をもつ人に対する重点的アプローチポイント抽出研究-Pilot Study」第58回日本老年医学会 (金沢市) 2016.6.

清家理, 大久保直樹, 住垣千恵子, 藤崎あかり, 佐治直樹, 武田章敬, 鷺見幸彦, 鳥羽研二, 櫻井孝 「認知症家族介護者に対する包括的教育支援効果の因果関係——RCTからSEMによる探索研究」第58回日本老年医学会 (金沢市) 2016.6.

清家理 「行政基幹型『認知症初期集中支援チーム』介入による効果検証」第17回日本認知症ケア学会大会, シンポジウム講演 (神戸市)

2016.6.4.

Seike, A., Sumigaki, C., Fujisaki, A., Okubo, N., Sigesada, Y., Kajino, Y., Saji, N., Takeda, A., Toba, K., & Sakurai, T. "A Comprehensive Education Program Change for Dementia Carers: Effect Validation with A Randomized Crossover Trial." AAIC in Toronto, 2016.7.

清家理, 熊野英介, 幣憲一郎, 青山朋樹, 荒井秀典, 吉川左紀子「自助・互助・近助強化プログラムによる認知症啓発活動——京町家『くらしの学び庵』プロジェクト」第6回日本認知症予防学会(仙台市) 2016.9.24. (2016年度浦上賞受賞)

清家理「家族・介護者のケア」第3回老人保健施設管理医師研修会(東京都) 2016.10.1.

櫻井孝, 清家理, 大久保直樹, 住垣千恵子, 竹内さやか, 藤崎あかり, 鳥羽研二「認知症家族介護者向け包括的教育支援programの効果——Randomized crossover trial検証」第35回日本認知症学会学術集会(東京都) 2016.12.1.

清家理, 住垣千恵子, 大久保直樹, 竹内さやか, 藤崎あかり, 鳥羽研二「認知症家族介護者に対する包括的教育支援効果の因果関係——RCTからSEMによる探索研究」第35回日本認知症学会学術集会(東京都) 2016.12.1.

社会活動

京都府看取り対策プロジェクトACP推進ワーキング委員.

向日市地域包括支援センター運営協議会会長.

向日市高齢者福祉計画及び介護保険事業計画策定委員会委員長.

畑中千紘

著書

畑中千紘 (2016) 「非定型化する若者世代のころ——現代の対人恐怖とアグレッションのかたち」河合俊雄, 田中康裕編『発達の非定型化と心理療法』創元社, 156-179.

論文

Hatanaka, C. (2015) "The Apparent Lack of Agency, Empathy, and Creativity among Japanese Youth: Interpretations from Project Test Responses." *Psychologia*, Vol. 58, No.4, 176-188.

畑中千紘, 田中崇恵, 加藤のぞみ, 小木曾由佳, 井芹聖人, 神代末人, 土井奈緒美, 長谷川千紘, 高嶋雄介, 皆本麻実, 河合俊雄, 田中康裕 (2016) 「発達障害のプレイセラピーにおける保護者面接の意義と可能性」『箱庭療法学研究』29 (2), 17-28.

皆本麻実, 畑中千紘, 梅村高太郎, 田附紘平, 松波美里, 岡部由菜, 粉川尚枝, 鈴木優佳, 河合俊雄, 田中康裕 (2016) 「診断を受けながらも発達障害とは見立てられない事例の特徴」『箱庭療法学研究』29 (2), 43-54.

学会発表

畑中千紘「大学生のSNSコミュニケーション場面にみられる対人不安とアグレッションの分析——PFスタディ風質問紙を用いて」日本箱庭療法学会第30回大会(帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.15-16.

粉川尚枝, 松岡利規, 田中康裕, 河合俊雄, 畑中千紘「夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連」日本箱庭療法学会第30回大会(帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.15-16.

田附紘平, 畑中千紘, 梅村高太郎, 皆本麻実, 松波美里, 岡部由菜, 粉川尚枝, 鈴木優佳, 西珠美, 大場有希子, 松岡利規, 望月陽子, 河合俊雄, 田中康裕「発達障害のプレイセラピーにおけるネガティブな事象——発達検査, 日常生活の検討を含めて」日本箱庭療法学会第30回大会(帝塚山学院大学, 大阪狭山市) 2016.10.15-16.

Konakawa, H., Kawai, T., Tanaka, Y., Matsuoka, T., Hatanaka, C., & Umemura, K. "The relationship between sense of self of dream I and the structure of dreams." International Association for Analytical Psychology Congress in Kyoto 2016,

Kyoto International Conference Center, 2016.8.28-2016.9.2.

畑中千紘「現代における物語と心理療法のかたち——イメージの断片化と自己再生産の視点から」日本ユング心理学会第5回大会(学習院大学, 東京都) 2016.6.11-12.

Hatanaka, C. "The dreams of a woman in her 20's who diagnosed as ADHD." Dr. Giegerich Dream Seminar, Berlin Germany, 2017.2.7-8.

畑中千紘「現代の子どもと発達の非定型化——食とところ」貝塚市教育研究センター主催, 栄養教諭・食育担当教職員研修会(貝塚市教育研修センター, 貝塚市) 2017.3.3.

畑中千紘「現代の子どもと発達の非定型化」全国学校栄養士協議会京都府研究会「学校関係栄養士研究会」(公益財団法人京都府学校給食会, 宇治市) 2017.2.17.

畑中千紘「臨床的に話を聴く」公益財団法人大阪府学校給食会主催「平成28年度栄養教諭支援セミナー」(大阪赤十字会館, 大阪市) 2016.11.23.

畑中千紘「子どもの発達の非定型化——発達障害への心理療法的アプローチプロジェクトより」公益財団法人大阪府学校給食会主催「平成28年度栄養教諭支援セミナー」(大阪赤十字会館, 大阪市) 2016.10.28.

柳澤邦昭

著書

柳澤邦昭 (2017) 「時間のご利用は計画的に」「死を意識すると, 不安になるのはなぜ?」谷口淳一, 相馬敏彦, 金政祐司, 西村太志編『エピソードでわかる社会心理学——恋愛関係・友人関係から学ぶ』北樹出版, 22-23, 102-103.

柳澤邦昭, 阿部修士 (2016) 「社会神経科学」北村英哉, 内田由紀子編『社会心理学概論』ナカニシヤ出版, 365-385.

講演, 学会発表, ワークショップ等

Yanagisawa, K., Abe, N., Kashima, E. S., & Nomura, M. "Neural evidence of an anxiety-buffering function of elf-esteem." 9th Annual Meeting of the Society for the Study of Motivation, (Chicago, USA) 2016.5.26.

Ueda, R., Yanagisawa, K., Ashida, H., & Abe, N. "Why do some people engage in immoral love?: Insights from neuroimaging and implicit association test." 31st International Congress of Psychophysiology, Yokohama, Japan, 2016.7.24-29.

Yanagisawa, K., Kashima, E.S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N. "Thinking about death increases temporal discounting: an fMRI study." 31st International Congress of Psychophysiology, Yokohama, Japan, 2016.7.24-29.

柳澤邦昭, 阿部修士「見知らぬ他者の存在がもたらす時間割引の抑制効果」日本社会心理学会第57回大会(関西学院大学, 西宮市) 2016.9.17-18.

柳澤邦昭, 阿部修士「日々の幸福感を満たす期待——物質主義者のパラドクス」日本グループ・ダイナミックス学会第63回大会(九州大学, 福岡市) 2016.10.9-10.

上田竜平, 柳澤邦昭, 蘆田宏, 阿部修士「浮気欲求への抵抗——潜在的・顕在的抑制機能の認知的説明」関西心理学会第128回大会(京都大学, 京都市) 2016.11.3.

柳澤邦昭「死すべき運命を知る人は, いまある時間の価値を知る」第439回関西社会心理学研究会(KSP)(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2016.12.17.

柳澤邦昭「死関連思考の神経基盤の検討」東北大学加齢医学研究所, 人間脳科学セミナー第1回: 情動と認知の相互作用(東北大学加齢医学研究所, 仙台市) 2017.2.17.

上田竜平, 柳澤邦昭, 蘆田宏, 阿部修士「恋愛関係の維持における, 交際期間に依存した腹外側前頭野の抑制機能」第19回日本ヒト脳機能マッピング学会(京都大学, 京都市) 2017.3.9-10.

●2016年10月1日 吉岡洋教授が美学会会長に就任。

●10月8日・15日・22日 「支える人の学びの場 医療および教育専門職のためのこころ塾2016『発達障害の理解と支援：先端の知と実践をつなぐ』」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。(第1回10/8) 講義：乾敏郎(追手門学院大学心理学部教授/センター特任教授)「感情と身体性：感情の役割とその神経機構」、明和政子(京都大学国際高等教育院/大学院教育学研究科教授)「周産期からの身体感覚と認知機能の発達」、実践報告：小川詩乃(京都大学大学院人間・環境学研究科/日本学術振興会特別研究員PD)・田村綾菜(愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所リサーチレジデント)。(第2回10/15) 講義：乾敏郎「円滑なコミュニケーションを支える神経機構」、村井俊哉(京都大学大学院医学研究科教授)「『社会性』という観点からみた精神科の病気と臨床」、事例報告：山本香織(市立福知山市民病院作業療法士)。(第3回10/22) 講義：乾敏郎「言語・非言語コミュニケーションの神経機構」、岩宮恵子(鳥根大学教育学部教授/臨床心理士)「イマドキの思春期の問題を考える——ネットのなかに拡散していくこころ」、事例報告：小松則登(愛知県心身障害者コロニー中央病院作業療法士)。いずれの回も講義後グループディスカッション、講師とのQ&A、司会：吉川左紀子。受講者数：87名。

●10月10日 第2回京都こころ会議シンポジウム「こころの内と外」(於：京都大学芝蘭会館稲盛ホール)。開会の挨拶：吉川左紀子、研究会報告：河合俊雄「こころの内と外：こころ研究会から」、講演：赤坂憲雄(学習院大学文学部教授)「遊動から定住へ——そのとき、こころの変容は起こったか」、総合討論：赤坂憲雄、池上高志(東京大学大学院総合文化研究科教授)、山極壽一(京都大学総長)、河合俊雄、閉会の言葉：湊長博(京都大学理事)。司会進行：



第2回京都こころ会議シンポジウム

内田由紀子。参加者数：230名。後援：公益財団法人稲盛財団。

●10月13日 第8回ブータン文化講座(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講演：ラムケサン・チューペル(ブータン王国工芸品振興事業団CEO)「ブータンの民芸品」、司会：熊谷誠慈。参加者数：31名。

●9月30日、10月14日・21日、11月11日・18日 こころの思想塾「『経済』の『大転換』を考える」(於：稲盛財団記念館3階中会議室)。講師・オーガナイザー：佐伯啓思(センター特任教授/京都大学名誉教授)、受講者数：27名。

●11月 下條信輔センター特任教授(カリフォルニア工科大学教授)が平成28年度日本心理学会国際賞の特別賞を受賞。内田由紀子准教授が同賞の奨励賞を受賞。

●11月 梅村高太郎研究員が日本箱庭療法学会第30回大会で日本箱庭療法学会河合隼雄賞を受賞。

●11月 上田祥行助教と藤野正寛日本学術振興会特別研究員(教育学研究科)による共同研究が日本マインドフルネス学会第3回大会最優秀研究賞、最優秀ポスター発表賞を受賞。

●11月13日・27日、12月4日・18日・25日、2017年1月8日・22日 「孤立防止のための自助・互助強化プログラム開発研究『京町家暮らしの学び庵』中級第1期」(第1回～第4回)於：風伝館/京都市上京区、[第5回～第7回]於：稲盛財団記念館3階大会議室。[第1回11/13] テーマ：高齢者に関わるための知識①、講師：吉川左紀子「こころを整え

る」、幣憲一郎(京都大学医学部附属病院)「健康長寿に必要な食の考え方」(栄養学)。(第2回11/27) テーマ：高齢者に関わるための知識②、講師：小山秀司(秀司法書士事務所)「経済的状況整理」、中村典子(京都市保健福祉局長寿社会部長寿社会課)・寺田玲(京都市社会福祉協議会)「地域の支援体制」。(第3回12/4) テーマ：高齢者に関わるための知識③、講師：南部慎一(京都府健康福祉部高齢者支援課)「看取りの文化づくり」、梶田真章(法然院住職)「穏やかに人生を全うするために」。(第4回12/18) テーマ：高齢者に関わるための演習①、講師：三宅聖子(東京都渋谷区障害者福祉センター)「いきいきした心づくりとつながりづくり」。(第5回12/25) テーマ：高齢者に関わるための知識④、講師：荒井秀典(国立長寿医療研究センター)「老年医学・健康総論」、清家理「支援を要する人への関わり」。(第6回1/8) テーマ：高齢者に関わるための演習②、講師：荒井秀典(国立長寿医療研究センター)「健康な身体づくりとつながりづくり」。(第7回1/22) テーマ：まとめ・修了式「地域住民みんながよりよく生きていくためにできること」(グループ演習+行政意見交換)。共催：公益財団法人信頼資本財団、後援：アマタグループ、京都市、京都市教育委員会、京都大学医学部附属病院、京都地域包括ケア推進機構、京都府、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、文部科学省 地(知)の拠点整備事業(50音順)。当期のべ受講者数：150名。

●11月22日 第9回ブータン文化講座(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講演：安藤和雄(京都大学東南アジア研究所准教授)「アジアの農耕文化からみた東ブータン：東南アジア・バングラデシュの農具・作付体系・古代遺跡を中心に」、司会：熊谷誠慈。参加者数：37名。

●12月1日・2日 こころの未来脳科

学集中レクチャー2016「意識学のすすめ」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講師：金井良太((株)アラヤブレインイメージング代表取締役CEO)、司会：阿部修士。参加者数：117名。

●12月11日 京都大学こころの未来研究センター研究報告会2016「こころの拡がり」と未来」(於：稲盛財団記念館3階中会議室/ポスター会場：大会議室)。開会の挨拶：吉川左紀子、研究報告1：小村豊「意識は、自然科学に『こころ』を開くのか?」、研究報告2：広井良典「持続可能な社会、持続可能なこころ」、研究報告3：吉岡洋「アートとこころの未来」、ポスターセッション+休憩、[ディスカッション] ディスカッサント：仲野徹(大阪大学大学院生命機能研究科/医学系研究科教授)、伊勢武史(京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)、閉会の挨拶：河合俊雄。司会：内田由紀子。参加者数：75名。

●12月11日 京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門2016年度研究報告会「多様化するこころと共生」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。センター長挨拶：吉川左紀子、来賓ご挨拶：丸山登(公益財団法人上廣倫理財団事務局長)、上廣こころ学研究部門の取り組み紹介：河合俊雄、研究報告1：カール・ベッカー「多様化するこころと倫理」、研究報告2：阿部修士「利己性の制御と幸福感：心理学と脳科学の視点から」、研究報告3：清家理「認知症をもつ人と家族介護者双方のWell-beingとストレスコーピング：医療倫理学・社会福祉学・老年医学の視点から」、研究報告4：畑中千紘「非定型化する現代のこころ：臨床心理学の視点から」、研究報告5：熊谷誠慈「アジアの精神性と幸福観——インド、チベット、ブータンを中心に」、総括：広井良典。司会：熊谷誠慈。参加者数：114名。

●2017年1月12日 第10回ブータン文化講座(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講演：タクル・S・ポードル(ロイヤルティンブ大学学長/元ブータン王国教育大臣)「ブータンの教育」、司会：熊

谷誠慈。参加者数：56名。

●1月13日 第39回こころの未来セミナー「晩年の生き方を考える」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講師：三木竜介(京都大学医学研究科社会健康医学系/医師)、カール・ベッカー。参加者数：約100名。

●1月24日 第12回ヒマラヤ宗教研究会国際ワークショップ(於：百周年時計台記念館2階国際交流ホールIII)。講演：ケンポ・ツルティム・ロドゥー(ラルン五明仏学院・副院長)「環境問題と仏教チベットにおける環境問題と仏教寺院の取組み」、[ディスカッション] ディスカッサント：広井良典、熊谷誠慈、司会：熊谷誠慈。

●1月31日 学術広報誌『こころの未来』第16号(特集「公共政策」)刊行。

●2月28日・3月1日・3月2日 2016年度こころの科学集中レクチャー「こころの謎——文化規範の生成プロセス」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講師：北山忍(ミシガン大学心理学部教授/センター特任教授)、嘉志摩佳久(メルボルン大学心理学部教授)、内田由紀子(講師と司会)。参加者数：35名。

●3月3日 京都大学丸の内セミナー(主催：京都大学研究連携基盤、於：京都大学東京オフィス/千代田区丸の内)に小村豊教授が登壇。講演題目「意思決定の脳科学」。

●3月5日 「孤立防止のための自助・互助強化プログラム開発プロジェクト2016年度シンポジウム：認知症ケアを問い直す：人間らしくあるということ——ユマニチュード」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。開会挨拶：吉川左紀子、基調講演1：本田美和子(国立病院機構東京医療センター総合内科医長/医療経営情報・高齢者ケア研究室長)「日本のケアを切り拓く——ユマニチュードの価値と意義」、基調講演2：イヴ・ジネスト(ジネスト・マレスコッティ研究所長)「ユマニチュードのもつ可能性と未来」、※逐次通訳(仏・日)高野勢子、発表：清家理「医療福祉学から見たユマニチュード」、吉川左紀子「心理学から見たユマニチュード」、中

澤篤志(京都大学情報学研究科知能情報専攻准教授)「情報科学から見たユマニチュード」、[ディスカッションおよび質疑応答]「認知症ケアの未来を切り拓く——人間らしくあることを支えるために」、登壇者：イヴ・ジネスト、本田美和子、中塚晶博(京都大学東南アジア地域研究研究所人間生態相関研究部門[フィールド医学]連携准教授、榊原白鳳病院神経内科医師)、大久保直樹(国立長寿医療研究センターもの忘れセンター副看護部長)。後援：京都市、京都市教育委員会、京都府、京都地域包括ケア推進機構、文部科学省 地(知)の拠点整備事業、公益財団法人ひと・健康・未来研究財団。参加者数：188名。

●3月11日 京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの挑戦——地球社会の調和ある共存に向けて」(主催：京都大学、京都大学研究連携基盤、於：石川県天教会館)で吉岡洋教授が講演、吉川左紀子センター長がパネルディスカッション司会で登壇。

●3月20日 国際会議「美術と社会的関与～Art and Community Engagement～大学の知を生かした多角的な姿勢研究事業[研究事業名] iCulture コンセプトに基づくまちづくりの新たな提案」(京都市立芸術大学芸術資源研究センターと共催、於：元崇仁小学校・京都市下京区)。趣旨説明：吉岡洋、講演1：グナラン・ナダラン(ミシガン大学教授)「芸術と社会的関与」、講演2：カロリナ・ブレグワ(美術家)「参加と関与としての映像作品」、ディスカッション：カロリナ・ブレグワ、グナラン・ナダラン、加須屋明子(京都市立芸術大学教授)、吉岡洋。司会：加須屋明子。参加者数：約50名。

●3月21日 第7回 京大おもしろトーク「アートな京大を目指して」(主催：京都大学、於：京都大学百周年記念ホール)に吉川左紀子センター長がモデレーター、吉岡洋教授がパネリストとして登壇。